
緋弾のエリア -偽りの武偵-

げんとく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア - 偽りの武偵 -

【Nコード】

N3017U

【作者名】

げんとく

【あらすじ】

イ・ウーに属する、椎名紅葉は、教授より

「私の曾孫を守ってほしい」

と頼まれる。そのために、武偵校に転入する！

けど内心では依頼をこなす気がない！

キンジとアリアが会う時、彼らを守る者の話が始まる。

主は、小説の書くのが初めてですのでお見苦しいところもあると思いますが生暖かい目で見守ってください。ネタバレあり

プロローグ（前書き）

はじめまして、げんとくと申します。

説明のほうでも書かしていただいています。小説を書くのが今回初めてなのです。

駄文などと、思う方もいらっしゃるかもしれませんが、精一杯書かせていただきます。

プロローグ

ビルの屋上に、少女がいる。

少女の名前は椎名 紅葉^{くわは}

今日から東京武偵校に転入する予定だ。

彼女は、男子寮の一室を見ている

その部屋の住人・遠山キンジは、朝からだらだらしている。

いつも乗っているバスの時間が迫っていることを忘れていて。

時計を見ると時刻は7時55分だ。

「やっぱ、少しだらだらしすぎたか。これじゃあバスに乗り遅れちゃう」

そのバスの発車時刻は7時58分。

寮から出てバス停まで3分で行けるはずがない。

完全に乗り遅れることを誘ったキンジは、自転車で登校することにしたようだ。

「もし、神崎・H・アリアがここ《東京武偵校》に来なければ、彼
はこれから起きることに巻き込まれないのかもしれない。教授が彼^{プロフェッショナル}
女に『緋弾』を撃たなければ、彼は望み通り何事もなく一般校に行
けるかもしれない」

しかしそれはあくまで『もし』のことだ。

「キンジさんの日常は今日を境に変わり始める。^{プロフェッショナル}教授の意図は関係
なく、私個人の意思であなた達を守ってみせる」
自転車をこいだしたキンジを見つめながら、

「今日、いつものバスに乗り遅れたことをあなたは後悔するでしょ
う」

彼・遠山キンジは確かに後悔するであろう。バスに乗り遅れたこと

を。

神崎・H・アリア・・・彼女が空から降ってくるのだから

プロローグ（後書き）

次回はオリ主のキャラ設定を書く予定です。

オリジナル主人公設定（前書き）

初期設定ですので、途中で変更することがあるかもしれません。

オリジナル主人公設定

名前：椎名 紅葉

年齢（外見）：10歳 性別：女

身長：146.2 体重：36.5

瞳の色：赤 髪型：おもにポニーテール 髪の色：白銀

強襲科^{アサルト} 2年 Bランク

使用武器

主に「仕事」で使用分

HK416（スナイパーカスタム・サプレッサー付・20発マガジン使用。発射方式はセミ・三点バースト（フルオートを変更））

H&K USP.45（サプレッサー付き）

小太刀（刀身約40cm程）

上記のうち、銃器には左面に、小太刀には刀身にそれぞれ「イ・ウ」と彫っている。

おもに武偵して使用

M93R（フォアグリップを外している。デュアル）

ダガー（刀身約20?）

詳細設定

某竹を取っていたお爺さんの物語に出てくる薬を焼く前に中身をすり替え、飲用し不老となった。その為、星伽に目を付けられたびた

びのいざこざで着いた能力が、速さに関すること（速さに関すること）においてすべての向上。例、記憶する速さ・移動する速さ）。不老により実の年齢は不詳。

数十年前より「仕事」を受けており、音も姿もなく仕留めることから「すがた姿音無き狩人」と呼ばれている。

絶対半径は1627m

オリジナル主人公設定（後書き）

銃に関しては、416は自分の趣味バリバリ出しています。

416の電動ガン持っているんですが・・・この話はまた今度で

オリキャラの設定ですが

やっぱチートですね（汗

いちお、今度下方修正考えときます

1st bullet

いつものバスに乗り遅れたキンジは、自転車に乗り学校に行くことにした。

いくら転校したくても1学期の初日から遅刻するのはよくないだろ？

キンジ side

「その チャリには 爆弾 が 仕掛けて ありやがります」

機械音が切り取った文字で作ったような脅迫文を読む。

「チャリを 降りやがったり 減速 させやがると 爆発 しゃがります」

この機械音どつかで聞いたことがあるな。ああ、ネットで人気の歌って踊れるボーカロイドだな。

そんなことを思い出した後、聞こえてきた音声の一部を思い出す。

- 爆弾が仕掛けてやがります・・・だと？

朝っぱらからなんだよ。どこのバカの冗談だ。

周りにそのバカがいらないかと周囲を見回すと、セグウェイが併走してきていた。

「助けを 求めては いけません。ケータイを 使用した場合も 爆発 しゃがります」

そのセグウェイは無人。人がいるべき場所には、スピーカーと・・・UZIが載っている。

秒間10発の9パラを撃ち出す銃口が俺を見つめる・・・

「ちよっ・・・何のいたずらだ！」

叫んでも、セグウェイは答えない。

そのまま、俺に銃口を向けたまま併走してくる。

朝っぱらからいったい何なんだよ!?

混乱している頭で、チャリに付けられているであろう爆弾を探す。するとサドルの裏に、探していた物らしいのがあった。その物体に指をなぞらせる。

詳しくはわからないが、多分C4っぽい。しかもこのサイズはチャリどころか車まで跡形もなく消し飛ばせるサイズじゃねえか。

やられた。これはイタズラなんかじゃない。

はめられた。チャリを乗っ取られた。

-世にも珍しい、チャリジャックじゃないか

紅葉side

キンジが自転車を乗っ取られる状況を女子寮の7階のベランダから眺めていた。

上には『H』がいるからその一つ下の誰か知らない人の部屋のベランダにお邪魔している。

全力でチャリをこいでいるキンジを見て、

このご時世にチャリジャックに会うなんて運がいいのか悪いのか正直今すぐに彼を助けたいけど、上にいる彼女が助けようとしているのに私が助けるわけにはいかないでしょう。

それに彼女の実力を知りたいのですよ。

噂では今まで犯罪者を一度も逃がしたことがないとか、二つ名は『双剣双銃のアリア』だとか。

あくまでそれは噂だから本当かはわからない。まあ本当なんだろうけど。

彼女の実力をこの目で一度は見ておきたいから。

(彼が来たね)

キンジは、何もできずに自転車をこいできた。
その横には相変わらずセグウェイが併走している。
すると、屋上にいる彼女が飛び降りた。

キンジ s i d e

俺はこのありえない状況の中、さらにありえないものを見た。

グラウンドの近くにある7階建てのマンション・多分、女子寮・の
屋上の縁に女の子が立っていた。ん？7階のベランダにも誰かいる
な。軽く手を振っている。

ベランダの方の子に気を取られていると、屋上にいる女の子が、飛
び降りた。

(飛び降りた！？)

驚いてペダルを踏み外しそうになる。

ツインテールをなびかせ、空中に身を躍らせたその子は、パラグ
ライダーを空に広げていた。

チャリをこぎながらその光景を見ると、こっちにめがけて降下
してくる。

「バカ野郎！こっちに来るな！このチャリには爆弾g」ほらその
バカ！頭を下げなさいよ！」「

俺が叫び終わる前に、少女が叫んできた。

バリバリバリッ

俺が頭を下げるより早く、黒と銀の大型拳銃でセグウェイを銃撃し
た。

(うまい)

なんて射撃の腕だ。あんな子うちの学校にいたか？

二丁拳銃をホルスターに戻すと少女が俺の頭上に飛んできた。

俺は少女から逃げるように第2グラウンドに入る。

「来るなって言っただろ！このチャリには爆弾が仕掛けられてんだ

「減速すると爆発する！お前も巻き込まれるぞ！」

「バカっ！」

俺の真上来た少女が俺の頭を踏みつけてきた。

「武偵憲章第1条！……いくわよ！」

『いくわよ』って、一体何する気だ？

もしかして俺を助ける？でも、どうやって？

ブレーキコックのハンドルに足のつま先をかけて、逆さ吊りの姿勢になった。

「マジか……」

相手の意図がわかったので、俺は全力でチャリをこぐ。

少女は両手を広げる。

2人の距離はみるみる縮まり、

そして、俺は少女と抱き合い、そのまま空にさらわれ……

ドガアアアアアアアンッ！

1st bullet (後書き)

一回で書いたので読みにくいかもしれません。

後、できるだけ原作通りに書いてくつもりです。

更新ですが三日くらいに1回更新する予定です。

ただ近日中に期末テストがありますので、更新が遅れるかもしれません。

そしてこの夏を乗り越えられる気がしない(汗

2nd bullet (前書き)

前回と違いこれからは紅葉視点オンリーです

2nd bullet

爆発音が聞こえた。

発生元はキンジの自転車だろう。

あの二人がどうなったのか確かめたいが、ここからでは見えない・
・

「よし、そろそろ動こうかな」

どこの誰か知らない人の部屋のベランダから柵を乗り越えて飛び降りる。

「お邪魔しました」

空中でさつきまでいた部屋に挨拶をしとく。

これで不法侵入もチャラに・・・ならないか。

すとつ、と着地する。もちろん落ちてる時に減速をできるだけしたよ？

ダガーで壁削りながらとかね。

「さて二人はどうしてるのかな」

ゆっくりと歩きながら、第2グラウンドの入り口を探しに行った。

入り口の方（多分）向かっていると7台のセグウェイが道路を走っていた。

「あ・・・さつきのセグウェイだ。・・・ってことはこっちであつてるね」

そのセグウェイを追いかけるとその先には体育倉庫があつた。

うん・・・二人はあの中だろうけど無事なのかな？

ガガガガガガッ！

どうやら先ほどのセグウェイが体育倉庫の中に発砲したようだ。
狙いは・・・跳び箱？・・・なんで？

（ああ、あの中に二人いるんだ。あれだけ、狭いところでくっついてたらHSSになるはずなんだけど。

どうみてもなつてないよねえ・・・ちえっ、キンジのHSSがどのくらいかここで見ておきたかったのに。）

ババンツ！ ババババツ！

倉庫の中からガバメントの発射音が聞こえてきた。

ここから見える限りでは神崎は気付いてないようだが、思いっきり胸がキンジの顔に押し付けられている。

（もしかしてこれは、あれになつてくれるんじゃない・・・）

ガバメントの射程外に逃げたセグウェイは並木の後ろに隠れている。（これが某蛇さんだったら見つかった瞬間に、テレンツ！、とかなったりしたりして）

そう考えて、小さく笑い、HSSに入ったキンジの方を見る。

「さてどう動くかな・・・」

キンジが跳び箱からアリアをお姫様抱っこしながら飛び出した。

ズガガガガッ！

またセグウェイが無駄弾を撃つ。

武偵校っているんなとこ防弾だからおそらくあの壁も防弾だから、撃つても意味ないのに。

すると、M92Fを抜いたキンジが出てきた。同時に7つのUZIが発砲する。

全て当たらない・・・HSSキンジには見えてるみたいだ。

キンジは弾を避けた体勢のまま、左から右にフルオートで応射した。

全弾命中。しかも銃口に入っていく。

セグウェイを潰した後、キンジは倉庫の方に戻っていく。その、振り向き際に追加のセグウェイが来たのだ。

キンジは強いよ。だけど、あまい・・・

「あんた！危ない！」

神崎に言われて後ろを向くキンジ。だが、遅い・・・

「ちっ、目立ちたくないのになっつと」

両足の太ももに付けてあるホルスターからM93Rを2丁抜く。

「君たち！当たったらごめんよ！」

セグウェイの数は6・・両方とも3点バーストに切り替え即座にセグウェイに発砲する。

バババババツ！

片方がほんの少し遅れたがセグウェイのUZIが発砲するほどの時間ではない。

そのまま後ろに振り向き、2回ずつトリガーを引く。

後ろから来ていた10台のセグウェイも潰す。

「遠山キンジ。今の状態の君は強い。だが、一瞬の油断が死を招く。それを忘れるな」

M93Rをホルスターにしまう。

「君たちとは近いうちにまた会うよ」

そのまま教室に向かう。

やれやれ、初日から遅刻はまずいじゃないか。あとで、理子をぼこぼこにしてやるう。

後ろからは、犯罪じみたセリフが聞こえてきたが、気にしない・・・うん、気にしない。

あの後、2年A組に向かった。なんか、神崎まで来た。ドオユウコ

ト？

シャーロックめ・・・このこと知っていて教えなかったな、あいつ次あつたらぼっこぼこだ！

神崎は神崎で、キンジが入ってくるなり「あいつの隣がいい」とか言い出すし、武藤ってやつは「俺、神崎さんに席譲りまーす。代わりに、椎名ちゃんの隣にしー・・・なんでもないです」とか言ってたな。

私の席はどうやら窓側の一番後ろだ！目立たなくて済むから場所的には嬉しいが、男子の大半がこっちを見ている。一言でいうなれば、うざいな。

私が席に座ると同時にアリアがベルトをキンジに返した。

するとバカ理子が、

「理子分かった！分かつちゃったよ！・・・これ、フラグばつきばきに立ってるよ！」

お前は死亡フラグがばつきばきに立ってるぞ。(。・m・)クスクス

「キーくん、ベルトしてない、そし(以下略)」

このバカどうやってぼっこにしているのか。

ふふふふふふふ。

「キーく(以下略)」

ん？なんか周りがすごい盛り上がってる。一体何があった？

なんか、キンジの悪口っぽいのが聞こえる。

「キンジがこんなかわいい子といつの間になんて？」「影の薄い奴だと思っていたのに！」「俺より先にリア充になるなんて」「フケツ！」

「お前の本命は白雪ちゃんが本命と思っていた！」「お前に絶望した！」

言われたいほうだいな・・・キンジは机に頭を抱えて突っ伏したときに

ババンッ！・・・カランカラン・・・

2発の銃声が、クラスの奴らを一気に静ませた。

(撃つたの神崎か、危うく撃ちかけたあ。癖ってこわいなあ)

「れ、恋愛だなんて・・・くっだらなない！」

バカ理子は変な恰好のまま、ず、ず、と着席。

しかし、こいつほんとにシャーロックの子孫なんだよなあ・・・似てない・・・

「全員覚えていなさい！そういうバカのこと言うやつには・・・風穴開けるわよ」

過激な子だなあ、とか思った私・・・神崎に風穴開けられる程度じゃやってけない世界で生きてきたし。

ところで、風穴ってなに？

2nd bullet (後書き)

G線やりながら書いていたのでかなり時間がかかりました。

この夏は死人が多そうです。

自分もそのうちの一人になりそうです

3 r d b u l l e t

この東京武偵校では午前是一般科目、午後からが専門科目を受けることになっている。

今は午前の授業、つまり一般科目が終わり昼休みに入った。

昼休みに入った途端キンジはクラスの生徒達に質問責めにされていた。

「ここはうるさいですね・・・どこかの屋上に出て、のんびりしましょうか・・・はあ」

誰にも気付かれぬように教室を出て、理科棟の屋上に出てきた。

「しかし、ここは平和ですよ。誰も裏の世界の事情を知らないからこそ安心してここにいる。」

空を見る。空は雲がちらほら浮いているが晴れている。

ガチャッ

扉が音を立てて開いた。そこにはクラスの生徒達から逃げ出してきたであろうキンジがいた。

溜息を吐きながらしょぼくれているように見える。まあ、あのバカな生徒達の質問なのだからこうなるのもわかる気がする。

どうせ質問は神崎とのことだろう。キンジに聞いたところで、何も答えられないだろう。キンジは今日神崎に初めてであったのだからキンジが入ってから、少ししてから数人の女子が喋りながら来た。キンジはこっそりと物陰に隠れた。

「さっき教務科から出てた周知メール（以下略）」

そんなメールが回っているんだ。さすがに自転車の爆発があったんだから黙っているわけにもいかないか。

「さっきのキンジ、ちょっと可哀相だったよねー」

「だねー。アリア、朝からキンジのこと探りまわってたもんね」

「もう一人の転入生の椎名さんだっけ？彼女のことも調べるらしいし」

「椎名さんもなんだ。そういうえば、アリア教務科の前にいたよ。主にキンジの資料漁ってるみたい」

「おもにってことは、椎名さんのことも？」

「そうみたいだよー。でも、椎名さんの資料って全然見つからないみたい」

「キンジも可哀相、女嫌いなのに、とりにもよってアリアだもんね。アリアってさ、ヨーロッパ育（以下略）」

私まで調べられたのか？。

ん？私も・・・えっ！まじ！どーしよ・・・絶対朝のあれだよねえ。神崎には目付けられなくなかったのに。後で、この原因となったバカをしめる。

「もうすぐ午後の授業が始まる時間でしょうか。そろそろいきますかねっつと」

下にいる女子&キンジに見つかるわけにもいかないの、そのまま飛んで（ジャンプの方ね）屋上から直接強襲科の専門棟に向かう。今日は自己紹介したりとか、いろいろしてたら帰る時間になりました。

自宅（未定）に帰ろうとすると・・・校門に誰かいますね・・・あのピンクのツインテールは・・・

カンザキダ カンザキガイルヨー

無視して帰ろう。うん、そうしよう

「ちよつとあんた！あんたよ！そのポニーテールのあんたよ！ちよつと無視するな！」

後ろで何か叫んでる？ワタシナニモキコエナイナーハハハ

- パパン！

銃声が聞こえた。その銃弾は私を狙う。けど、当たらない。なぜか？弾を切ったからに決まっている。

弾を斬るのに使ったダガーを後ろ腰に付けている鞘に戻す。

「危ないじゃん」

「やつと、私の話を聞く気になったのね」

・・・は？

「いやいや、めんどろなことはイヤなので」

「いいからついてきなさい！じゃないと風穴！」

人の意思は無視ですか？

つてかガバメント向けながらこつち睨まないでほしいですね。

「見逃してもらえない？」

「風穴開けられたい？」

「はあ・・・しょうがないですね。ついていくだけですよ」

これ以上は何をしても無駄と悟った私はしかたなく、そうしかたなく神崎についていくことにした。

ぼこぼこにするやつ一人追加だね。ふふふ。

そのまま、神崎についていくことしばらく……とある寮の前に来た。

その寮とは……

「神崎、聞きたいことが二つあるんだけど……」

「何を聞きたいの？」

「こここの寮に何の用なの？後、その」

「両方ともすぐにわかるわよ」

いやまあ、だいたいの予想はできるんだけどね

1つ目は、この寮にはキンジが住んでいる。そのキンジをパートナーにするためだろう。

2つ目は、恐らくだけどキンジをパートナーにするまで帰らないとかいいだすんだろう。

神崎がエレベーターで上に行った。しかも一人で……しようがないので私は階段で上にあがる。

神崎がちょうどエレベーターから出てきた。

「あら、早かったのね」

「そんなことないですよ」

神崎とは話が絶対に噛み合わないと思ったので軽く返す。

少し歩くとキンジの部屋が見えてきた。

神崎がインターホンを鳴らす

ピンポーン……

ピンポンピンポーン……

ピポピポピポピポピンポーン……ピンポーン……

「誰だ？」「遅い！あたしがチャイムならしたら速攻出ること！」
・か、神崎！？」

「アリアでいいわよ」

そのまま靴を玄関に脱ぎ散らかして、部屋に入っていく。

「お、おい」

キンジがそれを止めようと手を伸ばす、けど神崎の小さい身長のせいでかわされる。

私もとりあえずお邪魔する。

「おじやまs「待て、勝手に入るな！」・・・すみません」

「トランクを中に運んどきなさい！ねえ、トイレどこ？」

つつい、謝ってしまいましたよ。

神崎は室内の様子を見回して、トイレを発見するとその中に入っていきましたよ。ええ。

キンジと目があい・・・

「お前は確か・・・」

「椎名紅葉ですよ。えつとその・・・」

「お前はアリアに連れてこられたのか？」

「ええ、まあ、いちおうは・・・そうなりますね」

とりあえずトランクを部屋の中に入れる。これ以外に重い・・・
神崎がトイレから出てきて手を洗った後、リビングの奥の方まで進んで行って、

「あなたここ、一人部屋なの？まあいいわ」

なにかいいんでしょうか。少なくともここは男子寮ですよ。
その時点でよくないでしょ。

「キンジ。あなた、あたしのドレイになりなさい！・・・あと、紅
葉も！」

3rd bullet (後書き)

実は、明日から期末テストなんですよね。

小説書いてる暇あるなら勉強しろって友人にいわれました

とうゆわけで、勉強してきます。

4 t h b u l l e t

「キンジ。あなた、あたしのドレイになりなさい！・・・あと、紅葉も！」

さて、みなさん今日の議題が決まりました。

内容は『神崎・H・アリアには常識があるかどうか』です。議論するまでもない内容ですね。結論はNOです。絶対。

しかし・・・ドレイですか。少なくとも奴隷制度は日本以前に神崎の祖国だつてすでに廃止してるでしょう。はあ。

しかし、これでシャーロックの野郎をぼっこぼこにできるいい口実が手に入りました。gJ神崎。

つてか『あと、紅葉も』つて私はおまけですか。おまけなんですよ。うね。

「ほら！さつさと飲み物くらい出しなさい！無礼なやつね！」

無礼な奴はお前だろ。勝手にキンジの部屋に入り込んで、そのうえドレイ宣言つて・・・

しかしまあ、私にとっては都合がいいですね・・・

なんたつて住むとこ決めてないんですから。それに、ここにいればこの非常識ツインテールの護衛が楽ですし。

「コーヒー！エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！砂糖はカンナ！一分以内！」

いやいや、一般の高校生の家がそんなコーヒー作れるわけないですよ。まず、豆がないでしょ。

確か、エスプレッソルンゴはエスプレッソと同量の豆で倍の量を抽

出したものでしょ？ドツピオは豆を14g使ったやつだったけ？
まあ、私はコーヒーより紅茶だからね。

キンジの方をみると・・・ああ、とりあえずインスタントコーヒーを入れてるみたい。

インスタントコーヒーを出された神崎は、カップに鼻を近づけて香りを嗅いでいる。

「これホントにコーヒー？」

インスタントコーヒー知らないのか・・・いや、まあ、当然かな・・・
とりあえず、荷物を持ってきてもらつ手筈を整えるところしよう。

「ちよつと、電話するね」

ベランダに出て、携帯で電話を掛ける。

「もしもし」

「・・・」

「もしもし」

「誰？」

「紅葉だよー。少し前一緒に『仕事』したじゃんかー」

「ああ、思い出した。それより、一緒に『仕事』はしてないよ。『仕事』を頼まれただけ」

「そういえばそうだったね。それより、この前頼んでおいた物用意できた？」

「あと、二日ほど掛かると思う。だから、あと少し待ってて。用意できたらそつちに直接持つていく」

「りょーかい」

電話を切ると女子寮の方から一瞬光が見えた。

あれは・・・多分、レキさんだね。とりあえず手を振るとりあえず、あと一人に電話を掛ける。

「もしもし」

「君か・・・久しぶりだな。『仕事』の依頼か？」

「いや・・・武器の改造を予約しておきたくてね。いいかな」

「君の依頼ならいつでも受けるよ」

「すまないね。仕事は3日後以降になると思う」

「詳しいことが決まったら連絡してくれ」

「君にはいつも迷惑かけるね。じゃあ」

電話を切ると後ろから、買い物から帰ってきたキンジ達が夕食を食べようとしていた。

キンジはハンバーグ弁当、神崎は桃？・・・ああ、一昔前にブームになっていたももまんか。見た目は桃っぽいあんまんだ。

キンジは、目で「早く帰れ」って訴えてるが、神崎はももまんを食べて、ふにゅー、とか言って頬に手を当ててうっとりして味わっていた。

「・・・ていうかな、ドレイってなんだよ。どういう意味だ」

「強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活動をするの」

「何言っつてんだ。(以下中略) - 無理だ」

「あたしにはキラいな言葉が3つあるわ」

「聞けよ人の話を」

「『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』この3つは(以下略)」

「私はその言葉s「キンジのポジションは・そうね、あたしと一緒にフロントがいいわ」・・・私はどこなの？(半泣)」

「あんたは・・・あとで決めるわ」

後でって・・・私絶対いらないよね・・・
私個人としてはフロントはやだなあ。

実は、強襲科に入ってるけど・・・私狙撃の方が得意なんだよね。
レキさんには全然届かないけど・・・絶対半径2051mって・・・
私なんて1627mなのに。

東京の武偵は化け物か・・・

「とにかく帰ってくれ。俺は一人でいたいんだ。帰れよ」

「まあ、そのうちね」

「そのうちっていつだよ」

「多分キンジくん、君が神崎のパーティーに入るっていつまでだよ。
それまで私も帰れないだろうけど」

「その通りよ」

「いやだっというならどうする気だ？」

「言わないっというなら泊まっていく。紅葉あんたもここに泊まり
なさい」

やっぱりね。予測していたことが本当になったよ。

今日のキンジの運って最悪だね。

ということは、あのトランクはお泊りセットってことか。

私も着替えを調達しますかね。さっきへリが見えたので屋上に荷物が置いてあるはず。

「出てけ！」

ん？今のって神崎の声だよな？

そのセリフは普通はキンジのだよ。はあ。

「なんで俺が出て行かなきゃならないんだ！ここはお前の部屋か！」

「わからず屋にはおしおきよ！外で頭冷やしてきなさい！しばらく戻ってくるな！」

キンジが追い出された後、神崎に「着替えとってくる」「って言うって屋上に来た。」

「あ、あつたあつた」

屋上には頑丈そうな箱が置いてあつた。

ん？頑丈そうなの・・・？
なんで、こんな箱に入ってるの？

とりあえず箱を開けてみる。中に入っているのは・・・

「着替えと・・・なんで、これが入ってるの・・・」

そこには、『仕事』で使っているHK416・H&P・K U
SP・45、それに小太刀が入っていた。

見事に『イ・ウー』と彫っている場所に黒いビニールテープが張つてある。

シャーロックめ、神崎の護衛の依頼を『仕事』としてやれってことか。まあいいけど。

とりあえず荷物を持って部屋に戻ることにした。

「ただいま」

「帰ってきたのね。あたしは今からお風呂入るから」

とりあえず部屋に荷物を運ぶ。

・・・かなり重かった。

着替えの整理や『仕事』用武装の置き場を考えていると、玄関のドアが開いた。

そこには、先ほどの部屋を追い出されたキンジがいた。

「おかえりなさいです」

「アリアはいないのか？」

「残念ながら、いますよ。今入浴中ですね」

「ま、まじかよ」

若干パニックってるキンジに追い打ちをかけるように、

ピン、ポーン・

憤ましい、ドアチャイムの音が。

「椎名、お前ちょっと隠れててくれ」

キンジが私に言ってきたので、私は玄関から見えない場所にいった息をひそめる。

ドンっ！

よほど慌てているのか、途中で壁に思いっきりぶつかったようだ。

「キ・・・キンちゃんどうしたの？大丈夫？」

この声は、星伽白雪か・・・あの娘とは2年ほど前に会ったかな？
確かあの時は星伽からの依頼で出会ったんだっけ？

「あ、ああ。大丈夫」

キンジがドアを開けると、そこには巫女装束の白雪が立っていた。

「な、なんだよ。そんなカツコで」

キンジが妙にバスルームの方を気にしている。
今神崎に帰ってきた、ってばれたくないんだろうな。

「あつ・・・これ、あのね（以下略）」

「いや、別にいいからっ」

しかし、本当に緋m・・・白雪はキンジの事に関して積極的だ。

「ねえキンちゃん。今朝の周知メールの自転車爆破事件って・・・も
しかして、キンちゃんのこと・・・？」

「あ、ああ。俺だよ」

「だ、大丈夫？ けがとk「俺は無事だから。触んなって」・・・そ
う。無事でよかった。それにしてもキンちゃんを狙うなんて許せな
い！ 犯人を、八つ裂きにしてコンクリ・・・じゃない、逮捕するよ
！」

その前に私が犯人をぼっこぼこにしてやる！

さてと、相手が白雪なら隠れる必要もなさそうだな。

私は玄関の方に向かい、

「白雪、久しぶりだね。元気になっていたかな？」

「し、椎名さん！？」

驚いた顔で私を見る白雪

「お、お久しぶりです。どうして、椎名さんがキンちゃんの部屋に
！？」

「白雪、知り合いなのか？」

「うん。2年位前に私に稽古を付けていてくれたの」

キンジも驚いている。まあ、驚くのも無理はないだろうけど・・・

「それより、椎名さん。どうしてキンちゃんの部屋に？それになんで、武偵校の制服を着ているんですか？」

「武偵校にはちょっとした『仕事』をね。ここにいるのは少しキンジくんと話がしたくてね」

半分本当、半分嘘の話をする。キンジに目で「とりあえずここは、任せといて」と言っておく。

「そうなんですか。それでは、私は失礼させていただきます」

「ちょっと、その包み。キンジくんに渡すんでしょ？渡さなくていいの」

「あ、えと、はい、キンちゃん、タケノコごはん。私、明日から恐山に合宿で、ごはんつくってあげられないから」

「お、おう。ありがとうな」

「それじゃあ、帰るね」

「き、気を付けてな」

白雪が帰り、リビングに戻ろうとするとキンジがバスルームに入っていた。

まあ、神崎の武器を取り上げようと思ってるんだろう。

すると、

「へ…へんたい……」

あーあ、タイミングが見事に一致しちゃったみたいだね。

その後、キンジの顔に飛び膝蹴りがめり込んだみたい（本人談）

5th bullet

キンジの顔に飛び膝蹴りがめり込んだ夜、寝ようとベッドがある部屋に入ると・・・

「えーと、キンジくん。なんでクレイモア等々の対人地雷があるの？」

「俺に聞かないでくれ。仕掛けた当の本人に聞いてほしいのだが・・・」

キンジの視線の先には、「・・・ふふ・・・もまんピラミッド・・・」とヨダレを垂らしながら寝てる元凶が・・・

「私は、リビングのソファで寝させてもらっねー」

「あぁ」

危険度がかなり高いベッドルームからリビングに戻ろうとすると

「お前って白雪と知り合いだったんだな」

「白雪というよりは星伽と知り合いって言った方が正しいかな」

「どういうことだ？」

「星伽からの依頼でたまに巫女たちに稽古とか付けに行ったことがあんだ」

「へえ」

まあ、稽古って言っても武器の扱いだけじゃないんだけど・・・それは、トップシークレットなんだよね。

今度こそ、リビングに戻って寝るとしよう。

「バカキンジ！起きる！」

朝から大声を出してキンジを起こしたようです。ええ、私も思わず起きてしまいました。

携帯を探していると、隣から人間を殴ったり蹴ったりする音が聞こえてきますが気にしないでおきましょう。

いや、しかし朝っぱらからラブラブですね。え？違うの！？

なんだ、朝ごはんでもめていたんですか。まったく、私が楽しみにしている朝食の時間中に騒がないでほしいものですよ。まったく。

おや、キンジが神崎の攻撃を受け流したりしながら登校する準備をしていますね。

「アリアっ」

「なによう」

「登校時間をずらすぞ。お前、先に出ろ」

キンジが神崎のおでこを押さえて、命令(?)する。

いや、しかし、おでこを押さえられて手が届かなくなってる。これは面白い。

「私、先に出ときますね」

「ちょっと待ちなさい！あんたも、そう言って逃げる気でしょ！」

「急がないと58分のバスに乗り遅れますよ」

靴をはいてそのまま玄関から出る。

着替えなくても大丈夫かって？私の持つてる服のみ・・・しかも5、6着ほど。つまり私服≠制服ってわけさ。

バス停の前で待っていると、キンジが神崎を引きずりながらやって

きた。
キンジも大変だなあ。

いつも通り午前中は一般科目の授業を受け、午後は強襲科の専門棟へ行く途中に・・・

「ねえ、いいじゃんか」

「え、えつと、その」

・・・よくあるナンパですかね・・・

「少しだけだからさ」

「そ、その、私用事が・・・」

えーと、あの男どこかで見たような・・・
確か・・・3年のAランク自称モテ男の・・・高島恭介、的な名前のやつだったはず。多分。

「ねえ、ほんと少しだk」そこらへんにしところよ」「・・・あ？」

「その子困ってるじゃん。(自称モテ男の)強襲科3年Aランクの高島恭介さん」

「誰だお前」

「その子の知り合いですよ。あまりに帰ってくるのが遅いので心配になって来てみたら、ナンパをされているとは・・・」

「てめえ、名前は？」

「椎名紅葉」

「あ？この前転入してきた2年かよ。確かBランクだったか？」
「そうですよ」

高島先輩（なんとなく先輩と付けてみた）は少し考えて、私を見ると

「じゃあ、君d「おや、もうすぐ5時間目が始まりますね。行きましよう」「・・・おい！」

女の子の手を引いて、その場を立ち去る。

後ろで、何か喚いてますがこういう輩は無視に限ります。

どうせ、後で出会うんですし。まあ、その時が来たら・・・ふふふ。

「あ、ありがとうございます」

「気にしないでいいよ。困ってる子を見ると助けるのが普通でしょ。それより早くしないと授業遅れちゃうよ」

そのまま強襲科の専門棟へ向かう。いいことした後って気持ちいいよね。

5時間目が始まるや否や

「おい！」

さっきのナンパ男に声をかけられました。こいつ無視でいいですよ。よし、無視だ。

「てめえ、無視すんなや！」

パン！ -

周りの銃声の中にかき消されながらナンパ男が私に向けてガバメン

ト一発撃つ。まあ、しかし私は相変わらず斬ってしまうわけで。

「さすがに、後ろから撃つのはあぶないですよ」

「お前俺と勝負しやがれ」

いやいや、AランクとBランクじゃ、Aランク勝つに決まっているでしょ。

しかし、ここでボコっておけばさっきみたいな行動を控えるようになるんじゃない……

「別にいいですよ……」

「俺が勝つたら俺と付き合え！」

は？……こいつはバカなの？

こいつが一つ好きなことを言ったてことは私にも言う権利くらいありますよね？

「じゃあ、私が勝てば……2度とナンパしないでくださいね」

「ま、俺が勝つけどな！」

ナンパ男が銃を構えるより早く、銃を蹴り飛ばす。

そのまま投げの体勢に持っついていこうとすると、もう一つのハンドガン M92F - を取り出して発砲する。

「っ！」

弾丸を避けきれず直撃し、後ろに飛ばされる。

私も、M93Rを取り出そうとするが、

(今日は装甲貫通弾しか持ってきてない！)

重大な事を思い出し、M93Rを出すのをやめダガーを抜く。

(まずいなあ。なんで、装甲貫通弾なんか持ってきたんだろ)
相手との距離を測りながら、次の攻撃するタイミングを計る。

(弾なら斬れる。それなら、相手がリロードするタイミングを狙えば)

パアン、パアン

撃ち出された弾を斬りながら相手に近づく。

パアン、ガチャンっ！ -

弾を撃ち出し、スライドが下がったまま戻らない。

(今だ！)

「それ！」

「なっ！」

マガジンに手を伸ばしていて、反応できないうちにベレッタも蹴り飛ばし、のど元にダガーを突き付け。

「私の勝てーパアン そこまでだ」・・・え？」

銃声がした方を見ると・・・

(蘭豹がい・・・それになんで、こんなに周りが静かになっ
てるの？)

「やるじゃねえか、椎名。お前本当にBランクか？」

「ら・・・蘭豹先生・・・み、見ていたのですか？」

「途中からだけだな、それより・・・おい、高島、てめえAランク
だよなあ。なんでBランクに負けてんだ？」

「そ・・・それは・・・」

「後で、ちよつと、こいや」

「は・・・はい・・・」

（あれが蘭豹か・・・噂には聞いていたが・・・かなり、できるな）
蘭豹に高島が連れて行かれた後、私はひっそりと部屋の隅の方で放
課後まで過ごした。

何故かって？それは・・・みんなしてこっちを見てくるから・・・
あんまり目立ちたくないし・・・
今後の計画のためにも・・・

そう、ある計画を完遂するまではあまり目立つわけにはいかない
だ・・・

5 t h b u l l e t (後書き)

もうなんかぐだぐだですみません。

6th bullet

ナンパ男をぼこぼこにした翌日・・・の放課後
帰宅する途中にキンジを見つけ追跡している途中に・・・

携帯がなった。この着信音はメールだ・・・。
発信者は・・・登録してない人だね・・・まあいいや、とりあえず
内容を見るところでしょう。

『紅葉へ

頼まれていたもの用意できた。

だから早く来い。女子寮の裏側で待ってる。

追記 メールアドレス変えた by瑠璃』

・・・そういえば今日くらいには用意できるって言ってたっけ・・・
でも、もう少し早く連絡して欲しかったな。
とりあえず新しくなったアドレスを登録して、急いで女子寮の前に
向かう。

女子寮に来る途中に、ビニールハウスに入る峰理子がいた。

(あいつとも話をしたいけど、とりあえず後回しだ。急いで瑠璃の
ところに行かないと何を言い出すかわからないし)

そのまま裏側に行くと、一人の少女がいた。

「紅葉・・・来るの遅い・・・」

「ごめんね。でも、瑠璃がくるなんて珍しいね。でも、ここに来て
よかったの？」

「本当はよくない。ここに来ると武偵に捕まるかもしれないから。でも、依頼人には直接渡すことになっているから来た。それに何かあつたら紅葉が守ってくれるから」

この少女の名前は遠藤瑠璃・・・武器の密売を専門にしている。彼女に依頼を頼むと5日以内には頼んでおいたものは手に入る。武器の密売ではかなり有名で彼女の姿を見たことをある者は少ない。最近になり一部の武偵から狙われている（逮捕的なほうで）らしい。

「私だつていつでも守れるわけじゃないよ。それにここだと、逃げさせることしかできないよ」

「それでも私を守ってくれることに変わりない」

「そうだね・・・それより、頼んでたものは？」

「これ」

足元にある、大きなガンケースを持ち上げて私に渡してくる。それを、開け中身を確認する。

「確かに、受け取つたよ」

「それにしてもなんでL96なんかを？普通に狙撃に使うならHK416があつたはずじゃなかった？」

「さすがにあれを武偵の前で使うわけにはいかないよ。特に、神崎の前ではね」

「神崎・H・アリア・・・確か、みんなは『双剣双銃のアリア』って呼んでる。でも、紅葉の事がばれても問題はないと思うけど」

「確かにね。でも、私も神崎の敵にはまだなりたくないからね」

「そっか・・・そろそろ私は帰るね。また何かあつたら連絡してほしいな」

「気を付けてね。送って行きたいんだけど少し話しておきたい人がいるから・・・ごめんね」

「気持ちだけでも嬉しい。ばいばい」

すぐ近くに止まっていた車に乗り込むところまで見送ると、私は女子寮前にあるビニールハウスに向けて歩きだした。

ビニールハウスの中ではキンジと理子が話していた。

ん？キンジの持っているあれはEr・・・ギャルゲーじゃないか！まさか、あんなゲームをする趣味があったん・・・なんだ理子に渡すのか、ついキンジがやるのと思っていた。

・・・話の内容を聞いてみるとキンジが理子に神崎について調べさせていたようだ。

それでも、私には知ってる内容ないようしか話してないみたいだな。

ベシン！

理子が勢い余ってキンジの時計を壊したみたいだ・・・恐らくわざとだろう。

キンジが出ていくを待ってから中に入る。

「久しぶりだな。峰理子リユパン4世」

「なぜ、お前がここにいる。椎名紅葉」

「お前と少し話がしたかったのさ」

「お前と話することなどない」

「まあ、そういいさんなつて、今はまだ『武偵殺し』ってばれたくないだろ？」

「で、何の用だ」

「私はいちを神崎たちの仲間として動かさせてもらうが、あいつが死にかけない限り私は動かない。それだけだ」

それだけ言ってビニールハウスから出る。

シャーロックには守れ、と言われた。だけど、それではこれから起

こりうる可能性を考慮すると今の神崎では乗り越えることができない。だから、死なない程度に守る。そして強くなってもらう

シャーロックの目的・・・それを成し遂げるためにも・・・

6th bullet (後書き)

前回のぐだぐださを何とか取り戻そうと思います。

・・・まあ無理でしょうけど(汗)

7th bullet

部屋に戻ると神崎とキンジがもめていた。このふたり、本当によく喧嘩するな。

初めの方が聞こえなかったが、最後にキンジが一回だけ神崎と一緒に依頼を解決するようだ。

だが、今のキンジでは神崎の期待には応えられないだろう。

それに、もうすぐ理子も動く。いずれにせよ神崎にはパートナーが必要だろう。おそらくパートナーはキンジになるだろう。これがいい機会になればいいのだが・・・

「あら、帰ってきてたの紅葉」

「ええ、今さつき帰ってきました」

「そうそう、キンジが一回だけだけど組んでくれるから、あんたも手伝いなさいよね」

「了解です」

神崎が嬉しそうに話しかけてきたのと先ほどの会話で、「こうなる」とも予想していたので軽くこたえる。

「そういえば、手に持ってるのは何？」

「これですか？これはL96A1・・・まあ、スナイパーライフルですね」

「あんたって狙撃も出来るの？」

「多少はできますよ。ただレキさんみたいには上手くないですが」

苦笑しながら言う。しかし、レキの狙撃の腕にはいくらなんでも勝てる気がしない。

それにこれはまだフルノーマル。飛んで800m程度。

それに、射程を延ばすための改造を彼に頼む予定だ。理子が動く前に、間に合えばいいのだけれど・・・

「そう・・・」

「では、これの整備するので失礼します」

そのまま、寝室でL96をばらして組みなおす。

そして、彼にメールを送る。しばらくしてから、返信が帰ってきた。

『そちらに着くのは明後日になる。』

実に簡単な内容だった。つまり、明後日まではノーマルのL96を使うしかないってこと。

オーバーホールしたL96をしまってから就寝する。

今日の強襲科はやけに騒がしい。理由を探っているとキンジが来ているらしい。

昨日言っていた自由履修の申請とかの為だろう。生徒たちがキンジに向けて挨拶している、それを全て返しているキンジも、『死ぬ』が普通に入っている。まあ、これが強襲科というものだから何とも言えない。

私は用事があるので、少し先に帰らせてもらった。

「・・・重い」

両手に大量の袋を持って向かっている。

「一気に買うんじゃないかった。ここまで重いなんて思ってなかった」

袋の中には大量の弾・・・それも、数種類ある

M93R用の9ミリパラベラム、USP・45用の45ACP弾、HK416用の5.56? NATO弾、L96用の7.62? NATO弾・・・この4つを大量購入した。

いつまでも、装甲貫通弾を装填しておくわけにはいかない。のろのろと歩いているうちにバス停に着いたようだ。

「やっと、着いた・・・ふう」

その後バスが来るまで、その場に弾を置いて待っていた。

寮前で降りたのはいいが、そこから部屋まで行くのにかなりの時間がかかってしまった。

部屋の中に入るとキンジがいた・・・神崎がない?・・・多分帰ったのであろう。

「椎名まだいたのか」

「私は住むところがないので、見つかるまで居候させていただきます」

「部屋が見つかるまで、な」

キンジが妙にあきらめたような顔で呟いてから。

「そういえば、両手に持っている袋はいつたいたんだ?」

「弾ですね。少し買いました。お分けしましょうか?」

「いや、いいよ」

「そうですか・・・私はもう寝させていただきますね」

「ああ」

寝室へと向かいそのまま床の上で就寝・・・きちんと敷布団引いてますよ!

翌日、キンジに起こされるやいなや。

「事件がおこったらしい！アリアから呼び出した。お前もいくぞ！」

オリ主設定少々変更のお知らせ

この度、オリ主の設定を多少変更させていただきます。

変更内容：『不老』の件に関して。

現在、人体実験と書いておりますがその部分を変更させていただきます。

変更後は、某竹取りのお爺さんの物語に出てくる薬を焼く前に中身をすり替えその薬を飲んだ。（こんな感じに）に変更させていただきます。

なお、その薬を飲んだことにより星伽に追い掛け回される。などの設定を加えさせていただきます。

変更理由：さすがに人体実験はまずいかなと思いました。少しはリアルで考えよう（全然リアルじゃない！）と思ひまして。

そのことに関する事で、小説内容の変更はありません。

「事件がおこつたらしい！アリアから呼び出した。お前もいくぞ！」

朝からいやな目覚め方です。いきなり、事件が起きたとかいわれてもねえ。

しかも、起こされ方が携帯に電話がかかってきて・・・あれ？彼に電話番号を教えた覚えがないのですが・・・まあいいでしょう。今の時刻は・・・8時20分・・・え？完全遅刻じゃないっすか。とりあえず、仕度をして・・・L96だけで何とかなるでしょ。たしか、女子寮の屋上集合でしたっけ。

数分後・・・女子寮の屋上

すでに、神崎・キンジ・レキさんの三人がへりに乗り込もうとしているときに、

「すみませ〜ん。送りました」

「遅い！早く乗りなさい！」

神崎とキンジはC装備を身に付けていた。恐らくこの事件相当大掛かりな事件だろう。それくらいなら一目でわかる。私はキンジに、

「たった一回の事件がここまで大きいものとは・・・キンジさんご愁傷様です」

「確かに大事件だな。まったく俺はついてないよ」

「キンジ、約束は守りなさい？あんたの実力を見るのを、楽しみにしているんだから」

「先に言っておくが、今の俺はたかがEランクの武偵だぞ？お前の

思い込んでいるような力は持ってないし、ブランクも長いからな」
「万一、ピンチになったら　私が守ってあげるから、安心しなさい」

この二人、はたから見ると結構いい感じじゃないですか。これからが楽しみです。

キンジ達のインカム越しに入ってくる話によると、バスはどここの停留所にも止まらずに暴走を始めているらしい。その後、車内の生徒からバスジャックされたと連絡があったとか。

その後、60人を乗せたバスは・・・とりあえず、台場に入ったらしい。

しかし、理子もここに来て大胆に活動してきたな。キンジもバスに遅れたと言っているが、理子が直した時計は数分早いはず。事実これも、仕組まれているのだろう。

『見えました』

さすがに、インカムを付けてようとしたときに、レキさんがバスを見つけたようですな。

普通はこの距離から特定の車両を見つかるなんて不可能なんですけどね。普通は。

『何も見えないぞレキ』

『ホテル日航の前を右折しているバスです。窓に武偵校の生徒が見えます』

「ああ、あれですね。時速90前後でしょうか？」

『よくわかるわね。あんたたち視力いくつよ』

『左右ともに6・0です』「測ったことがないためわかりません」

バスが他の車を追い越しながら、テレビ局の前を通る。ヘリでそれを追っていると、局の中からカメラなどで此方を撮影しているようだ。

『ここからバスの屋上に飛び移るわ。あたしはバスの外をチエックする。キンジは中で状況確認と連絡。紅葉は屋上で待機。レキはヘリでバスを追いながら待機』

私めっちゃ危ないじゃん！しかもL96しか持ってきてないんだけど！

こういう時に限って何か忘れるのが私だからね。でも、M93Rらへんは持つてくればよかったよ。

『「武偵殺し」じゃないかもしれないだろ！』

『違ったら何とかしなさいよ。あんたなら、どうにかできるはずだわ』

「降りる前からケンカなんてしてんな！そんな暇あればとっと降りろ！」

こんなときまでケンカされると、さすがに迷惑なのでキレました。二人に続いて私も降りる。先に降りた、キンジがバスから滑り落ちそうになったところを神崎が腕をつかんで引き留めた。私も、着地する。

「キンジさん！大丈夫ですか！？」

「あ、ああ」

「ちゃんと本気でやりなさいよ！」

「本気だって……今は……！」

二人が屋根にワイヤーを撃ち込んだところに、私はバスの進行方向と逆に向いてで伏せる。

その場でスコープを覗き込み、インカムから入ってくる情報に耳を傾ける。

下の方で、キンジが入ってきたのをみたのか、一斉に騒ぎ出す。

スコープを覗いていると、さっきいたはずの車が迫ってきていた。

『キンジ、どう！？ちゃんと状況を報告しなさい！』

「後方から一台！」

車に向けて、L96でタイヤを狙って撃つ。ボルトハンドルを引いてもう一発、さっき撃つたのと反対のタイヤを撃つ。車はそのままバランスを崩し、ガードレールにぶつかる。

『お前の言った通り相手は「武偵殺し」だ。このバスは遠隔操作さ
れている。そつちはどうだ』

『爆弾らしいものがあるわ！』

神崎がバスの下をのぞきこんでいるようだ。

『カジンスキー 型のC4、「武偵殺し」十八番よ。見ただけでも
・・3500立方センチはあるわ』

いくらなんでも、量が多すぎる。

それじゃ、電車でも吹き飛ばせる。

『潜り込んで解体を試み あっ』

神崎が叫ぶのと同時に、バスに衝撃が襲った。

車が、追突したようだ。車種はわからないが、オープンカーで座席

にはUZIが乗っていた。

(さっきのは囷だったのか!? 本命はこっちだったのか。後ろ方に注意しすぎた)

神崎からの応答がないため、ワイヤーを引っ張り屋上に引き上げる。引き上げてる間に車が横に回りUZIが車内に狙って

『 全員伏せる! 』

キンジが叫んだ、直後にUZIがバスに向けて発砲した。

その場に、立ち上がりUZIに向けてL96を撃つ。が、バスが変な揺れ方をしたため外してしまう。

銃の反動もあって、その場で倒れてしまう。倒れるときにL96を放してしまい、滑り落ちてしまう。

落ちた方を見ると、キンジが屋根に上っていた。その手にはさっきはずの落としたL96があった。

「これ上から落ちて来たんだが、お前のか?」

「あ、はい」

「上から落ちてきたときはかなり焦ったんだぞ」

「うう、すみません」

キンジからL96を受け取り、引いていなかったボルトハンドルを引く。

バスが高速でレインボーブリッジに入っていく。ブリッジ入口付近の急カーブで、ぐらり

今一瞬間輪走行になった。今の運転腕からすると、バスの運転手は代わっている。

「アリア、大丈夫か!」

「キンジ・紅葉!」

先ほどまで応答がなかった神崎がワイヤーを伝って上ってきた。

「アリア、お前ヘルメットはどうした！」

「さつき、追突された時にぶち割られたわ！あんたたちもどうしたのよ！」

神崎が私たちの頭を指して問い返してくる。

「さつき運転手が撃たれて・・・今、武藤にメットを貸して運転させている！」

「危ないわ！どうして無防備で出てきたの！なんでそんな初步的「UZIがまた撃ってくる！気を付けて！」・・・キンジ！危ない！」

二人に警告してU96でUZIを撃つ。しかし、遅かった。UZIが破壊される前に発射した。

すぐ横で被弾音が2つ聞こえた。二人のどちらが被弾したか、容態はどうか等、確かめたかったが先に車の破壊が先だ。

タイヤを撃ち、車はスピンしガードレールにぶつかり、炎上する。二人の方を見ると、キンジがピクリとも動かない神崎を引き上げていた。神崎が多分撃たれたであろう額から血を流している。二人の方に近づき、神崎の容態を見る。恐らく軽い脳震盪だろう。

「アリア！アリアああっ！」

「落ち着け！軽い脳震盪を起こしているだけだ！神崎は大丈夫だ！」

動揺しているキンジをなだめようとする。しかし、車は破壊したが、まだ爆弾が残っている。

上空にはドラグノフを構えたレキさんがいた。

「くっ！レキさん、下の爆弾を頼みます」

『 私は一発の銃弾（以下略）』

レキさんは狙撃をするときにいつも同じセリフを言う。

彼女はウルスのを駒。だから、彼女は何も考えずに従っただけ。それがこの詩だろう。

4回の銃声が聞こえてきた後、大きな水柱が上がる。

その後バスは停まり、額に被弾したアリアは武偵病院に入院するこ
とになった。

神崎の護衛。この仕事は、かなり重労働になる。そう思いながら、
帰った。

翌日、神崎の見舞いも兼ねて病院に来ていた。

しかし、さすが貴族・・・VIP用の個室とは。

病室に入ると小さなロビーがあり、『レキより』と書いてあるカードと白百合の花があった。レキさんの送った花にみとれているとキンジが入ってきた。

「おや、キンジさんじゃないですか。あなたも神崎さんのお見舞いですか？」

「まあ、いちをな。あと、犯人の調査書だよ」

「犯人の宿泊記録とかでしょ？恐らく改ざんされているのがオチですよ」

「お前も読んだのか？」

「いえいえ、ただの勘ですよ。キンジさんお先にどうぞ」

「一緒に入ればいいんじゃないのか？」

「私は、彼女と二人きりで話したいことがありますので
「そうか」

キンジがベッドルームに入った後、シャーロックに電話を掛ける。
ここが病院だつて？・・・きゅ、急用だから問題ないって

『何のようだい？紅葉君』

「紅葉君言っな。これでもお前より年上だ」

『それは失礼した』

「用件だがな、神崎が額に被弾したぞ。まあ、かなりの軽傷だけど
『ふむ。それだけかな？』

「それだけと聞かれればそれだけだが・・・いちをあいつに忠告し
こうか？」

『それは任せるよ』

「分かった。じゃあ、切るぞ」

電話を切ってポケットの中に入れて、私もベッドルームに入る。

中に入ると、キンジが出ようとしていた。・・・入るタイミングを確実に間違えた。いや、タイミングは丁度いいんだけど、雰囲気が最悪だ・・・

キンジが病室を出てから、鋭い目つきで神崎に話しかける。

「神崎、お前は焦りすぎている。今のままでは、かなえさんの免罪を晴らすことなんかできないぞ」

「なんであんたがママのこと知ってるのよ!」

「何故知っているかなんて、今は些細な問題だよ。私は君にはまだ死んでもらうわけにはいかないから話に来たんだ」

「どういうことよ」

神崎はこちらを睨んだまま聞いてくる。

彼女としても、数日前に出会ったばかりの人間が自分の周りのことを知っていれば怪しむだろう。

ましてや、自分の周りで何かあったときは必ずいるのだから。

警戒して当然だろう。

「言ったままの意味だよ。今のままでは確実に死ぬ」

「あんたは一体何を知っているの?」

「お前が知りたい情報。『イ・ウー』とかな」

「なっ!」

神崎が今知りたいであろう情報の例を挙げてみたが、当たりだったようだ。

言った直後は驚いた顔だったが、すぐに今にもガバメントを撃って

きそつな顔でこつちを見てきた。

「なんであんたが『イ・ウー』を知っているのよ!」

「お前が知る必要はない。それに私のことを調べたらしいがあれはすべて偽装してある。もし本当のことが知りたければ星伽の本家の奴らに聞くといいさ。あいつらが喋るかは別だが」

「あんたは一体何者なのよ」

「武偵なら調べろ。用事があるので、私はこれで失礼するよ」

病室を出た後、少し話をするために『武偵殺し』元へ向かう。

『武偵殺し』・・・峰理子に神崎とキンジが組まなかったことに。

理子に話をして、キンジの部屋に帰ってからは何事もなかった。

あえて言うならばキンジの様子が少しおかしかったことぐらいか。

その後も、今週は学校を休んだ。土曜には、L96の改造を頼んだくらいでそれ以外は部屋でずっと寝ていた。

別にサボったわけではないよ。この前のバスジャックの日に雨の中にずっといたために風邪をひいてしまった。ただ、それだけ。

キンジはサボっていたかと思っていたらしいが土曜日に風邪をひいたことに気付いたらしく、薬を買ってきてくれた・・・やっぱりこの人は優しい。できることならばこちらの事情には巻き込みたくはなかったな。

翌日、昨日までであった熱が嘘のように引いたので久々に彼女に会いに行く。

目的は何個かあるの。ただ、あいつが来る前までに話を終わらせないといけないからすべては話すことはできないだろう。

行き先は新宿警察署・・・ここに彼女がいる。受付の人間に彼女と面会をしたいと言ったら断られた。

断られるのは予想できたが、相手の対応に少しイライラしたので力づくでいこうと思ったが、あまりことを荒立てたくはなかったので国の方に連絡して、(無理矢理)許可を取った。

面会時間の指定は無し、さらには管理官もなし。という普通の人間からしたら考えられない内容での面会が許可された。

先に面会室に入って待っていた、彼女に挨拶する。

「お久しぶりです。かなえさん」

「椎名様・・・あなたがなぜここに？」

彼女の名前は神崎かなえ。一般の人々には『武偵殺し』として捕まっている。だけど本当は彼女は何もしていない。私たち『イ・ウー』の人間が、いや、シャーロックがそう仕組んだ。彼女に罪をかぶせた。つまり彼女は免罪でここにいることになる。

「あなたにシャーロックの(バカの)代わりに、謝りにきました。本当にすみませんでした」

「頭を上げてください椎名様。私が謝られる必要などありません。

それにすべてはアリアのためなんですから」

「確かにそれは・・・そうなんですが・・・」

「すみません。神崎さんに次の面会時間が迫っておりますのでそろ

そろ

「分かりました」

普段は犯罪者に『さん』を付けないのだが、私の前では付けてもらっている。そうじゃないとこの人たちの首が飛ぶ（職を失う方ね）ことになる。そう圧力をかけておいた。

そうしないと、こいつらがかなえさんに何するかわからないから。

「じゃあ帰りますね。くれぐれも神z・・・アリアには私のことは喋らないでください」

「それはわかっています」

「また、会いましょう」

そう言っつて部屋から出る。神崎とは鉢合わせないようにして帰路につく。

・・・あれ？何か忘れてるような気がする。

あ！L96の改造してもらってたんだ。あいつ毎回改造するの1日で終わるからなあ。

改造された新しい相棒（武偵で使える）を受け取った後、キンジの部屋の前で鍵を開けようとしたら、突然雨が降ってきた。

（雨か・・・嫌だな・・・雨は・・・）

雨 通り雨 が降った後は必ず嫌なことが起きる。今までの経験上、まともなことがあったためしがない。

部屋でL96の感覚を確かめていると、びしょ濡れになったキンジが帰ってきたのでタオルを渡す。

「キンジさんお帰りなさいです。タオルをどうぞ」

「ああ、サンキュー」

タオルを渡して、キンジに背を向けて話しかける。

「神崎さんのこと知つたみたいですね」

「お前は知っていたのか？」

「少しだけですけどね・・・」

キンジに嘘をつくのはできるだけしなくなかった。

けれど、ここにいる時点で私は本当の私のことを知らないで接する相手すべてに嘘をつかなければならない。

「俺は・・・どうすればいいんだろうな」

「私には答えられません。それはあなたの問題ですから」

彼の問いかけにもこたえることもできず、ただ見守ることしか出来ないんでね。

こういうことに関しては私は非力だよ。長い年月生きているけど、人の意思はまだ理解できない。

「そう・・・だよな・・・」

「・・・すみません。もう寝させてもらいます」

こういう話をされると疲れる。

それに、明日は寝坊するわけにはいかない。明日に決着がつくはず・・・『武偵殺し』と神崎の決着が・・・

このままでは、彼女は必ず死ぬ。パートナーがない『H』家の人間は弱い。パートナーがいるからこそ今まで功績をあげることができた。

全ては明日。明日神崎にパートナーができるかどうか決まる。

(理子・・・うまくやってくれよ)

今、離陸予定時間を2時間後に迫った旅客機の中にいる。この機体は約2時間半後にハイジャックされる。

犯人は『武偵殺し』・・・つまり、峰理子だ。彼女は神崎を殺すために準備をしているはずだ。

神崎を殺させるわけにはいかないから、私もこの機に乗った。ちなみにこの旅客機片道20万程度はかかるはずだ。

しかし、後2時間・・・すべてキングジの部屋で準備はしてきたからすることがない。

後2時間程、暇なので寝ることにする。携帯を取り出しアラームを2時間後にセットして、本日2度目の眠りにつく。

・・・2時間後

- -))

荷物が積まれている貨物室に音楽が流れる。

「ふわあゝ。もう2時間経ったんだ。もう少し寝てたいのになあ」

すでに機体は動き出している。持ってきたものを全て手探りで確認して、貨物室から機内にこっそりと侵入する。

入るところは誰にも見られていない。そして今は乗客のふりをして機内にいるはずの人物を探し出す。

探している人物は簡単に見つかった。今まで誰かの案内をしていたようだ。

周りに人がいないのを確認してから神崎の部屋の扉の前にいるCAに話しかける。

「すみません。少し聞きたいことがあるのですが」

「何でしょうか？」

「この機体をいつハイジャックするんだ？理子」

初めとは違う口調で聞く。目の前のCAもとい理子は振り向くと同時に銃を向けてきた。

こちらをみて見て私とわかった理子は銃をしまって睨んできた。

「なぜお前がここにいる？」

「神崎を殺させないために決まっている」

「私の目的を知っている上で、私に話しかけてきたのか？」

「もちろん。ただ、神崎が死にかけるところまでは手出しはしない。むしろ、お前に手伝ってやろうと思っただけ」

「お前の目的はなんだ？」

「神崎が成長すること、それだけだ。そのために私はおまえに手伝う」

「……いいだろう。少し待て」

そう言って、どこからか取り出した紙に何かを書きだした。書き終わるとその紙と機内を地図を渡してきた。

書いてある内容に一通り目を通してから理子を見て、

「機長と副機長は殺さない程度にやればいいんだな？あと、自動操縦装置は本当に潰してもいいの？」

「かまわない。それと、二人は出来たら眠らしてくれ」

「それなら麻酔弾を使うが問題ないな？」

持ってきているUSP・45のマガジンを抜いて麻酔弾を入れているマガジンを装填する。

もちろん、この麻酔弾は特注品だ。

「用意がいいな。それと二人を眠らせた後、コックピット外に出してくれ」

「わかった。それじゃあ、また後で会おう」

「気を付けるよ」

理子に背を向け、機内の地図を見てコックピットに向かう。途中にCAに会うと面倒なことになると思い周囲を警戒して進んでいたが、誰とも出会わずにコックピットに着いた。

コックピットのカギを、ピッキングwithクラッキングで解除すると中に入り二人を軽く気絶させる。

その後、すぐに自動操縦装置を破壊して、気絶している二人に麻醉弾を撃つ。

―― パン！パン！

銃声を聞いた乗客たちは一気にパニックに陥り、機内は騒然とした。そんなことにかまわず機長たちをコックピット外に出した私に、騒ぎを聞きつけてやってきた一人の武偵校の生徒が銃をこちらに向けて、

「――動くな！」

武偵校の生徒・・・キンジの方を見てから、ポケットに入れていた缶を取り出し放り投げる。

「君にはこれをプレゼントしてあげよう」

放り投げた缶から煙が噴き出る。さっき投げたのはガス缶、もちろん無害だ。

間違っても黄色でノアガスなどではない。

ガスが噴き出るのを見てキンジが、

「全員部屋に戻れ！ドアも閉める！」

部屋から出ようとした神崎を押し戻すようにして自らも部屋に戻る。これで、私の仕事は終わらせた。無害のガスを素通りして階段を降りバーに向かう。

バーのカウンターにはいつものゴスロリ改造制服に着替えた理子がいた。

「書いてあることはすべてやってきた。後はお前の仕事だ」

「お前は隠れていなくていいのか？」

「問題はないさ。そろそろ、私のことを知ってもらわないといけな
いだろう？」

「そうか」

理子と話しながらカウンターの中にある大きめの箱を取り出す。

箱の中には『仕事』で使う装備一式が入っていた。それを理子が見て

「それを二人にみせるのか？」

「私のことを教えるにはこれが一番早い方法だからね」

さつきまで着ていた服を脱ぐ。服の下には、漆黒・・・そう表現すればいいほど黒い服を着ていた。

それに箱から取り出したOFGを装着する。このOFG、何が当たっても衝撃を吸収してほしい！と冗談を言ったら50口径までの衝撃を吸収する化け物じみたOFGになってしまった。もちろん服もOFGも防弾防刃。

さつきまで麻酔弾を装填していたUSP・45のマガジンを抜きだし、一度コッキングしてチャンバーから弾出して、通常弾を装填する。

そうしているうちに階段から僅かに足音がしたので階段の方を見る。降りてきたのは神崎とキンジ。もちろん、二人ともかなり警戒している。

理子は二人を見てから。

「今回も見事にかかってくれましたね」

言いながら、薄いマスクのような特殊メイクを剥がす。

「……………理子!?!」

「Bon soir」

キンジが驚いた顔で、理子の名前を呼ぶ。そういえば、私は気づいたけど、二人は気づいてなかったっけ……

理子は、神崎に話をする。内容は、ホームズとリュパンの事。そして自分が『4世』という、数字でしかないことへの怒り。そして、『イ・ウー』で力を得た。その話を終えると私に関して聞いてきた。

「隣にいるやつは誰? あんたも理子の仲間なの?」

「私は理子の仲間であり、敵でもある。ただ今は協力しているだけ」

「その声……お前まさか!」

キンジが私の声を聴いて誰だかわかったようだ。1週間前後一緒にくらしければ声で判別できるだろう。

この機体に入った時からかぶっていた帽子を取って名乗る。

「そ、私の名は椎名紅葉。『イ・ウー』初期メンバーのうち一人。

二つ名は『すがた姿音無き狩人』。聞いたことくらいあるだろう」

「なんで、あんたが……」

「神崎、人を簡単に信じるんじゃないぞ。なぜ私が自転車ジャック

の時にタイミングよくいたのか疑わなかったのか？そこまで、パー
トナー探しに焦っていたのか？」

「本当にあんたは『姿音無き狩人』なの！？」

「ああ」

「アリア！『姿音無き狩人』ってなんだ！それに『イ・ウー』って
なんなんだ！？」

「前者は、裏の世界では名前を知らない者はないくらい有名な狙撃
「私の話は今はどうでもいいだろ？今は理子がまだ話すことがある
んだしな」

このままでは話が進まないのでは話を切って理子に回す。

理子は自分が『武偵殺し』であることを認め、キンジを神崎のパー
トナーにするためにバスジャックも起こしたことを話した。

そして、キンジの兄・・・金一の話が始めたところでキンジが冷静
さ欠いてきた。

キンジがブレッタを抜いて構えようとしたとき、手に持っていたベ
レッタが消えた。

「なっ！？」

「あーらら さっすがくーちゃん。うまいなあ」

「その呼び方はやめてくれ」

がしゃん、と音を立てて真後ろの床に壊れて散らばった。音がして
から、理子がワルサ P99を抜いた。

つまり理子は撃っていない。じゃあ誰が撃った？神崎？いくら神崎
でも仲間を撃つようなことはしない。ならば、私しか残っていない。

「不可視の銃弾・・・？」

キンジが思い浮かぶ、一つの可能性を挙げた。

「1」名答」

その可能性を肯定する返事をする。
イングレイジビレ オートマチック
不可視の銃弾は普通自動拳銃ですることは不可能だ。

だが、このUSP・45はこのために違法改造している。それもサプレッサーを付けてだ。

理子がキンジに『H』家のパートナーは戦う相棒じゃない。それを伝えてからもう1丁のワルサ P99を取り出し神崎との近接射撃戦を始める。

二人が抱き合うような姿勢になり、神崎がキンジを呼んだ直後に、理子がツインテールを動かし神崎の側頭部を斬りつけ鮮血が飛び散る。

神崎を蹴り飛ばし追撃をかけようとした理子に向けてUSPを撃ち、

「ここで簡単に終わらせるのもつまらんだろう！いったん逃がして時間を置いてみたらどうだ？今のまま勝っても相棒がいない『H』の人間に勝つたようなものだぞ。もし、次もだめならそこでとどめを刺せばいいじゃないか！」

「紅葉、面白いこと言うじゃん。いいよ、それに乗ってあげる」

キンジ達をわざと逃がして、理子とカクテルでも飲む。

10分程待つてから理子が動き出す。私は理子を見送ると余ったカクテルを飲み少しずつ飲みながら上でどうなっているのかなどと考えながら、シャーロックに電話を掛ける。

「お前の曾孫、死にかけてるぞ」

『ふむ、それは困ったね。君は助けようとしなのかい？』

「理子程度に負けるんじゃない、未来はないだろ？だから助けない」

『確かに君の言うとおりだね。しかし、さすがに死んでもらうのは

困るんだがね』

「大丈夫だよ。死にかけてる、とは言ったが死ぬわけじゃない」

『そうか。なら、もし彼女が勝てない相手が出てきたら守ってあげてくれ』

「わかってるって」

電話を切り階段の方を見ると、理子が走って降りてきた。

「どうした？負けたのか？」

理子に分かりきった質問をする。理子はうなずくだけで部屋の片隅の窓を背に立った。

あそこには爆弾が仕掛けられているはずだ。恐らく脱出するつもりだろう。

理子が降りてきて少ししてからキンジが追いかけてきた。

「神崎は一緒じゃないのか？」

「アリアには少しの間休憩してもらっているのさ」

「へえ、HSSになったんだ。理子が負けたのも理解できるよ」

HSSになったキンジを見ながら、USPと小太刀を構える。

理子が最後にキンジを『イ・ウー』に誘おうとしたが、キンジがそのまま話を続ければ理子を殺しかねない。

そう判断した私は理子にやめておけと言い、その後キンジに何かにつかまるように促す。

キンジに言ってから理子が壁を爆発するまであまり時間はなかった。壁に穴が開いた途端に、バーにある物すべてが外に吸い出されていた。キンジは固定されていたものにつかまり、私はワイヤーで体を固定していたから外に出されることはなかった。

だが、開いた穴から二つほどのミサイルが飛んできていることが見

えた。

HK416を即座に構え、一つを落とす。けれど、もう一つのミサイルは落とせず左エンジンに着弾してしまう。

「あゝあ、二つとも落とせなかったあゝ」

「一つ落とせただけでもすごいじゃないか」

「私はあなたには惚れませんよ」

「それより、今はコックピットに早く行かないか？」

「私は敵ですよ？」

固定していたワイヤーを切って、キンジに続いてコックピットに向かう。

コックピットに向かうと、ついさっきに麻醉弾を撃って昏倒させた機長たちが転がっていた。

「遅い！」

神崎が、開きっぱなしの扉の向こうから叫んできた。

私も来ていることに気付いていないようだ。神崎は、操縦席に座ると、キンジも軽く質問しながら座る。

神崎が機首を上げる。機体は徐々に高度を上げていき、キンジは管制塔との通信を繋げ、さらに電話を掛ける。

神崎が、誰に電話をしているか。と聞いたがすぐに電話は繋がったようで、会話の内容から察するに相手はあのバカの武藤のようだ。

会話内容は、同機体のキャリアの長い機長に着陸方法を聞いているようだった。

キンジが着陸方法を理解し、横須賀あたりの上空に差し掛かったところだ

『ANA600便。こちらは防衛省、航空管理局だ』

・・・時空管理局がよかつたなあ。

『羽田空港の使用は許可しない。空港は現在、自衛隊により封鎖中だ』

『何言つてやがんだ!』

叫んだのはキンジでも神崎でもなく、武藤だった。

「キンジ！マイク貸して！」

「何をする気だ！」

キンジにインカムを借りて防衛省のバカと話をする

『防衛省の方々聞こえる？私は裏じゃちよつと有名な』すがた『姿音無き狩人』って呼ばれてる者だけどさ。もしあんたたちが後ろから付けてきてるイーグルと羽田を解放しないならお前ら全員殺すぞ？』

『お・・・お前が本物という保証がない』

声がかすかに震えていた。相手も私の存在は知っているのだろう。

『あつそ。じゃあ、証明してあげる。今から後ろのイーグルを撃ち落とす。もしそれでも信用できないなら、明日にあなた達は骸と化すだけだから』

そう言つてインカムをキンジに返し私の改造携帯と無線を繋げてもらう。神崎が、何をするつもり！と叫んだが無視して狙撃地点に移動する。

ワイヤーで体を固定し、外に通じる扉を一つ開ける。そこから身を乗り出し、イーグルを照準に入れる。

『これが最後だよ。本当に信用しないならイーグルのパイロットの命は助かる』

『そんな脅しに我々は屈しない』

『そう。じゃあ、後悔しないでよ』

言うと同時にトリガーを引く。機体の後ろで飛んでいたイーグルが爆発し残骸となって海に落ちる。機体内に戻ってから分からず屋たちに最終勧告を告げる。

『それでも信用できないかな?』

通信の向こうでは慌ただしく叫んでいるようだった。

『わ・・・わかった、直ちに羽田空港を解放する』

『急いでね』

扉を閉めてから、コックピットに向かう。

コックピットに向かうと、二人は羽田空港に着陸するために集中していた。話しかけるのは気が引けたので、開いてる部屋に入って着陸するのをずっと待っていた。

羽田に着陸してすぐに特殊部隊の面々が機体を囲んできたので、軽く蹴散らしてから一般の乗客達を下した。

神崎達はその後事情聴取や取材などでかなり忙しかったようだ。

イーグルの墜落は訓練中の事故という形で片づけられ、私は何もかわっていないことになった。

・・・戦闘機撃つなんてめったにしないから疲れた。

その日はそのままキングジの部屋に戻ってすぐに眠りに着いた

11th bullet - high juck - (後書き)

なんかめちゃくちゃですね。

ARで戦闘機落とすとかw やりすぎました。

後、主人公の名前 紅葉 くれは ですよ。もみじじゃないですよ

12th bullet

キンジの部屋に帰ってすぐに寝た私は懐かしい夢を見ていた。

目の前には二人の巫女・・・それも、武装している。つまり武装巫女だ。

一人は自分の身長ほどある太刀を構えていて今すぐにも私を斬りかかってきそうだ。

それをもう一人が制止してから、私に話しかけてきた。

「なぜ、我々の一族を裏切ったのですか？」

「別に裏切ったわけじゃないけど・・・君たちからすれば裏切ったってことになるのかな」

「ならばなぜあのようなことを！」

太刀を構えている方の巫女が怒りを含んだ声で聞いてきた。

「面白そうだったからかな？月の者が持ってきた薬・・・これほど面白そうなものはないでしょ？」

「ふざけるな！ただそれだけの理由でわて「落ち着きなさい！」・・・くっ！」

「本家も今すぐ戻るなら許すと言ってます。戻ってきませんか？」

「知っているだろ？私は何かに縛られるのが嫌なんだ。だから、戻るつもりはない」

「ならば仕方ありませんね」

もう一人も刀を抜く。だけど、私は武器を構えない。

「紅葉！これが、あなたの最後です！」

声と同時に二人が斬りかかってくる。けれど、当たらない。何故か・
・二人の武器が炎をまとい溶けていったから。

「私だつて力を使えるのですよ。それくらい覚えていてくださいよ」
恐怖で動けない二人に刀を・・

「……さい！……きなさい！」

突然聞こえてきた声に反応して、ついつい目を開けてしまう。
目の前には神崎とキンジが立っていた。神崎はガバメントを構え、
キンジもバタフライナイフを構えている。

「やっと起きたわね！あなたにもママの免罪を滅」私が話したと
ころで免罪は滅らない」……どうということよ？」

「言つたままの意味。ここ20年程の『イ・ウー』の事はそれほど
まで知らない。知つていてもメンバーぐらいだから」

「20年つてあんた何歳よ！」
「それは教えられない。お前の一族が有名になりだした以上前の生
まれ」

神崎は啞然とした顔でこっちを見ている。キンジも大体の予想はつ
いたのであろうか、かなり驚いている。
このままでは質問責めにされること間違いなしなので、こちらから
質問する。

「かなえさんの公判のびるんだらう？よかつたじゃないか」

「なんで、あんたが知ってるのよ」

「さらに、イギリス海軍行きへのりを待たせている。早くいかなくていいのか？」

「あんたと話していると終わらなさそうだから、もう行くわ」

神崎をキンジが見送ると、私はもう一度眠ろうとしたが一つ用事を思い出してそばに置いてあるL96を持って玄関に向かう。

玄関先から誰かの泣き声が聞こえてきた。キンジが覗き穴で外を見ていた。

「お前は何もしないのか？キンジ」

「俺は……」

キンジは何も答えず、その場に立ち尽くしたまま。

これ以上彼に聞くのも時間の無駄なので玄関に置いてある靴を持ってベランダに出る。

「空はこんなに綺麗なのに……何故人は争うのだらう」

空を見て呟く。そして、流れ星が一つ見えた。

「空が泣いている……だけど私には何もできない」

ベランダの柵の上に乗る屋上まで飛ぶ。飛ぶ途中で炎が見えたとか。

屋上に出て30分程経っただろうか、ヘリポートのある女子寮の方にL96を構えながら神崎がヘリに乗り込むところをスコープ越しに見ていた。

ヘリが10mほど浮き上がったところで、キンジが扉を蹴り開けて屋上に入った。

キンジがヘリに向かって何回か叫んだところでヘリのドアが開き、神崎が飛び降りた。

神崎を取り戻したいロンドン武偵局のやつらが何人かヘリから降りて連れ戻そうとしていた。

通常の弾を積んでいるL96でロンドン武偵局のバカどもの一人を撃つ。

案の定撃たれたやつが後ろに吹っ飛ぶ。周りの奴らは何があったのか分からないといった様子で戸惑っていた。

その間にキンジがベレッタで屋上のドアを開かないようにしてから・
・
・

「これで私は安心して、シャーロック（のバカ野郎）の依頼をサボれる」

つい思っていたことを口走ってしまったが、誰も聞いていないからよしとしよう。

目の前にある女子寮からは、二人が飛び降りていた。

これにて一件落着・・・と言いたかったがヘリがサーチライトを照らして神崎を探していたので、改造携帯でヘリの無線に割り込み。

イギリス英語で、

「あなた方はASSを知っておられますか？もし、知っておられるなら今ここで引き返してください」

『・・・・』

ヘリから応答はなかったが、意味を理解した彼らはそのまま引き返していった。

ちなみにASSっていうのは国外で『仕事』をしているうちに米軍

の人間が付けたもので、確か『Assassin / Silent Sniper』の略だったと気がする。

二人の安全（？）は確保したので、キンジの部屋に戻って休憩していると、二人が帰ってきた。

この二人、相変わらずのうるささで部屋に戻ってきて私を見て

「紅葉！あんたも『イ・ウー』のメンバーなら私のママの免罪晴らすために手伝いなさい！」

・・・シャーロックよ、こいつやっぱり殺つていいか？

隣にいるキンジは何を言うのかと思いきんじの方を見ると携帯をみてガクガクブルブルと震えていたので、何があるのか気になり携帯を覗くと・・・

緋巫k・・・白雪からメール：49件 留守電：18件。

内容が『椎名様以外の女子と同棲してるってホント！？』等があり、最後には『今すぐそっちにいくから！』で終わっていた。

トトトトトトトトトトトト...

どうやらヤンデレ武装巫女がここに到着したようだ。

玄関を斬られるのは困るので、扉を開けて暴走白雪を招き入れると。神崎の事を『泥棒ネコ』やらなんやで斬りかかっていた。

・・・今日も世界は平和だね。H A H A H A

12th bullet (後書き)

今回少し紅葉 クレハ の過去を入れてみました！

ちなみに、途中英語で書こうと思った部分があったんですがイギリスの英語は普通のと意味が違ったりするので断念しました！
すみません。

あと、昨日友達数人とサバゲーしてきました。

初めは東京マルイさんのL96と中華製HK416(中身ほぼ日本製と入れ替え済み)で行こうかと思いましたが・・・総重量10?になるので断念しました！

そんなこんなでこれからも2日毎の更新頑張らせていただきます。

13th bullet

白雪が部屋に押しかけてから5分程度してから『天誅』という声と共に室内での戦闘が始まった。

私は扉を閉めてから台所に向かい午前の紅茶b yミルクティーをコップに注ぎ飲む。

神崎がガバを撃つが白雪がそれを弾き飛ばす。その弾が、すぐ近くに跳弾したのは気にしない。

その後、後ろで刀同士がぶつかり音がしたけどこれもスルー。

二人がキンジに助けを求めたようだが・・・逃げたようだ。

私はとりあえずベランダに出て、隣にある防弾倉庫に入ったキンジに「ご愁傷様」と言って携帯を開いて200近くある『仕事』をとりあえず一目見て削除していく。

メール削除中に私にも助けを求められたけど、聞こえないふりをし
て無視した。

全件削除し終わると丁度ヤンデレvsツンデレの決戦(1ラウンド目)が終了していた。

自分の銃の安否を確認するために隠し場所へと向かうが・・・隠すためにおいてあるタンスがかなり破損している。

銃自体を入れてるケースはルナチタニウムでできているから破壊されることはないだろうけど・・・これ隠すために次は何を置こう・・・。

今日はそこらへんに散らばっている瓦礫の山の中から適当に素材を集めて見えないようにするだけで1日が終わってしまった。

翌日、二人が壊してくれた家具やらなんやらを全て(神崎の物以外)購入し直し同じ場所に配置した日からさらに数日後のある日・・・

学校に来て暇だったので敷地内を散策していると温室で花占いをしている白雪がいた。

「白雪、花占いよりお前の占いの方が当たるだろ」
「ひゃわ！」

花占いを見られていたのを驚いたのか私がいることに驚いたのか知らないがそんなことはどうでもいい。
今日は別件で話にきたんだし……

「今お前をジャンン……デュランタル魔剣がお前を狙っているから気を付けな」
「そうなんですか……」

「キンジに捨てられたとか思ってるのか？もしそうならそれはないから安心しろ。この私が保証してやる（キリッ）」

……ダメだ。こいつ完全に手がつけられん。しかたない、ジャンヌが動くのを待つか。

温室から出ると丁度1時間目の予鈴なった。その後授業をサボって食堂で眠りついた。

今まで静かだった食堂が騒がしくなってきたので起きると昼休みに入っていた。

周りを見渡すと寝れる状況ではなかったので別の就寝場所を探すために食堂から出ようとしたら神崎に呼ばれたようなので仕方なし神崎達の座っている席に向かう。

「ふわあゝ。なんででしょうか？」

「あんた午前の授業サボったでしょ！」

「誰かが部屋を荒らしてくれたのでその後片付けに睡眠時間を取られてしまったのでここで寝ていました」

その誰かが自分と分かった神崎は黙る。
すると空気を読まない武藤が、

「椎名ちゃんここ座りなよ」

そう言っただと一つ空いている席を指す。
ずっと立っているのもしんどいのでそこに座る。

「そういえば椎名さん、朝温室で星伽さんと何か話していたみたい
だけ」

「ああ、それは星伽本家に依頼を頼まして・・・その件で近いうち
向こうに出向くことになっています」

・・・この話題早く変わらない？星伽本家の連中の話は一番しんど
いんだよ・・・精神的に。

「……そういえば不知火。お前、アドシアートどうするんだ？代表
とかに選ばれてるんじゃないのか？」

ナイス話題チエンジ！・・・でアドシアートって何？？？？
私が表に出ない間になんやら複雑な事になってるんだね。今度調べ
ておこつ。

しかし、ジャンヌのやつ今どこにいるんだ？この前メールで

『椎名…お前には教えておこつ。』

近日中に星伽白雪を連れ去る予定だ。

できればお前にも手伝ってもらいたい。』

とか送ってきたから速攻『無理』って送り返してやったけど・・・
少なくともすでにこの浮島にいるんだろう。

まあ、この件には個人的に関わらなくちゃいけないんだろうな。

考え事をしていたらすでに他愛もない会話はすでに終わっていた。

その後教務科に青森に行く。とだけ言っただけで公欠にしてもらった。さすが子夜鳴、話が分かる。速攻OK出してくれた。

青森に行くため準備をしていると、ヘリの飛行音が聞こえてきたので外を見ると女子寮の屋上にあるヘリポートに着陸しているところだった。

急いで仕度をして、ヘリポートに向かう。

女子寮の屋上のドアを開けると、こちらに気付いた操縦士はメンローターを起動して離陸準備に入った。

風でこけないように注意してヘリに近づき、武器・荷物を先に乗せてから私も乗ってインカムを付ける。

「遅れてしまい申し訳ないです」

『お気になさらないください。これより星伽本社のある青森に向かいます。何回か燃料補給のため着陸することがあります』

そう言って、ヘリを離陸させる。

私は後でこのヘリに乗り込んだことを後悔することになるだろう。

14th bullet

へりで揺られること数時間、もうすぐ青森県に入るころだろう。さすがに座りっぱなしはきついので立って軽く伸びをする。再び座ろうとしたときに警告音が鳴る。

「何があった!?!」

『何かにロックオンされているようです!』

「このへりから脱出する準備をしろ!」

警告音が鳴りやんだ直後に、突然機体がバランスを崩し回転を始める。

下から銃撃音が聞こえるあたりテイルローターがやられたのだろう。恐らくロックオンしてきたのは銃撃音から注意をそらすため、それがテイルローターを潰せなかった時の保険だろう。

問題は私個人を狙った、またはこのへり自体を狙ったかのどちらかだ。

『不時着します! 衝撃に備えてください!』

回転するへりのなかで冷静に考えていた私は、操縦士が言った通りにするため一時考えるのをやめる。

近くにある取っ手を握って荷物を見る。両方とも見事に機内を動き回っていた。

・・・HK416持ってこなくてよかったあ。でもあの中に入ってるL96は整備しないと使い物にならないだろうなあ。面倒だ、はあ。

そうしてるうちに大きな衝撃が機体を襲った。恐らく不時着したのだろう。

ドアを開けて周囲の様子を窺う。周囲に人がいないのを確認してから二人の操縦者の様子を見る。

一人は操縦席から抜け出そうと動いているが、もう一人は……。

「大丈夫ですか？どこか痛むところは？」

「足が……」

「無理に動かそうとしないで。少し耳を塞いでください」

そうやってM93Fを抜いて座席のネジを撃って外す。

座席ごと後ろに下げて足の様子を見る。外傷は見えないが骨折しているようだ。

骨折部分に回復術をあてる。

「あなたも超能力を？」

「厳密に言えば私のは違うよ。私のは……残念ながらお教えするわけにはいきませんが」

骨折した部分は直したが、まだ歩けないだろう。

周りに敵がいることを考えると今すぐここから逃げたいのだが、この人を連れて行かなければならない為簡単には逃げ出せそうにない。

「これからあなたを背負ってここから出て星伽の神社まで向かいます。恐らく、周囲には敵が展開しているでしょう。銃を扱ったことはありますか？」

「ないです……」

「分かりました」

操縦者を背負ってへりから出る。

周囲を警戒しながら森の中を進むほかの荷物も持っているのだから動きにくい。

約30分程歩き続けると森から抜け出せた。が、目の前にあったのは……

「君たちがこちら側からこの森を抜け出すことはわかっていた。もし、命が惜しいのならば武装を解除し投降せよ」

森から抜け出した私たちを待っていたのは武装集団。だけど、武器で判断しようとしたがそれも無理だった。

持っている武器が全員違う。左から、M4 / AK / FAMASなどその武器を使っている国が違う。

森の中に戻り、荷物と負傷している操縦者を下してから再び武装集団の前に出る。

「覚悟は決まったのかな？」

「お前たちに聞いておきたい！お前たちは何者だ！何故私たちを狙っている！」

「ふむ、いいでしょう。まず一つ目は我々は傭兵です。つまり、今ここにいるもの全員このために集められました。二つ目は、依頼です。私は巨額の報酬を提示されたためにここにいます。周りの皆も大体は同じでしょう。これで満足ですか？」

「依頼人クライアントは？」

「残念ながらそれは我々にはわかりません。ただ、魔剣デュランダルと名乗っていました」

ジャンヌか……いや、あいつならこんなバカなまねはしないはずだ。もし、あいつじゃないならいったい誰が？

しかし、今は目の前の問題を何とかしなければならぬ。目の前にいるだけでざっと8人。排除できないわけでもないが、少しキツイか……

相手の様子を窺いつつM93Rを構える。

「おやおや、ハンドガンなどで私たちと殺り合つつもりですか。なめているのですか？」

リーダー格の男がそう言うと周りの奴らが銃を構える。

「これが最後です。武器を捨てて投降してください。依頼人クライアントからは捕縛を命じられていますが、やむを得ない場合は殺傷の許可も出ています」

私を捕縛とは…ジャンヌも私の実力を知らないわけでもないだろうに。
投降する気がないのを悟つたリーダー格の男も銃を構える。

「やれやれ。報酬の額が多いからもつと難しい依頼だと思っていたのですが・・・これはハズレですね」

「それは、殺しあいが終わってからにしようよ」

そついうと今のマガジンを落として違うマガジンを装填する。

初めにいきなり隙を見せるとは思っていなかったらしく、相手が撃つまで少し時間があつた。

その時間を利用し、装填してすぐに横に飛びながら二人の相手を撃つ。

3点バーストの1発目が初めに装填していたマガジンの弾。これは相手が着ている防弾服に防がれる。

しかし、2発目の弾はその防弾服を貫通して相手の心臓を貫く。撃たれた二人は何があつたかわからない、という顔で倒れた。周りの者も撃つのをやめ壁を盾にして隠れる。

「お前今何を撃つた！」

「A-TNK弾・・・装甲貫通弾だよ」
「バカな！それは国際的に開発が禁止されているはずだぞ！」

「アーマーピアス確かに装甲貫通弾は開発は禁止されている。だけど、私を咎めることを出来るものがない。」

「国際的にはな！だけど私には関係ない。私に逆らうとどうなるか国のお偉いさんたちは知っているからね！」

私も近くの壁を盾にして、相手に壁越しに言う。

「お前は何者なんだ。今の動きからして素人ではないだろう！」
「世界に共通で使われている名前はASSだ！これで理解できるかな」

「なっ!?!」

相手は驚いた後に、「ほんとうにあのASSなのか」「で・・・デマに決まっている」などと疑問と恐怖を混ぜ合わせたような状況になっていた。

「お前がASSという証拠はどこにある！」

「証明してあげようか？ここからだ君たちの頭を撃ちぬくだけでいいかな？」

そう言うてから、軽く30m程ある壁に向かってセミで一発撃つ。撃った直後に相手の方に走る。相手は壁越しのヘッドショット、しかもハンドガンでの30mキルでかなり動揺していたため簡単に近づけた。

「分かった！投降する。命だけは助けてくれ！」

「私の事を知っている上で姿を見た人って一人もないんだ。なんでかわかる？」

相手の頭に銃口を向けてから質問する。

質問された内容に合う回答を見つけて出して答える。

「姿を見たもの全員を殺したから？」

「名前」

一つの銃声とともに鮮血が舞う。

こちらに気付いた奴らもすぐに頭を撃つ。

・・・また、無駄に人を殺してしまった。

顔に着いた血をぬぐいながら森に残した荷物と操縦者を回収しに向かう。

14th bullet (後書き)

今日アリア10巻発売ですね！
買いに行かなきゃ！

傭兵の集団を殺害してすぐに警察がやってきた。銃声を聞いた付近の住民が通報したのであろう。

普通なら武偵としてこの場を逃れることもできるが相手を殺している時点でその手は無理だろう。

確か武偵法に武偵は活動中に人を殺してはならない。そんな感じのがあつたはずだ。

それに返り血を浴びているから、殺したのが私だと簡単に分かるだろう。

警官を殺してもいいが、そこまでことを大きくはしたくない。ならば、ここから去るには見つからずに動くのが一番だろう。

「あの、警察官に事情を話してはどうでしょうか？」

不意に、背負っている操縦士が提案をしてきたのだが。

「無理ですね。事情を話したところで彼らは聞きもしないでしょう」

「そんな・・・」

向こうはこちらの事情など関係ないだろう。こちらの話など聞くわけがない。

「しかたがありません。このまま迂回して目的地に向かいます。多少は時間がかかりますが我慢してください」

「はい・・・」

そのまま、出来るだけ人気のすくない道を選んで進んでいると星伽の神社が見えてきた。

途中で警察官の無線に割り込んで内容を聞いていると、武偵を何人か呼んだらしく墜落したへりも見つかったようだ。

さらに傭兵達の身元が判明したらしく、全員かなり有名で腕の立つ者たちだったらしい。

そのうち何人かは同じ仕事をしたことがある者たちだった。

ようやく星伽の神社の前に来た時に、後ろから何人かの足音が聞こえてきたので、脇道にある草に飛び込んでやり過ごした。

服装からして一般人のようだったが、拳銃を持っていることから武偵であることがうかがえた。

そのまま脇道を進んで神社の入り口に行くと先ほどの者たちが巫女と何か話していた。

数名の武偵たちが帰るのを確認すると脇道から出て、神社に入る。

「きゃあ「静かに!」・・・むぐ」

私の事を見て巫女が叫ぼうとしたが口を押えて黙らせる。

「私はここに話に来ただけ。ここの主に椎名紅葉が来たっていえばすぐにわかるから」

「あ・・・あなたが椎名様なのですか?」

私が名前を出すと巫女は、今日私が来るのを知っていたのか恐る恐る聞き返してきた。

「そう。今日へりで来る予定だったけど、そのへりが落とされた。

詳しく説明している暇はないの。早く長に会わせてくれない?」

「わ・・・わかりました。ついて来てください」

「あ、そうだ。長に会うまでにこの人の治療を」

先に救護殿に操縦士（名前いまだに未定）を連れて行ってから、本

殿に向かう。

本殿に入り、個室でしばらく待っているようにと言われ5分程経つてから。

「失礼します。長は只今急用の為にここにはおりませんゆえ私がお相手いたします」

「そうですか。なら、まずこちらからいくつか言わせてもらいます。一つ目は岩手に近い青森で起こった殺人事件ですが、あれをやったのは私です。尚、へりが落とされ、操縦士1名が死亡。もう1名は右足を骨折、私が力を使い治療いたしました。が簡易の為にこちらで治療させてもらっています」

傭兵を殺したことを話し、へりの墜落で受けた被害を軽く報告した。

「分かりました。その件は私たちの方で何とかしましょう。それで、あなたをここに呼んだ理由ですが・・・」

「緋巫女・・・白雪が魔剣デュランダルに狙われていることですね？」

「はい。それであなたに白雪の護衛を頼みたいのです」

「それは私が魔剣デュランダルの仲間であることを知っているの依頼ですか？」

相手の表情が一瞬変わったように見えた。どうやら私とジャンヌが仲間であることは知っているようだ。がそのことで判断を決めかねていたのだろう。

「それは重々承知しております。ですが、我々にはあなたに頼るほかは・・・」

「いいでしょう。その依頼をお受けいたしましょう。ただ条件があります」

「条件？」

いくらなんでも、この依頼を指示通りに受けるつもりはない。

こちらに来る前からすでに大体の内容は聞いていた。

依頼の内容は、

1・・・白雪に魔剣デユランダが近づく前に排除する。

2・・・このことを白雪およびその周囲の人間に気付かれてはいけない。

3・・・なお力の使用は許可しない。

だったはずだ。

さすがに、ここまで制限されると受けようとは思わない。だから、こちらで最低限の仕事をさせてもらうために内容を変更させる。

「はい。こちらに来る前に大体の内容は聞かせてもらいましたが、3つ目以外は確実に無理です。すでに依頼が来た時点で白雪に魔剣コンタクトは接触しています。私としては、白雪が連れ去られないようにするしかできません。なので、私ができる可能な内容としては、彼女にできるだけ危害が及ばないようにするのが今の時点で出来る全てです」

簡単に言い換えると、そちらの依頼内容はすでに無理。だから、白雪をできるだけ守る。といった内容だ。

向こうも少し考えてから、

「分かりました。それでいいでしょう」

「物わがりのいい方は好きですよ・・・ふふ」

「ここまでの遠路お疲れでしょう。本日はこちらにお泊りください」

「では、お風呂に入らせていただいてもよろしいでしょうか？ いい加減この血を流したくて」

「少しお待ちください」

そう言って部屋から出ていく。

今日は疲れたな。乗ったへりは落とされるし、無駄に人間を殺しちやうし。

そういえば傭兵達を雇ったのは誰だろう。

少なくともジャンヌではないだろう。あいつにはまず私の行動は知られてないはずだし。

なら、ここに来ることを知っているのは？それならば、子夜鳴しがない。けどどあいつにそこまでの勇氣はないはずだ・・・じゃあ誰が？

その後、お風呂の準備ができたらしくそのままお風呂に入って今日の疲れと血を洗い流してからお風呂から出て、部屋に戻ってすぐに寝てしまった。

・・・今日は最悪の1日だったな。

16th bullet

今日もまた夢を・・・この前の続きだ。

その後、二人を殺さず刀の峰で打ち気絶させた。

「私たちを殺さなかったこと・・・後悔しますよ」

一人を気絶させ、二人目も気絶させようとしたときに最後に言われた言葉。

すでに、事を起こした時点で後悔はしないと決めていた。

そのために周りに人がいなくなるように『一族への裏切り』という方法を取った。

二人の安全を確保するために周囲に結界をはり、この場所を教えるために分かりやすい結界を張った。

これ以上関係のない者を巻き込むわけにはいかない。

全て星伽への・・・のため、後は私一人でやり遂げてみせる。

外から朝日が差し込み小鳥のさえずりも聞こえる。だけど、朝から嫌な気分だ。

忘れたい思い出を夢に見る・・・これほど嫌なこともない。

とりあえず、布団から出る。

さっそく荷物の中から制服を取り出して着替える。

久々に来た巫女服もいいのだが、やはり着るなら武偵校の制服の方

が落ち着く。

制服に着替え終え、布団も自分で片づけたところで廊下の方から足音が聞こえてきた。

「失礼いたします。椎名様に長から手紙を預かっております」

そう言っ入ってきから手紙を受け取る。

巫女を下がらせてから封を切り手紙を読む。

『椎名へ

お前がこちらに呼んでおいた身でありながら、急用が入ってしまったお前に私の代わりの者と話させるのはすまないと思っっている。

こちらからの頼む予定だった依頼の内容変更に関しては了解した。だが、お前は例の力を使ったらしいな。

それはいいのだが、力の使いようが問題だ。

お前の使っった治療術は相手に何らかの影響を与えることを知ってないわけではないだろう。

もし、力を使っった対象に变化が起きた場合はおまえが管理しろよ。それだけだ』

・・・なんでわざわざ手紙を書いたんだ？

まあ依頼の内容変更が承諾されたのはいいのだが、なんでわかりきったことをいちいち書いてるんだよ。

そんなこと前から分かつてるのに・・・

それよりも彼女の様子見にっっておこつ。何かあつたようならばらく面倒見なきやいけないし。

持っってきた荷物をまとめて救護殿に向かう。

救護殿に入り、目的の人物を探すと・・・

「ここまで変化してるのは初めて見た・・・」

確かに目の前にはへりの操縦士がいた。いたのだが・・・

「あ、椎名様・・・あの～これはどうことでしょうか？目が覚めたらこの体に・・・」

「ごめん。少し整理させて」

えっと、目の前にいる中1くらいの子が、昨日へりを操縦していた人なわけで・・・

・・・つまり、目の前の人は私のせいでこうなってしまったってことになる。

「本当にごめんなさい！あなたを助けたかったのは事実だけど、こうなることは私にもわかってたわけで、あなたにそうなるかも知れないことを黙っていたのも事実なわけで、だけど本当に助けたかったわk「えっと、椎名様？少し落ち着いてください・・・ね？」・・・はい」

相手の目の前に正座をして座り、事情を話そうと思ったところで重大な事を聞いてないことに気が付いた。

「事情を話すんですけど、その前にお名前お聞きしてよろしいでしょうか？」

「えっと、私は桐屋京子です・・・それよりなんで敬語なんですか？」

「じゃあ、京子さん。そうなってしまった事情を話しますね。理由は簡単なんですよ・・・私があなただに治療術を使ったからです。あつても、ちゃんと成長はするので大丈夫ですよ」

京子さんが自分の体が小さくなった理由を聞いて、少し驚いていた。

「すごいじゃないですか！それだけで身体に変化が起きるなんて！この体からだど、人生やり直せるじゃないですか！」

「えっと、あの、でも私があなたの面倒見ることになります。私の力のせいでその姿になってしまったので」

なぜか、相手のテンションのあがりようについていけないのですが・

・

まあ、彼女が気にしてないようなのでいいんですが。

「私は東京に帰ります。あなたはどうしますか？こちらで面倒を見てもらうこともできますし、私と東京に来ることもできますが・・・」

「

もちろん東京行きで！」

そんなことがあって、キンジの部屋に住む人数が増えることになることになった・・・

青森の方から電車で東京まで帰り、徒歩でキンジの部屋に帰る。玄関の扉を開ける。そこには何故か白雪と新しい荷物（この部屋に来るのが）が増えていた。

「そろそろ、自分の部屋探そう・・・うん、そうしよう」
「椎名様何言ってるんですか？」

目の前の状況を冷静に分析して導いた答えを声に出してしまい、隣にいる京子に突っ込まれた。

部屋の中に入ると、白雪は完全に掃除できていなかった部分を掃除中。神崎はなんか設置中。キンジは新しい荷物の中身をチェック中。とりあえず自分の荷物を置いて、携帯で寮の空き部屋がないか探す。

「椎名様・・・私ここにいていいのでしょうか？」

「別にいいと思うけど・・・後、ここでは『椎名様』はやめてね」

武偵校のサーバーをクラッキングして、寮の情報を盗み見しながら答える。

空き部屋の中で最も武偵校に近そうな部屋を探し出す。

寮の定見つかったことは見つかったのだが、何かと見覚えのある部屋だった。

第2グラウンド付近の女子寮で、最上階の一室。

キンジのチャリが爆発した状況を見ていた部屋だった。

「えっと、じゃあ、椎名さん。何してるんですか？」

「武偵校のサーバーをクラッキングして、女子寮の空いてる部屋を探し出してるどころ」

「それ犯罪じゃないんですか？」
「ばれなきゃ問題ない（キリッ）」

そのままデータをメールに添付して『この部屋に入る手続きしろ』
的な感じで子夜鳴に送る。

携帯を閉じて、L96の整備を始める。ばらそうとしたら、紙が挟
まっついて……

『ある程度の衝撃を受けても整備しなくていいようにしておいた、
感謝しろ』

と書いてあるメモが……。
教えるのが遅い！とか内心で思ったがこちらの仕事が減ったので、
許しておく。

隣で正座をして座っている京子に「ほかのメンバーに挨拶でもして
こい」と言っただけから、私は携帯で神崎が設置していた機器全ての情
報をジャンヌに送る。

ちなみにこの携帯、通常の機能はもちろんのこと、クラッキング・
ジャミングなどの機能を追加した高性能（？）携帯です。

メールを送った後掃除中の白雪と普通の会話をしていると、キンジ
逃亡・神崎 買い物で二人がいなくなっていた。

「私、晩御飯の準備しますね」

とか言っただけでそそくさと台所に向かい調理を開始した。

「白雪。私は星伽からお前の護衛を引き受けた。依頼の内容を私が
変えさせてもらったが、私はお前を守るつもりは一切無い」

「……」

料理をしている、白雪に話しかける。

「私はもう少ししたらこの部屋から別の部屋に移動する」

「そうですか」

「一つ教えてやる。私を信じるなよ。それだけは覚えている」

「それはどういう意味なのですか？」

「いずれ・・・わかる」

そう言うってから、京子のいる方に向かう。

京子は相変わらず正座をして座っている、その横で引っ越しに備え自分の荷物をまとめだす。

全ての荷物をまとめ終えたところで、キンジ達が帰ってきた。

私たちも晩御飯に呼ばれたが私は行かずに京子だけ行かせた。

今は味方、ジャンヌが本格的に動き出すと私は敵になる。

そのためにも、あまり顔を会わせたくない。それが本音だから。

キンジ達が夕食をとっている隣の部屋で私はメールを整理をしていた。

ついさつきPCから転送されてきたメール数百件。

とりあえず一件一件中身を確認してから削除する。

全て殺しの依頼・・・しかもどれも一度は断っている依頼ばかり。メールを全件削除し終えたあたりでキンジ達も夕食を終えた頃だった。

携帯をしまって、まとめた荷物の中からPSPを取り出して電源を入れる。

メモリー内から適当にゲームを選んで起動する。

「椎名さん・・・少しいいですか？」

京子が入ってきたので電源を切って京子の方を向く。

「どうしたの？」

「えっと、椎名さんの事を知りたくて・・・」

「別にいいけど」

正直私の事を教えるのは気が引けたのだが、教えられないことを覗いてなら問題ないだろうと思ひ答える。

「あんまりよく覚えてないですけど武偵は人を殺しちゃいけないんですよね・・・でも、椎名さんはこの前に人を殺していたのはどういふことなんでしょうか？」

一番答えにくい事情を聞かれて私はどう答えようか迷ったがこれだ

けは本当のことを教える。

「一言で答えるなら私は武偵じゃない。武偵校に行ってるのだから依頼の為に潜入しているにすぎない。これ以上教えると君を殺さないといけなくなるから教えられない」

「やっぱりそうなんですか・・・じゃあ、キンジさん達は椎名さんを逮捕する立場になるんですか？」

「私の罪状を取ることができただけだね」

私を逮捕するための罪状を取ることができれば逮捕できる。

「ただ、私は今まで一度も捕まらなかったことがない。何故か？それは、誰も私が何をしているかわからないから。」

それに、仕事中の私の姿を見たものは全員殺している。

京子を見ると何かを決意した目で私を見ていた。

「じゃあ、私武偵になります！それで、椎名さんのしていることを突き止めます！」

「いいよ、じゃあ君が武偵校に入れるように手続きはしておくよ。学費等は私が負担してあげる。だから、それ以外に必要なものは自分で何とかしてね。君が私を追い詰める日を待っているよ」

「椎名さんの敵になるって言った私にどうしてそこまで親切にしていただけのですか？」

「なんとなくかな。相手は多い方がいいじゃん」

私は本心を言っ、京子を見る。

力を使ったため体に変化が起こり、そして少なからず身体能力も少し向上しているはずだ。

この子がどこまで私を追い詰めることができるか、それが楽しみなのは事実だ。

先ほどまで考え事をしていた京子は考えがまとまったようだ。

「では、そちらの好意に甘えさせてもらいます」

「とりあえず、住むところは一緒でいい？」

「それで構いません」

「あと、明日すぐに転入とかはさすがにできないからね」

「はい」

話し終えて京子はリビングの方へ向かい、一人部屋に残された私はそのまま寝付いた。

18th bullet (後書き)

左目の調子がわるいです・・・すっごく痛いです。

ちなみに左目に一回ガスガンから発射されたBB弾当たって地獄を見た覚えがあります。

皆さんも、エアガンの取り扱いには注意してくださいね！

翌日に引越して新しい部屋に移ったのだが、ここ数日学校をサボっている。

したことといえば、京子を武偵校に転入させるための偽装書類を作ったくらいだ。

その京子はここ数日何かを調べるために夜遅くまでどこかに出かけている。多分私のことを調べているんだろうけど・・・

暇つぶしにキンジの部屋に仕掛けられている色々なトラップ+自分で仕掛けたカメラ数台で様子を見てみる。すると、面白い状況になっていた。

白雪の服を脱がそうとしているように見えるキンジ。

抵抗しているように見える白雪。

二人の様子を見て思わずもまんが入っている紙袋を落とす神崎。

実際は、白雪自ら脱ぎだしてそれをキンジは止めようとしているのだが、神崎にはわかるわけもなく・・・

黒と銀のガバをキンジのつま先に向けて発射。

残念ながら仕掛けたカメラには音声拾う機能を付けていないので何を言ってるかわからないのだが映像だけでも十分面白い。

その後、白雪が神崎のガバを奪い取るうとするが神崎にひっくり返されて、キンジは神崎にガバで狙われてそのままベランダから落ちた。

どうやら本当にベランダから落ちたらしく、次の日にキンジは38度前後の熱を出していた。

何か面白いことが起きないかとその後1日中様子を見ていたが、神崎がキンジに薬を買ってきたくらいだった。

「ただいま」

キンジの部屋を見るのも飽きてきたころにちょうど京子が帰ってきた。

「おかえり。京子、明日から武偵校に通えるよ。そこに制服と武器置いてあるから」

そう言って置いてある荷物を指さす。京子は早速荷物を確認すると制服に着替えだした。

「どうでしょうか？似合いますか？」

「似合うと思うよ。後、その拳銃持ってみて」

京子が置いてある拳銃を手取る。

「持ってみてどう？」

「ちよつどいい感じですね」

「それ渡しからのプレゼント。そのガバメントは少しいじってあるから」

「そうなんですか？」

そう言ってガバメントを見る。

まあ、外見での判断はほとんど無理なんだけど。

「あと、私作のロングマガジン。なんとまさかの20発装填可能！」「へえ」

普通のマガジンを3本、拡張マガジン3本渡すとそのままベッドに向かう。

「あ、そうそう。京子は強襲科アサルトのCクラスで勝手に登録させてもらったからね。じゃあ、おやすみ！」
「え、ちよっ！」

京子には何も言わずに強襲科アサルトに決めたのだが、いずれ力が必要になるので私自身は間違った判断とは思っていない。

これからが楽しみだ・・・

20th bullet

翌朝、起きるとすでに午後1時。

軽く寝坊してしまった。午後から授業に出るのもなんなので今日も学校をサボる。

イギリス某銃器専門会社にメールでL115A3を買いたいという内容と住所を書いてメールを送る。

もちろん、普通に断られることはわかっているのでタイトルに『from ASS』と武器（HK416）の画像を付けて送った。HK416の改造内容だけは世界中で知られているらしく写真を撮って送れば大体分かるらしい。

返信を待っている間に昼食の準備をする。

材料は・・・パスタ・ミートソース・塩。見つけた二つの食材+調味料で昼食を作る。

出来上がった昼食をテーブルに運んでフォークを持ってきてから携帯に届いているメールを開いて内容を読む。

パスタを食べながら読んでみると、どうやら向こうは無料してくれるらしい。

輸送方法は空路で自衛隊基地に運ばれてから一般の宅配会社に扮した自衛隊員が運んでくるらしい。

しかも三日以内に。
さすがにそれは無茶だろうと思いつつながら、感謝の意を込めたメールを送り返しておく。

弾の・338ラプア・マグナムの方はすでに100発程度購入してあるのでこちらも届くのを待つだけだ。

パスタを食べ終え食器の後片付けをしていると携帯に電話が掛かってきたので手を拭いて携帯の通話ボタンを押す。

『もしもし、くーちゃ』

相手がすぐに誰か分かり、関わると絶対面倒なことになりかねないのですぐに通話を切った。

すると数秒後にまた携帯が鳴る。仕方がないので電話に出ると。

『ちよつと、くーちゃんひどいよー。すぐ切るなんてー』

「お前とかかわると面倒事しか起きた覚えがないからな。後今私はジャンヌとワイワイキヤツキヤツするので忙しいんだ。お前と話している時間さえも惜しい」

『え？ちよつと、二人で何してるの！？私も混ぜ「私を頼るよりもあのバカツプルの二人を頼った方がいいぞ。私はブラドに顔を覚えられてるからな」・・・わかったよー。でも、二人に連絡するときにはくーちゃんにも電話するねー。じゃ』

電話の内容は大体わかっていたので適当に二人の名前を出したら見事にそれにかかってくれたので私としては嬉しいのだが、今考えたと面倒事を二つも増やすことになってしまった。

やはり、理子と関わると面倒事が起きた。

その後ジャンヌに計画の進み具合を聞くためにメールを送ると『順調』とだけ書いて返信してきた。

さすがにたった2文字なことにイラツと来たので世界中の（個人用の）PCにイカタコウイルスをまいてイライラを発散する。

そんなことをしていると、外から夕陽が差し込んでくる時間帯になっていた。

「ただいま〜」

「おっかえり〜」

京子が帰ってきたのでウイルスをまくのを止めて返事する。

「どうだった？楽しかった？」

「はい！！！」

「でも今はアドシアートに向けてバンドやらチアやらでなんか忙しそうなんだけどね。まあ、楽しいならいいか」

目をキラキラさせながら私の質問に答えた京子。

今は私作のガバをホルスターごと外して、マガジンを取り出したところだ。

私が頑張って作ったロングマガジンは依頼の時だけ使うように言っておいたので持つて行っていない。

実はあのガバメントにはあと少し機能があってマガジン内の最後の弾を撃つ時だけまったく反動がなくなる不思議改造を施してあったりするチート武器だったりする。

ただ、メンテするときにはうかつに触ると即廃棄になるリスクがあったりするんだけど・・・

京子が冷蔵庫を見て一言・・・

「材料ないですね。今日は仕方がないのでパスタのミートソースでいいですか？」

「問題ないよ」

昼にもパスタを食べたのだが、些細なことはあまり気にしない。

ちなみにここに越してきたときに、パスタを大量に・・・1か月分くらい私の独断で購入したのだ。

まあ小1時間ほど京子に怒られたけど。

そんな思い出に耽っているとすでにパスタが完成していた。

「片づけは（モグモグ）私が（モグモグ）やるよ（モグモグ）」

「椎名さん・・・食べながらしゃべらないでください」

「モグモグモグモグ（コクン）」

「はぁ」

私を見ながら溜息つく京子。今度は食べながら話してないのになんで！？とか思いながら残ったパスタを食べ終える。

私が食器を洗いにかかるると京子はお風呂を沸かしにお風呂場へ行った。

途中から水を操って食器を洗い終わると同時にお風呂が沸いたようだ。

お風呂場にて一部の音声記録・・・

「なんで、私の方がちっちゃいのよ!?!」

「椎名さん、ちょっとどこ見てるんですか!」

「そんな・・・中1状態の京子に負けるなんて・・・orz」

「大丈夫ですって。きつと椎名さんも成長しますって」

「私はこの体のまま、永遠に成長しませんよーだ」

「お、落ち着いてくださいって!」

「これが落ち着いていられるかー!」

『ザザー・・・』

お風呂からあがって、マグカップにコーヒー牛乳を入れて飲む。

やはりお風呂上がりの一杯は最高だね!

そんなこんなでこの日も終えるのだが・・・GWに少し面倒なことを押し付けられるとはわからずに眠りにつくのだった

今日は休日、ゆっくり寝ようと二度寝をしようとしたのだが・

「椎名さん。起きろー!」

言うと同時に布団を取られる。

携帯で時間を確認すると10時。まだ12時まで時間があるはずなのだが・・・

「きょうこ、あと少しでいいから寝させて。12時まででいいからさ」

「ダメです」

「じゃあ後1時k「ダメです」・・・じゃあ「ダメです」・・・まだ何も言っていないじゃんか」

「とりあえず起きてください。それとこれを買ってきてください」

そう言っ紙を渡してくる。

ベットから出て用意されていた朝食セットを食べながら、紙の書いている文字を見ているとすべて食材の名前だった。しかも、かなりの量が書いてある。

一体何のために使うのか分からないため京子に聞いてみる。

「これ何に使うの?」

「あれ?椎名さん知らないのですか?」

「何が?????」

「今日花火大会があるので。見に行くので、そのためのお弁当です!」

花火大会があることを知らなかったので軽く流しながら聞いていると、携帯にメール用に設定してある着信音がなった。

携帯を取って内容を確認すると分かりやすい内容だった。

『本日、星伽白雪に接触する。なお連休の終了と同時にこちらは動き出す。そちらがよければ地下倉庫に来てくれ』

携帯を閉じて朝食を食べ終わると、渡された紙を持って玄関に向かう。

階段を降りながら懐かしい知り合いに電話を掛ける。

『久しぶりです・・椎名様。何の用でしょうか？』

「今から言うものを全てそろえてほしい」

紙に書いてあるものを全て読んでいく。

全て読み終えたところで紙をしまう。

『30分あれば揃えることができます』

「そっか、じゃあお願いするよ。報酬は3。それでどう？」

『分かりました。揃えた後はどうすれば？』

「私が今いる場所に届けてほしい。場所はわかるだろう？」

『了解しました』

相手が言い終わると同時に電話を切る。

階段を降り終わると見慣れない宅配業者が荷物を下していた。

大きな荷物を下している人に声をかける。

「あの〜少しいいですか？」

「なんででしょうか？」

「自衛隊員の方ですよね？その荷物を受け取りに来ました」

相手の表情が一瞬で変わるのを見て少しからかって見ようかと思っ

だが、誰かにこの状況を見られて誤解されても困るのです。すぐに荷物を受け取り中身を確認する。

L115A3が入っていることを確認してから、相手の顔を見る。

「確かに受け取りました。私はこれをあの人に届けるので失礼しますね」

階段を上って7階に向かい、自衛隊員が帰るのを確認してから部屋に入る。

リビングに向かうと京子はテレビを見ていた。

私に気付いたらしくこちらを見て首をかしげる。

「あれ？私ちゃんと椎名さんにおつかいお願いしましたよね？」

「うん、したよ。これは下に降りた時に私宛に届いた荷物だから受け取って戻ってきたわけ」

「そういうことでしたか」

「それ以後30分程で全部揃うようにしてるから」

「どういうことですか？」

「まあいざれわかるって」

・・・30分後

相手がチャイムを鳴らす前にドアを開ける。

ドアを開けると大きな荷物を抱えたスーツ姿の男が3人立っていた。

「椎名様、頼まれていた物を全て持ってまいりました」

「ご苦労様です。それでPCの方は？」

「こちらに」

私から見て左側にいる男が紙袋だけを器用に渡してきたので、PC

を起動して銀行口座を開く。
そこに3とその後に0が7つ付いた額を振り込む。

「な、そのような額は！高すぎます」

「あれ？私この額のつもりで言ったんだけど。まあいいじゃない」

「しかし！」

「い・い・で・しょ？」

「分かりました」

「では、荷物を中に入れてください」

指示通りに荷物を全て部屋の中に入れて後、挨拶して帰って行った人たちに礼を言うと「自分たちには勿体無いです」といってそそくさと帰ってしまった。

玄関に置かれた荷物をリビングまで持って行く、京子は中身を全て揃っていることを確認してから冷蔵庫に入れ始めてた。

私は荷物置きになっている小部屋に入り、USPと小太刀を探し出して装備する。

リビングに戻ると京子が料理に取りかかろうとしていた。

私は京子の方を見てから、

「私は出かけてくるから。2、3日は戻らないと思う」

「そうなんですか？」

「ごめんね」

そう言って外に出て地下倉庫に向かう。

さて、もうすぐ楽しい楽しい第2回戦が始まる。

22th bullet

地下倉庫にきた。そこまではよかったのだが、ジャンヌがどこにいるのか分からない。

仕方がないので探すことにして、まずは最深部の地下7階に向かう。地下2階まで階段で降りて、そこから下の立ち入り禁止区画に続くエレベータに乗り込みパスワードを打ち込み地下7階に向かう。初めに大倉庫に向かい中を見渡すと、火薬を積んでいる棚と弾薬を積んでいる棚がずらりと並んでいる。

「ジャンヌがいるー？」

反応はない。が、うつすらと氷の気配を感じるので探していると火薬棚を並び替えていていた。

「椎名。来たのか」

「さつき名前呼んだよ？」

「そうだったな」

受け答えしながら作業を進めるジャンヌに何をしているか聞こうとしたが、私には関係の無いことなので聞かないことにした。

「じゃあ、私は寝させてもらうね。何かあれば起こしに来い」

そう言うってから寝ることが出来そうな場所を探しにうろつろつしていると資料室らしい部屋を見つけた。

紙で簡易ベッドを作りその上で眠りにつく。

次目が覚めるのはジャンヌが白雪をさらってからだな。

京子 side

花火大会を現地で見ようと思ったのだが、さすがに遠かったから葛西臨界公園で見ることにした。

「さすがに作り過ぎちゃったな。椎名さんの分も間違えて作っちゃったし」

ベンチに座って一人で自分用に作ったお弁当を食べている。

ふいに、横を見ると線香花火をしている二人がいた。

確か、遠山キンジさんと星伽白雪さんだったけ？

お弁当のふたを閉めて二人のほうへ向かう。

「えっと、遠山キンジさんと星伽白雪さんですよね？」

「ん？お前は確か・・・」

「ほらキンちゃん。桐谷京子ちゃんだよ。この前キンちゃんの部屋にいたじゃない」

「そういえばいたな」

「ふふっ」

二人の様子を見てつい笑ってしまう。

椎名さんの言った通りこの二人は仲がいいんだと改めて思ってしまう。

「何笑ってたんだよ」

「お二人はとっても仲がいいようなので、つい」

白雪さんはなぜか顔を真っ赤にして、独り言をつぶやいている。

「おっと、そろそろ始まりますよ」

先ほどまで少しだけ花火が上がった方を指をさす。

キンジさん達は「何が？」という顔で指をさす方を見る。

すると、ドンっ。という音をたてて花火が打ち上がった。

その花火を二人にはどんな風に見えたかはわからないけど、私にはとてもきれいに見えた。

「あ、そうだ。お弁当食べます？ちょっと作り過ぎちゃって」

二人にお弁当とお箸を渡して、私は椎名さんがどこにいるのか考えながら残っていたお弁当を食べた。

花火大会が終わり二人と別れて寮に戻ってもやっぱり椎名さんは帰ってきてなかった。

お弁当を洗い終えてから、ソファに座ると長細い箱が冷蔵庫の横に立ってあった。

箱の表面を見ると『京子へ 私がない時ならいつでも開けていいよ』と言う書置きが貼ってあった。

早速開けてみると刀が二本と手紙が入っていた。

手紙を開いてみると

『京子へ この箱を開けているということは私は今あなたの側にはいないでしょう。そして、私がある側の側にいない時に必ず何かよくない事が起きます。』

その刀は対なるもの。紅蓮と氷裏、それぞれ色で判断できるはずだよ。

これは対超能力者戦^{ステルス}を仮定して作られているが、普通にも使える。本当に私を捕えると言うのであればその刀は必要になる。そのためこの刀を渡しておきます。

追伸：もし事件が起きたら地下倉庫^{ジャンクショウ}において
そう書いてあった。

紅蓮と氷裏と名付けられた二本の刀を見る。

普通に見るとどちらも同じように見えたが鞘から抜いてみるとすぐに分かった。

刀身の色がそれぞれ違った。朱と蒼、そう表現すればいいほどの色。朱の方が紅蓮、蒼の方が氷裏。

紅蓮を持っているとまるで熱を帯びているかのように熱く感じ、氷裏を持っていると冷気をまとっているように冷たく感じる。

二つの刀を鞘になおしてから、手紙をもう一度読み直す。

最後の追伸に不安を感じたけど、今は疲れている。

私は手紙を閉じて眠りについた。

23th bullet

久しぶりに起きると、すでに上ではアドシアートが開催されているようだった。

大倉庫の方へ向かってみると白雪とジャンヌがいた。ジャンヌは私に気付いたらしく、こちらをみてきた。

「紅葉か、やっと起きたようだな？」

「私は何日寝ていた？」

「1日と17時間ほど」

「そうか」

計41時間も寝ていたのか。さすがに寝すぎたかな。ジャンヌと話したことで白雪も私に気づいたようだ。

「なんで椎名様がここに・・・？」

「前々から言おうと思ってたけどさ、人前で椎名様はやめて。後私
がここに理由を教えてあげるほど私は親切ではありません」

メールが届いたらしく、着信音が鳴る携帯を見てメールの内容を確認すると、マスターズ教務課から白雪が失踪した。という事だった。

「ジャンヌ、この事が武偵どもに知れたようだ。奴ら白雪のことを探しているようだ」

「それも策のうちだ」

「なら、数人の武偵がこちらに向かってきていることもか？」

「なに？」

「今通信を拾った。遠山キンジがこちらに向かっている」

レキとキンジの電話を聞いていて、レキは私とその会話を聞いていることに気付いたらしく、必要なことを言っただけで切ってしまうた。

この地下倉庫内の全ての起動している機器全ての状況を確認すると、非常ハシゴ用のロックが解除されていた。

おそらく京子が来たのだろう。

手元の武器の確認をしてから、大倉庫から出る。

「紅葉。どこへ行くんだ？」

「私の客人を迎えに行くんだよ」

そう言ってからハシゴがある場所へ向かい下りてくる京子を見る。ハシゴから降りた後こちらを向いてガバメントを構える。

「ついてこい。後、ここで銃は使わない方がいい」

来た道を引き返して大倉庫に向かう。

戦うなら狭い場所よりも広い場所の方が戦いやすい。

京子は相変わらずガバメントを構えていたようだが、ここに来てさつき言った言葉を理解したようでガバメントをホルスターに戻して2本の刀を構える。

「ちゃんとそれ持ってきたんだ。関心、関心」

「そんなこと言っていないでこれはどういう意味ですか？」

いつもとは違う鋭い目つきでこちらを見て質問してくる。

「戦えば分ると思うけどね」

私も右手に弾の入っていないマガジンを装填したUSPを構え、左

手に小太刀 風雷を逆手で構える。
京子に正面から突撃して腹部に蹴りを入れる。が、京子が刀を盾にして衝撃を殺すように後ろに下がり右手に持っている紅蓮を持ったまま小さな刃物を投げつけてきた。
それを風雷で弾き返してその刃物を見ると

「苦無クナイ・・・？」

「そうですね。これは前日対椎名様用にと実家から送られてきたものです」

対私用に送ってきた？それにそんな事ができる家なんて・・・

「一つだけ言っておきますと、私の本当の苗字は桐谷ではありませんん」

「へえ、だけど本当に私を殺るために送られてきたのなら苦無クナイだけじゃないでしょ？」

「・・・隠れるぞ。遠山キンジ、神崎・H・アリアが来る」

そう言つて物陰に隠れる。

武器をしまつてから、私と京子は気配を消して向こうの状況を探る。先に来たキンジは無様にもジャンヌの氷で足を縫い付けられ動けなくなつていた。

キンジを殺そうとジャンヌがもう一度銃剣を投げた。それをキンジの後ろから飛んで銃剣をはじいた。

この後、まだ戦つかそれを聞くために京子の方を見ると、こちらの考えていることがわかつたのか頷く。

「京子、先に行つて。私はまだやることがある。それとジャンヌの足止めを誰かが来るまで頼む」

「分かりました」

京子を先に行かせてから、私は白雪に化けたジャンヌと合流する。

「私がここを爆破する。先に行け」

「・・・頼む」

マガジンを装填しなおして、神崎たちの前に出る。

「お前たちの敵は私だよ」

24th bullet

私が突然出てきたことに驚きを隠せない神崎が声を上げる。

「紅葉、なんであんたがここに？」

「私はお前たちの仲間であり、敵だ。それがここにいる理由」

右手に持っているUSPを神崎に向け、左手に持っている起爆装置を起動する。

ズドンッ！ - という音をたてて排水穴から海水が入ってくる。

「何をしたの!？」

「簡単なことだよ。排水系を一つ爆破した」

手に持っている起爆装置を神崎の方に投げつけ、風雷を左手で構える。

「どうする？この水没していくここで戦^やるか？私は構わないぞ」

「くっ、紅葉！あんたは私がここで捕まえてやる！」

神崎が小太刀を構えて斬りかかってくる。

それを後ろに下がりながら受け流していく。

海水が膝の辺りまで入ってくると、私も神崎も当然ながら動く速度が遅くなってくる。

キンジが白雪を縛っている鎖を解除しようとしている様子を視界の端に入れながら神崎を挑発するような発言をする。

「そういえば、部屋に仕掛けていた機械。あれの情報をジャンヌに教えたのも私だよ？」

「あんたは、一体何が目的なの!？」

「君たちの観察。及び、暇つぶし。ただそれだけだよ?」

「アリア! 椎名の相手をするより早く魔剣デュランダルを追い!」

「キンジは黙ってなさい!」

そうしているうちに海水が腰の辺りまであがってきた。

キンジの言ったことを、もっと早く言っただけだが、どうやら今の神崎には私を逮捕する以外頭の中には内容だ。

これ以上こんなことをしても何にもならないので神崎がジャンヌを捕える理由を使って冷静さを取り戻そうとさせる。

「私を捕えるのはいいが、それではかなえさんの罪を減らすことはできないぞ?」

「あんた達がママに罪を着せたんじゃない!」

「アリア! いい加減にしろ! 今のお前は冷静さを欠いている、冷静になれ!」

キンジがアリアに向けてベレッタを撃つ。

撃たれた弾丸を弾いて、ようやく冷静さを取り戻したアリアは悔しそうな顔をしながらジャンヌを追うためにハシゴを上って行った。

アリアが行ってから、私がキンジたちの方へ向かうとキンジは私に警戒しながらも白雪の鎖を外そうとしていた。

「遠山キンジ、お前にはまだやってもらうことがある」

キンジの後頭部を掴み、強引に白雪とキスをさせる。

今のキンジでは役に立たない。だから、HSSを発動させる。

キンジのHSSが発動したのを感じとり、手を放す。

「紅葉、人と無理やりキスさせるのは良くないと思うよ?」

「うるさい、黙れ。それより白雪の周りの鎖を壊すからどけ」

HSSになったキンジを無理やりどかして鎖を掴む。
掴んだ鎖の部分を炎の力で内側から溶かして鎖を外す。

「これでいいだろう？さっさと行け！」

白雪は私を見て何か言いたいことがあるようだ。

キンジは白雪を連れてハシゴの方へ向かおうとしている。

「紅葉。君を置いていくわけにはいかない。君も来るんだ」

「私はまだすることがある。お前たちで行け」

私は排水計を破壊した為にここに入ってきた水を止めなければなら
ない

だがHSSのキンジはそれでも行くこうとしないので、

「お前たちは魔剣デュランタルを捉えるんだろう？私に構っている暇があればと
つとと神崎の援護に行つてやれ！」

白雪は察してくれたのかキンジを無理やりひぱって行つてくれた。

「紅葉。後で助けに来る」

「その必要はない」

二人がようやくこの場を後にしたところで作業に入る。

大倉庫の隅に小型の端末を設置する。

その端末に風雷を近づけ力を流して電気を通す。

電気を通したことで電源が入った端末を操作して機能させる。

その後上階へ向かうハシゴを上り扉を閉める。

力を使い過ぎたせいかな体を動かすのがきつい。
扉の近くで動けずに壁にもたれかかっていると、奥から一人やってきた。

「私より二人の側にいてあげてください。二人が危ない」
「君を一人にはできない」

奥からやってきたのはキンジだった。

「私は大丈夫だ。こんな状態でもジャンヌには負けることは無いからな。早く二人のもとへ行け！」

海水で濡れたUSPで天井を撃つ。

次はお前を撃つ。と言う意味を兼ねてキンジに銃を向ける。
キンジはやれやれ、といった顔で白雪たちの方に向かっていく。
撃った天井を見ながら、そこに向かって声をかける。

「京子、いるんだろ？私からしたらお前は気配を消すのが下手だぞ」
「ばれてしまいましたか」

天井の板を外して京子が出てくる。
手に持っている苦無クナイをしまう。

「戦チャる？」

「いえいえ、この姿を知り合い等に見られたら後あと面倒だなあ」
「、と思つて見た人を・・・って、それより椎名様。寮まで帰りますよ！」

「私も帰りたいたいんだけどね。体を動かすことがほとんどできないんだよね・・・」

「・・・え？」

「いや、本当に。下の水没防ぐために力使い過ぎてこの様だよ。そういうわけで背負って、頼む」

仕方ないとか呟きながら私を背負う。

「エレベーターの方でいいよー」

キンジ達がどこで戦っているかわからないので慎重にエレベーター前まで進み、着いたところで携帯を取り出す。

携帯を操作してエレベーターの電源を入れ、携帯をしまう。

「これで動くはず。ボタン押して〜」

私が手を伸ばしているのだが、全然届かずに結局京子が押した。

エレベーターに乗り込み地下2階に向かう途中で、

「そうそう、私しばらく滋賀の方に行ってきますね。実家の方に呼ばれてまして」

「京子って中忍？」

「そうでs・・・って、ななななななんの話ですかあ？私ちよつとわかりませんよ〜」

わっかりやす動揺したので、もうちよつとだけ京子で遊ぼうと思っただ途端に強烈な眠気が襲ってきた。

今寝たら次起きるのがいつか分からないので必要なことを起きている間に京子に伝える。

「次寝るときに私が1週間とか寝てても気にしないでね」

眠気に勝てずそのまま眠りに落ちて行った。

25th bullet

今までで最も大きな『仕事』の夢を見た。

1963, 11, 23

今回の『仕事』は今まで受けてきた依頼とは違い、依頼人自身が私が指定場所に到着してから通信してきて目標を支持するというものだった。

しかも、今回の『仕事』では使う銃を依頼人が用意していた。

指定された狙撃場所へ向かうと、カルカノM91/38しかも丁寧にスコープまで装着している物が置かれていた。

不意に行き過ぎた科学技術である、端末が鳴る。

オーバーテクノロジー

『指定場所に着かれたようですね。目標は12時半前後にそこを通る最も権力を持っている者です』

「そいつをここに置いてある、カルカノM91/38で撃てばいいのか？」

『はい』

「なぜこの銃なのか聞かせてもらえるか？」

『分かりました。実はあなた以外にも狙撃手がいるらしく』

「そいつが使っているのがこれってわけだ」

手元にあるカルカノのマガジンを外し弾数を確認しながら、この銃が指定された理由を言う。

『そうです。それでは目標の死亡を確認しだい電話いたします』

「連絡が早く来るのを待っているよ」

通信を終え、ターゲット目標が来るまでに銃を一度オーバーホールしてから、端末を接続し自動でスコープを合わせる。

その後、分解して持ってきていたM16を組み立ててからドットサイト・サブレッサー・スリングを装着し、これもさつきと同じように端末でレクテイルの位置を調整する。

そうしているうちに12時5分になっていた。

近くにある窓を開けて周りの状況を見る。

下にはかなりの数の人がいる。それに警備員も多い。それと屋上に何人が武装している者がいる。

もしもの時に備えて持参していたガバメントにサブレッサーを付けておき、集中するためにヘッドホンを付け周りの音を遮る。

ガバメントに直接インナーバレルに1発入れてからマガジンを装填する。

カルカノを構え、スコープを覗く前に時間を見ると、12時15分。下にいる人々が見ている方を見る。そこには、ターゲット目標が車に乗ってゆつくりと来ていた。

一度見ただけで殺るのが誰かわかった。

そして、クライアント依頼人がターゲット目標の名前を言わなかった理由も。

頭に照準を合わせ12時半になるまで待ち、12時半になると同時にトリガーを引く。

すぐにカルカノを手放し灰にして、ヘッドホンを外しM16を肩から掛けガバメントを構え先ほどまで屋上にいた武装集団に対する迎撃準備をする。

ドアの隣にある壁に張り付いて相手が来るのを待つ。ドアの向こうに4人が銃を持っている。

そのうちの一人がドアノブに手をかけゆつくりとドアを開けようと少しドアを開けたその隙間から頭を撃ち、ドアを思いっきり開け残りの三人も頭に45ACP弾を撃ち込む。

出来た4つの死体を先ほどまでいた部屋に入れておき屋上にむかう。屋上に出てすぐに端末に通信が入った。

『ターゲット
目標の死亡を確認しました』

相手は依頼人。クライアント。そしてあの4人もこいつの仲間だろう。

「これからわたしはどうすれば？」

『少しお待ちください。逃走ルートは今すぐ割り出します』

「その間にお前の犬は私を始末させるわけだ」

『・・・どういいう意味でしょうか』

相手の言葉に少し動揺が入ったのがわかった。

そしてM16のドットサイトを調整済みのスコープに取り替えて置く。

「おや？違ったか？」

『ええ』

「なら、どうして銃を持った人間が屋上にいたんだ？」

徐々に先ほどまでに分かったことを話していく。

話しながら非常階段を下りて行き裏路地に入る。

『それは私にもわかりません』

「そいつらに話聞くと雇われたって言うてたよ。反政府組織レイブ
ンってところに」

『バカなっ！奴らにそんなことを教えて・・・っ』

「当たりかあ？私が何も調べないでも思っただのか？ここまで報酬
が高い依頼は大体依頼をこなした後消そうとするのが多いんだよ」

裏路地を周りに人がいないか注意しながら進む。

そして目の前に不自然にコートを被った男が電話をしながらこちら

に歩いてきた。

その男にM16を向けてスコープを覗き、足を狙う。

「私を裏切った報いだ。受け取れ」

そう言っただけトリガーを引き男の足を撃つ。

通信越しに相手の悲鳴が聞こえてくる。だが、それも無視して先ほどまで電話を持っていた手を撃つ。

「後、レイブンは潰す。じゃあ」

通信を切り、近くに止まっている回収車に乗り込む。

中にある運転手に合図を送り拠点に向かう。

その車の中で眠りに落ちてしまった。

目を覚ますと京子が目の前にいた。

「起きましたか？」

「何日寝てた？」

「1週間ほどですよ」

「そうか」

布団から出てテーブルの上に置いてある朝食を食べる。

「で、何の用だ理子」

「相変わらず、お前に対して変装は無意味だな」

特殊メイクを剥がしてこちらを見つめてくる。

「えっと、私とアリア達と一緒に泥棒しよ」

学園にいる時の理子の状態になってお願いをしてくる。

私からするとどうでも良かったのだが相手の名前を聞き、少し間をおいてから

「いいよ。ただ条件がある。ブラドは殺らせてもらおう」
「交渉成立だね」

私が手伝うのが嬉しいのかそこらへんでピョンピョン飛び回っている理子を見ながら朝食の後片付けをする。

片づけを終えてノートパソコンを起動させ携帯と接続して、紅鳴館のシステムに乗っ取り内部の様子を探る。

「このセキュリティは相変わらず高いねえ。ここまでして何を守るんだ？」

「お母様が理子にくださったピアスだよ」

理子が暗い表情になったのは軽く無視してノートパソコンの電源を切る。

自分の部屋に行き、武偵用の装備とケースに入れたL115A3を持って玄関に向かう。

「クーちゃんどこ行くのー？」

「武偵高。私を登校させる為に来たんだろ？」

リビングからいつものゴスロリ制服に着替えた理子がやってくる。

「でもクーちゃんすごいねー。対物ライフルを堂々と持っていくな

んて」

「勝手に部屋を見るな。さっさと行くぞ」

部屋の中を探っている理子を放ったまま外に出る。

理子が出てくるのを待ってから鍵を閉める。

歩いて武偵高に向かう途中で獣の匂いがしたが、多分後で会う気がしたので無視した。

武偵高に来たのはいいのだが何をするわけでもなく校内を歩き回っていた。もちろん、授業中も。

途中からは屋上に出てダガーを研いでいる間に1日の授業が終わり帰ろうとしたら、子夜鳴からメールがきた。

再検査をするらしい。しかも採血。

いちを、再検査を行う保健室に向かう。中に入ると制服を脱いで下着姿の女子が数人。

「この状況は一体何なんだ・・・」

入ると女子は服を脱いでいる。そして、若干2名の男子がロッカー内にいる。

ロッカーを見てから外を一度見て、立ったまま何もしていないレキに小声で話しかける。

「外にいる獣が、ロッカーの中にいるバカどもを狙っているな」

こくり。とレキが頷く。

もう一度話そうとしたときに白衣を着た子夜鳴が部屋に入ってきた。

「・・・な、なんで紅葉さん以外脱いでるんですか。再検査は採血だけだとメールに書いていたでしょう。はい、服を着る」

レキ以外の女子が各々服を取りに行ったときに子夜鳴は、ルーマニア語で何かを言った。

外を見続けているレキを見て、もう一度外の気配を探る。

「来る！」

ロッカーの中にいる二人を引きずり出すと同時に、ガラスが割れて二人がいたロッカーが吹き飛ぶ。

襲ってきた獣 オオカミの方を見る。

そこにはオオカミがいた。それもかなり大きい。

引きずりだした、バカの方が天井に向けて威嚇射撃を行った。

「そののバカ！銃は使つな、跳弾する！」

跳弾した弾をを居合に近い形で斬り、ダガーを構える。

後ろを見ると目の前にいるオオカミが吹っ飛ばしたロッカーが子夜鳴に当たったようだった。

「私はお前を簡単に狩れる。もし、死にたくなければここから去れ」

オオカミにダガーを向けて警告する。オオカミは割った窓から引き返して逃げて行った。

キンジはオオカミを追いかけようとガラスが割れた窓から出ようとしたときにバカの方がキンジに向かって何かのキーを投げていた。どうやらレキもついて行ったようだ。あの獣の事は二人に任せるとして問題は子夜鳴だ。

ダガーをしまい、子夜鳴の方に行こうとするとアリアが

「あんたも行きなさい。先生は私たちが手当てするから」
「じゃあここは任せるよ」

子夜鳴のことをあの場にいた女子に任せて私はL115A3が入ったケースを持って屋上に行く。

屋上に着くと、L115A3をケースから出して逃げたオオカミを探す。

「見つけた」

オオカミは人工浮島の南端の工事現場にいた。

その隣にはキンジ達がいる。おそらく、気づいていないのだろう。

L115を構えてスコープを覗いき、オオカミに照準を合わせトリガーを引く。

途中、突然風が吹き弾が逸れオオカミの横1mのところに着弾した。ボルトを引いてもう一発撃とうとしたがレキが狙っていたようなので、銃をしまい帰宅することにした。

翌日、朝リビングの方から物音がしたので見てみると、

「帰ってきてたんだ」

「今さっき帰ってきたところですよ」

実家に出かけていた京子が帰ってきていた。

それに、行った時とは違い荷物の量が多かった。

「久しぶりに帰ってどうだった？望ぶk」

「それ以上は言わないでください！私は桐谷です！桐谷京子です！

！」

京子の本当の苗字を言おうとした瞬間、必死で反対してきたので私も言うのをやめる。

「あ、そうだ。椎名様に手紙を預かっております」

荷物の中から一通の手紙を出して私に渡してくる。

手紙の内容は甲賀との同盟要請。

「要するに、私を敵に回したくないってことね」

「まあ、言い方を変えてしまえばそういうことですね」

こういうのは今まででもよくあった。もちろんすべて断っている。だが、シャーロックが企んでいることの結末を考えると味方は多い方がいい。

「まあ、いいよ。だけど、私と組むとこの先大きな戦いに巻き込まれる。それでもいいなら組んでもいい」
「分かりました、当主に伝えておきます」

京子は荷物の整理をするために自分の部屋に向かう。
私も自分の部屋に向かい情報の整理をしてから寝る。

数日後、公安0課よりジャンヌが司法取引により武偵高に入ることと監視を頼まれ探していると、音楽室からジャンヌの気配がしたので向かってみると

「イ・ウーが私闘を禁止していないことだ。話す内容によっては私が狙われる。だから・・・」
「例えばこういう風に」

扉を勢いよく開け、ダガーをジャンヌの足元に投げつける。
走ってジャンヌのもとまで行き、左胸と喉元にM93Rを突きつける。

「やめる！」
「遠山、銃をしまえ」

キンジがこちらにベレッタを向けてきたがジャンヌがそれを制す。
ジャンヌから銃を離しホルスターにしまって、キンジの方を向く。

「遠山、今のでわかったと思うがイ・ウーには私より強いものはい
る」

「そういえば、ジャンヌって一番弱いよね」

私が言ったことにキンジは啞然としている。
まあ、神崎・白雪・キンジの三人がかりで倒したジャンヌが一番弱
いって言われたら普通驚くよね。

「話題が逸れてしまったな。さて先ほどの質問に答えるが、イ・ウ
ーに制服はない。この学校と同じだ。教えるものは服を着ない」

「お前らは先生だったのか？」

「いや、イ・ウーじゃ全員が生徒であり教師なんだよ。強い奴らが
自分の技術を教えあつてどこまでも強くなる。それがイ・ウーつて
わけ」

疑問を持ったキンジに答えてやると中等部の女子が部活で使いたい
と言つてきたので、話を中断して音楽室をでる。

その後、キンジの提案でファミレス『ロシキー』に入る。

キンジがドリンクバーを3人分頼みジャンヌとキンジが取りに行つ
たので、「お茶取ってきて」と言つて周りに人気のない隅っこの席
に座る。

二人が戻つてきてキンジからお茶を受け取り、話を再開する。

「で、どこまで話したっけ？」

「イ・ウーでは技術を教えあう。までだ、椎名」

「あと、私は人に教えたことがないんだよね」

「お前の言っていることが理解できるものがあるわけないのだ。せ
めてあれを日本語で喋れといつも言っているのだが・・・」

「あれ日本語だよ？ただ昔の言葉なだけで」

「ならば、現代の言葉に直して説明しろ」

「やだ」

「お前ら、いい加減にしてくれ。頼むからイ・ウーについて教えて
くれ」

話の話題が大きく逸れジャンヌと喧嘩をしているとキンジが止めに入る。

「誰にも危険が及ばない情報はそれだけかな」

「つまり、お前は理子に変声術を教え、お前は理子に作戦立案術を教えた。っていうのが教え合いつてことか」

「無法者同士、仲が良いようで・・・」

「仲はいいぞ。理子は努力家だからな。私は好きだ」

「あの理子が努力家だと」

「あれ？キンジ、知らなかったの？理子はイ・ウーで一番力を求めて、勉強してたんだよ」

隣ではジャンヌが「うんうん」と首を縦に振っている。

手元にあるお茶をちびちびと飲み一息つく。

コップの中のお茶が無くなったので、もう一度取りに行く。

「じゃあ、私はお茶取ってくるから聞きたいことがあればジャンヌに聞いて」

ドリンクバーの機械の前まで行き、相変わらずお茶を入れる。

「お嬢ちゃん、一人で何しているのかな？」

お茶を入れ終え席に戻ろうとしたときによくいるチャライ男が話しかけてきた。

「お前みたいなのとかかわっている暇はない。それと私はお前より長い年月生きている。それに死にたくなければ構うな」

近づいてきた男を睨み、わざとスカートを揺らして銃を見せ脅しその場から離れる。

席に戻りお茶をちびちびと飲んでキンジが見ているジャンヌが書いた絵を見る。

「ブラドの絵じゃん。結構似てるね〜」

「ほら、椎名もそう言っている。だから受け取っておけ！」

ジャンヌがブラドの絵を渡して、とりあえず帰ることになった。

28th bullet

数日後の6月13日、今日から理子たちの作戦が始まるらしい。

京子はこの前のことを伝える為にもう一度滋賀へ戻ったので自宅には私一人。

特に何もすることがない私は、暇つぶし程度に武偵高に行っておくことにした。

学校に着くとすぐに教師陣から呼び出しを受けた。

マスターズ
教務課に向かい中に入ると、教師全員が銃を構えてこちらを見てきた。

「一体どうしたんですか？たかが武偵高の一生徒である私に全員が戦闘態勢と言うのは？」

ここに呼ばれた時点で何かばれたであろうことはわかっていたので挑発交じりに生徒として言う。

すると一人の教師・・・綴がこちらに向かってグロック18を撃ってきた。

それをダガーで斬り落とす。向こうもこちらの事がわかっているようにで驚きもしていなかった。

「この写真を見る。最近有名になってきている『執行者』の主要メンバーの写真だ」

3枚の写真を投げて来たのでそれを受け取るとそれぞれの写真に一人ずつ映っていた。

一枚目には中学生位の少女。

二枚目には茶髪で背の高い男がMP5Kを片手で撃っている所。
三枚目帽子を深くかぶり長いマフラーで口元を隠している少女。
写真を見ながら綴を見る。

「そこに映っている者たちで顔が写っているのが遠藤瑠璃と野崎優斗。遠藤瑠璃は武器の密売等を行っていて今も数名の武偵とFBIが探している。そして野崎優斗は遠藤瑠璃を調査している武偵及びFBIを全て殺している」

「危ないひとですね」

「そして三枚目に映っているのが、国家機密で金さえ払えば誰でも殺す暗殺者だ。残念ながら顔を名前は未だに分かっていない」

綴がそれぞれの写真に写っている人間を説明していくのを聞きながら写真を全て燃やして処分する。

問題は今の現状よりも私たちの写真が出回っているということ。もしこの写真が全世界中に回っているとしたら、二つのことが考えられる。

一つは私のことを殺す為に暗殺者が雇われること、もう一つはいずれかの国が私を引き入れる為に部隊を派遣するか。

「だが、私たちはこいつがお前だと考えているが・・・」

「根拠は？」

「「「髪型」「」」

その場にいる教師全員がそろって言った。

まあ、銀色の髪・ポニーテール・長さが膝裏、これだけの材料があれば私って判断できるよね。

「いちを聞いてくけどその写真の入手ルートは？」

「それは教えられない。だが、それを聞くという事は認めるとい

事でいいのか？」

「そうだね。ただ、私は戦^やるきはないよ」

両手を上にあげて戦う気は無いという動作も加えて言う。

それでも、武器をしまおうとする気は無いらしくこちらを警戒した
ままだ。

「ならば、なぜお前はここにいる？」

「依頼だよ。神崎・H・アリアが死なないように守るのが今回の依頼。そのために私はここにいる。これ以上話すとお前たちの身に危害が及ぶ。帰らせてもらう」

「なっ、待て！おい！」

教師の静止を無視して自分の教室に向かう。

まったく、こちらにも用事があるというのに。

自分の教室のドアを開け中に入る。

「はよーざいまーす」「」

早口で言っつて、わざとらしく欠伸をする。

入った瞬間クラスにいる男子が全員こっちを見る。なんか視線が怖い・・・

その状態から数名の女子に拉致され髪の毛で遊ばれる。

男子はこっちを見て「おもちゃにされてる椎名さんもかわいい」「女子同士でいちゃいちゃしてるのを見ていてもいいなあ」「眼福、眼福」と各々感想を言っていた。

一方の女子は私を拉致しながら、「今日はツインテに挑戦だよ!」「紅葉ちゃんのすべすべのお肌触ってる気持ちいいよ」「等々こちらも個人で言っていることがすべて違う。

「そろそろ、自分の席に・・・」

「・・・まだ時間はある!!!」「」

クラス全員一発殴つてやろうかと思うほど無駄な時の団結力が高いこいつらにから穩便に逃げ出すにはどうすればいいか考えながら解放されるのを待つ。

チャイムが鳴り解放されると同時に高天原先生が入ってくる。

いつもならホームルームは無視しているのだが、先ほどの事があったため常に高天原先生を睨んでいる。

「えっと、椎名さんは放課後にもう一度強襲科アサルトの専門棟に来てくださいね。それじゃあホームルームは終わります」

周りで生徒たちが私が何をしたのかと話し合っているようだが、こいつらが知ることは無いと思いつながら教室から出て屋上に向かう。屋上には誰もおらず、そこから見下ろせる街は平和過ぎるように見える。

携帯端末を取り出して、電話を掛ける。

「みい、調べてほしいことがあるんだが」
『何を調べればいいのでしょうか？』

通話の相手は『執行者』の情報処理を担当している天美未悠。彼女と知り合ったのは3年ほど前に彼女がアメリカ相手にクラッキングを仕掛けて逆探知されそうになっている所を助けて、そのまま私たちの仲間に引き込んだという感じ。機器さえ有れば私よりも情報収集が得意な子。

「私と優斗さん、それと瑠璃の写真が東京武偵高の教師が持っていた。その出所を探してほしい」
『リーダー達の写真がですか？』
「そう、毎回付近の防犯カメラ等はすべて破壊しているはずだから正規のルートには無いはずだから」
『わかりました。出来るだけ探してみます』

通信を切って、その場に寝転がり空を見る。

浮かんでいる雲を数えながらこれからのことを考える。私たちの事が広い範囲に渡って知られているのなら世界各地を転々としなければならない。それに後でもう一度教師達と話し合うときにこれからの行動を考える必要がある。

(面倒事はこれ以上必要ないって・・・はあ)

そんなことを考えているうちに足音が聞こえ誰かが屋上に向かってきていた。

「椎名、ここにいたのか」

「お、ジャンヌだ。一体何しに来たのっかな？」

あえて明るく振舞って今の状態がばれないようにする。

「今朝の呼び出し。一体何があっただ？」

「いや、ちよつと話をしただけだよ」

「分かった、今は聞かないでおこう。だがいずれ聞かせてもらおうぞ」

何も聞かずに帰っていくジャンヌを見送ってから立ち上がり一度寮に帰る。

寮に帰り、今持っている武器を置いてUSPと風雷を持ちもつ一度学校に向かう。

30th bullet

放課後言われていた時間より早く強襲科アサルトの専門棟に来た。

中に入ると生徒たちが訓練中だったので暇そうな生徒に伝言を頼み屋上に行く。

屋上からこちらに近づいてくるへりが上空で滞空し、二人が飛び降りてくる。

飛び降りてきた二人の男女が話しかけてくる。

「お前が呼び出すなんて珍しいなあ」

「まず、私たちが会う事自体少ないですからね」

「ちよつと前に会ってると思うけど・・・」

「それでも、今年に入って一回でしょ？」

二人の名前は野崎優斗と遠藤瑠璃。

朝の話で出てきた『執行者』主要メンバーのうちの二人だ。

「で、ここの教師どもは殺っていいのか？」

「今回は話だけで終わらせれたらと思ってるからダメだね」

「じゃあ何でこの装備で来させたの・・・？」

「念のためだよ。二人に何かあつたら困るからね」

今にも誰かを殺しそうな勢いの二人をなだめつつ教師陣が来るのを待つ。

この二人いつもはもっとおとなしいのだが、戦闘用装備を着用すると何故かこうなる・・・まあ普通にテンションが上がってるだけなんだけど。

階段を上る足音が聞こえてきたので、とりあえず二人を黙らせる。

「相手が入ってきててもこちらから撃つ事は無いようしてくださいよ」
「はいはい」

こいつら絶対に撃つ。と思いながら撃たないことを祈る。
入ってくる教師たちに一言。

「付近に配置している奴ら退かしてもらえませんか？話し合いをするのに狙撃手は普通いららないでしょ」

周囲の建物屋上に10人程度の気配を感じとり、相手に話し合いをする気が本当にあるのかと思いたくなる。

「それは無理な相談だ。お前たちが武器を持っている限りはな」

「はいはい。分かりましたよ。じゃあとつと話を終わらせて帰らせてもらいますよ」

後ろの二人は何も言わずに黙ったまま。

相手の方も一番前に立って入る人以外は何も喋らない。

「あなたたちの考えていることは、私たちを逮捕する事だろ？だけど、それは無理だ。私と私の関係者には国単位で誰も手出し出来ない」

「信じるかとも思っているのか？」

「全く思っていないよ。だけど、私が国からの依頼を受けなければ国に相当の被害が出ているぞ？」

「国がお前みたい な者に依頼を出すわけがないだろう？」

「武偵は人を殺せない。だから、邪魔な人間を消すことは出来ない」

武偵法9条。武偵は如何なる状況に於いても、その武偵活動中に人を殺害してはならない。

つまり、武偵は人を殺せない。つまり、暗殺には使えない。

「どうやら君たち『執行者』は野放しにしておくわけには置けない・
・やれ！」

「二人とも伏せろ」

叫ぶのと同時に右手を挙げる。

周囲に配置されている狙撃手スナイパーと後ろの数人が発砲する。

風雷を抜いて力を流し込み、雷を具現化させる。

「紫電！」

31th bullet

「紫電!!」

「バチッ!

一瞬私を中心に紫の雷が流れる。

「カーン、カーン・・・

空中にあった弾丸は全てアスファルトの上に落ちる。

「一体・・・な、に・・・をした」

持っている太刀を杖代わりに何とか立っている教師が話しかけてくる。

後ろには気を失って倒れている者たちがほとんどで気を失っていても立つこともできない者しかいない。

「おや?まだ立ってられましたか」

風雷をしまい、USPの不可視インヴィジブルの銃弾で支えにしている太刀を撃つ。支えが無くなった為にその場に片膝を突いて倒れる。

「今回もまた派手にやったなあ」「紅葉・・・やつぱり強い(ポツ」

伏せていた為に紫雷に当たらなかった二人が起き上がって周囲を見回している。

二人とも自分の武器を構えて目の前に倒れている人たちに照準を合わせる。

「で、お前たちは何者なの?狙撃手スナイパーの顔を見てみたけどこの学校の

生徒じゃないでしょ？私としては喋ってから死んでほしいのだけ
ど」

片膝を突いて倒れている人の前に行き、USPの銃口を頭に当てる。

「君たちがこの教師と生徒を全員眠らせたのは知ってるんだよ」

「ふっ、この者たちに写真を渡しお前の存在を教えこの場所に誘
き寄せたというのに・・・ここまで来て失敗するとはな」

「だーかーらー、お前たちは誰なの？」

「それを貴様に教えるくらいならば・・・」

そう言つて、腕を後ろに回してフラググレネードを取り出してピン
を抜いて私に跳びかかってくる、それを見て後ろに跳ぶ。
が、反応が遅れ足を掴まれて私も一緒に倒されてしまう。

「貴様もろとも自爆してやる！」

「い、や、だ、ね！」

力尽くで手を振りほどいて1m程下がり、大きな炎の壁を作る。そ
の間、約0.5秒（キリッ

-----ドオン!!!

炎の壁の向こうで爆発音が聞こえたので、壁を消して様子を見ると
グレネードを持っていた奴以外はいちを無事。まあ、それぞれ火傷
とかはしてるみたいだけど。

「お、紅葉。無事だったか」「紅葉・・・無事で何より・・・」

私より早く逃げていた二人は仲良く談笑しながらこっちに歩いてき
た。

こいつらいつか絶対殺してやる・・・

「で、あいつらどうすんだ?」「生かしておく理由は無いと思うけど……」

「死んでるのは灰にしといて、それ以外はここの奴らに引き渡しとけばいいと思うよ(多分)」

とりあえず生きている奴らは拘束しておいて放置。

周りのスナイパーはさっきのドラグノフの狙撃で寝てるだろうし・

「とりあえず……寝ているやつら起こしに行こっか」

^{アサルト}強襲科の専門棟から出てみると、何人かの教師に囲まれていた。

あー、起きてみたいですね……とりあえず手を挙げておきましよう。

「とりあえず……銃を下していただけません?これを起こした人たちはこの上で寝てますから」

「レキから話は聞いている……今は何も聞かないでおく……」

教師たちはそれぞれすることがあるため、散らばっていった。

「帰ろっか」

残った私たち3人はとりあえず寮に帰ることにした。

32th bullet

それから数日の間、アメリカに行き国際武偵連盟・G7の要人と極秘で電話会談を行い、私がしばらくの間東京武偵高にいることの通達。及び私達を襲ってきた奴らの調査を徹底することを決定、そして私が武偵としてこの条件も出された。

国際武偵連盟の猛反対した為に会議が難航したためにかなりの時間がかかってしまい、日本に帰ってきたときには神崎達がブラド邸に忍び込んで2週間が経っていた。

・・・時間が経つのは早いよね。

優斗さんと瑠璃の二人は会談後にそれぞれ「仕事がある」と言っていてどこかに行った。

部屋に戻ってソファに倒れこむ。京子はまだ帰ってきてない。

久々の旅客機に乗って、疲れていたのもそのまま寝てしまおうと思つた瞬間携帯が鳴った。

「もし・・・も・・・し（がくつ）」

『もしもし、椎名さんですか？』

「何・・・こ・・・よ・・・な・・・き」

眠すぎて相手にする気もない私は途切れ途切れに言葉を話す。そんなことを気にしてない子夜鳴は面白いことを話し出した。

『今日、あなたがお探しの彼がこちらに来ます。場所はランドマークタワーの屋上です』

「ほお、面白いじゃん。で、何時？」

『もうすぐですよ・・・ふふふ』

すぐに用意をして出かける。とりあえず、借りてきたAA-12と

風雷持って行っておこう。

急いで、外に何故か止めてあったタクシーに乗りランドマークタワーの屋上に階段で上る・・・しんどい。

階段を上っている途中で雷が落ちたような音が鳴り、嫌な予感がする。が、いまさらエレベーターを探すのは面倒なのでゆっくりと階段を上る。

途中で何回か休憩を挟んで上る。

屋上にたどり着くと、理子がブラドに握られていた・・・今出たらやばくね？

ブラドを殺すのは簡単なんだけど、つい昨日までの会談で『武偵が私に対して敵対行動を取らない限り私の行動が原因で傷つくことは許可しない』とかいう事を決めやがった為に今出ていくとそれを守れない気がする。その間にAA-12の弾を選ぶ&込める。

まったりとAA-12に弾を選別しながら込めていると外の方から銃声が聞こえてくる。ショットガンを持ったことが無いので弾を選ぶだけで10分ほど経過してしまった。

ところで弾をわけている時にいたコガネムシはなんだったんだろうね？

さすがに銃声が聞こえなくなったので屋上の様子を見ると、ブラドが槍みたいなのを振り回していてそれを避けている神崎しか見当たらない。

「私もそろそろ行きますかね？」

AA-12を両手に持ちもう一度様子を見ると、どこにいたのやらキンジと理子もいた。

私がゆっくりと歩いて近づいて行っても目の前にいる計4人にはばれていないようで易々と近づけた。

近づく途中で4か所の魔臓を撃っていた様だが、神崎が1発外しさらに理子の銃がジャムだったので結果2か所しかあたっていなかった。

「なんだ、驚かしやがってよ。てめえらごときに俺をなんとかで
k「はいはい。その3人を片付ける前に私と遊びませんか？ブラ
ド君さあ」・・・なっ、お前は。何故！」

喋りかけてから私のことに気付いたブラドは私の姿を見て焦ってい
るようだった。

「いや〜さ〜、やっとお前に会えると思ってここに来てみれば随分
と弱いガキどもを苛めているなあとか見てて思ったんだけどねえ。
たかが800年生きてるからって調子にのってるんじゃないぞ？」

周りの空気を燃やして、ブラドを威圧する。

そのまま一瞬でブラドから1.5mの距離に詰め寄りAA-12を
前に突き出す。

「銃が4つ無いからって安心してるわけないよねえ？」

言っていることを理解したブラドは慌てて両手に持っているAA-
12を奪い取るうとしたがそのころにはすでにトリガーを引いてい
た。

「やっと・・・やっと、お前を殺せる、長かったよねえ！200年
ほど前は君を仕留めそこなっしさあ！あはっ、あははははははは
は！...」

ブラドを12ゲージ弾で八チの巢にしながら、AA-12の弾を撃
ち切る。(ドラムマガジン32×2 計64発)

弾の無くなったAA-12投げを捨てピクリとも動かなくなったブ
ラド上に乗る追撃をかけるように風雷で斬りつける。

返り血を浴びても気にせず切り続ける。

「紅葉、もうやめなさい！」

「ちっ」

条件その2『武偵の指示は出来る限り守れ』を守るために仕方なく手を止める。

ブラドはそのままつめき声を漏らすだけで、まだ死んではない。風雷に付いている血を払い鞘にしまう。

さつき捨てたAA-12を拾って帰ろうとすると神崎が近づいてきて腕を掴まれた。

「っ！お前と話すことなんてないよ……」

掴まれている腕に激しい痛みを感じる。おそらくAA-12を片手で32発も乱射して腕を痛めたのだろう。

「この腕痛むんじゃないの？さつきの散弾銃撃つて……」

「お前には関係ないだろ……それよりも、私から離れる！」

神崎を蹴り飛ばして離れさせ距離を取った、直後に雷が落ちてきて私に直撃する。

両腕を盾に力を流し出来るだけ威力を軽減したのだがそれでもかなりの威力があった。

「そういえばあのコガネムシパトラの使い魔だったじゃん。なんで気づかなかったんだろ」

「ちよつと紅葉、大丈夫！？」

「あたり……ま……え……だ」

そこで意識は途切れた。

33th bullet

「あゝ、痺れた」

「きゃっ」「うわっ」

勢いよく起き上がると同時に小さな悲鳴が聞こえた。

悲鳴が聞こえた方を見ると、神崎とキンジがいた。

「お、神崎とキンジ君じゃないっすか。てか、ここどこっすか？」

「え、ああ。ここは病院よ？雷に打たれたあんたをここまで運んだのよー！」

「それは助かりましたね。ありがとうございます」

部屋の中を見てみると、自分の持っていた武器が無いことに気付く。

「あれ？私の武器どこ？」

「実はそのことなんだが・・・」

神崎が言いにくそうにしていたので代わりにキンジが言う。

「お前の腕の骨にヒビが入っているらしくて・・・」

「要するに銃を持つなっただけですわ。やっぱりAA-12を片手で撃つのは無茶でしたね。ところで誰が持っているのですか？」

「ああ、ついさっき京子がここに来て持って行ったわよ」

京子に持って行かれると・・・絶対返してくれないんだよね！

「じゃあ、私たちはまだいろいろとしなければいけないから帰るわ」

「頑張ってくださいね」

ベッドの上で軽く手を振りながら二人を見送る。

「ところで京子。私が何時間寝てたかわかる？」

「私とてずっとそばにいたわけではありませんのでわかりません」

まあ、あいつを殺しに行こうとした時は京子帰ってきてなかったもんね。。

「それと椎名様。腕の方ですが・・・」

「ああ、そういえば、ヒビ入ってるんだっただけ？」

「はい。両手共にかなりひどく、特に右手は折れる寸前らしいです」

・・・絶対AA-12の反動だけじゃないね、コレ。
多分、あれだ。落雷を防いませいな。

「あ、そうだ。私の装備品の被害ってあった？」

「風雷とAA-12に被害はありません。ただ、制服が焼けてしまっています」

「じゃあ、それほど問題は無いね」

物的被害は特に無し。主な被害は腕の骨だけだね。
携帯を取ろうとして、今持っていないことに気付く。

「椎名様、お探しの者はこれですか？」

京子が自宅にあるはずの携帯を持ってきた。

「お、京子ナイスだよ」

京子から携帯を受け取り、知り合い達（主に『仕事』関連の人）に「腕の骨にヒビはいつたせいで、しばらく仕事できないから、依頼はしないでね。」とメールを送る。

「前から思っていたのですが、それはなんなのでしょうか？」

「行き過ぎた科学オーバーテクノロジーつてやつだね。しかも、名前未定！まあ、簡単に言えば、スマホにありとあらゆる機能を積んでる。これさえあれば某国の核ミサイルさえも発射可能な代物・・・」

「悪用したらそれを八つ裂きにして、コンクリで固めて琵琶湖に捨てますよ」

「するわけないでしょ、私だってまだまだ生きていたいしさ」

京子に見つからないように、携帯を使って勝手に今日退院出来るように設定しておく。

十分もしないうちに看護師さんが「退院の準備が出来てる」的なのを教えに来てくれたので、そのまま退院することにした。

34th bullet

寮に帰って武器庫と言う名の物置部屋の中を見るとさまざまなたらップが・・・

「あ、それ以上行かない方がいいですよ。熱源を感知して自動で爆発しますから」

「何も50?のC4は置かなくてもいいと思うんだけど」

がくがくぶるぶる。ってなりながら近くに置いてあるC4を見る。京子を見ると普通に笑いながらこっちをみている・・・怖いです。その笑顔がひじょーに怖いです。

扉を閉めて、二度とこの部屋には入らないと心の中で誓いリビングゲに向かう。

「それより京子！私が敵と遭遇した場合どうすればいい？」

「腕は使わずに何とかしてください」

きっぱりと言われてしまいました。

まあ、私としても敵と殺りあう必要もないんですけどね。ソファの上で寝ようとしたら携帯に電話がかかってきた。

「はい、もしもし。こちら『迅速かつ正確な仕事を』がモットーの暗殺者の電話番号です。おかけ間違いの無いようなら要件をさっくりと言っちゃってください」

『・・・・・・・・・・』

「・・・で、金一かカナ。要件はなんですか？」

『要件は直接会って話すわ。あなたなら私の居場所位わかるでしょ？』

通話を終了して出かける準備をする。

「じゃあ、京子。ちよっくら行ってくるよ〜」

「無茶はしないでくださいね」

「はい」

とりあえず、京子が持ってもいいと言っている唯一の携帯端末（名前未定）を持って行く。

さっきの電話をしているときからカナは場所を移動していない。のんびりとカナがいる空地島に向かう。

空地島に着くと数か月ほど前にあった某緊急着陸のせいで動かなくなった風力発電機の下にカナが座っていた。

「ちわーすカナ。今回は私に何をさせる気なのでしょうか〜」

「紅葉、久しぶりね。会えて嬉しいわ」

カナを見ながら、たまに下に転がってるキンジをちらちらと見る。

「それより紅葉。一緒にアリアを殺しましょう」

「喜んで！と言いたいところだけど、今まともに戦える状況じゃないから無理なんだよね」

袖をまくり、腕の包帯を見せる。

「そういうわけで今回は私は遠慮しとくよ。それで、私はそこにいるのを連れて帰ればいいのかな？」

「キンジは私が運んでおくわ。それよりも、パトラに気を付けなさ

い

「気を付けるって何を？」

カナが包帯を巻いている腕を指してくる。

「その腕。彼女のせいなんじゃないの？」

「分かってたんだ、確かにこれはあいつのせいだよ。でも2度も不覚は取らないよ」

「そう、ならいいわ。・・・もし、イ・ウーが無くなればあなたは
どうするつもり？」

「目的を果たすだけだよ。それじゃ、私は帰るから」

カナと別れさつき来た道を引き返して、寮に帰る。

いや、さすがに帰りはタクシー呼びましたよ？さすがに歩くの疲れ
ましたから。

寮に帰ると京子に「なんで護衛の人たちを撒くようなことするんですか」から始まり2時間の間説教をくらった。

35th bullet

翌日、普通に武偵高に行こうとカバンを持つとした瞬間に苦無が3本ほど飛んできた。
しかも全部本気で投げつけてきた。

「ちよつ、京子。今は危ないって!」

「椎名様、そのカバンは私が教室までお持ちします」

「私のセリフ無視なの!？」と言おうとした途端にカバンを持って行かれる。

返してくれそうにもないので、とりあえず武偵高に向かうことにする。

・・・え?最低限の武装の義務?

私は武器を持ちたいけど京子がすべての武器を管理してるので京子に言うてください。

武偵高に着く前に教務科からの連絡掲示板の前にジャンヌがいたので、京子に先に行っておくように言ってジャンヌがいる方に向かう。

「ジャンヌ、椎名」

私が声をかけようとしたら、後ろから私とジャンヌを呼ぶ声が聞こえた。

声のした方を向くと神崎とキンジがいた。

ジャンヌもキンジを見て手招きしていたので、私もついていく。

「あんたが武偵高の預かりになっているのは知っていたけど、似合ってるじゃない、その制服」

いきなり態度でかいな、こいつ。
ちなみに私態度のでかい人間は嫌いです。それはもう、この国だと
刀を持って斬りあってる時代からずっと嫌いです。

「私は遠山と椎名を呼んだのだ。神崎・H・アリア、お前に用はない」

「こつちにはあるのよ。ママの裁判にあんたもちゃんと出るのよ？」
「それ私がやってあげようか？ジャンヌも縛られなくなるし、お前の母親も無罪になるけど」

「椎名それは余計な世話だ」「あんたの力は借りないわ」

やっぱる断られてしまいましたか。

それでも、かなえさんの無実を示す証言の約束を取れたアリアは嬉しそう笑った。

「まあ、けがをしているみたいだから、イジめるのはまた今度にしてあげるわ」

「私は今すぐにでもかまわないぞ？」

アリアにイラつときたのか、ジャンヌがケンカ腰になっている。

「杖をついている状態でやるのか？」

「椎名、足一本使えない状態でも私はこいつには負けないぞ。それにこの杖には聖剣デュランダルを仕込んでいる」

ジャンヌがアリアの方と見合って火花を散らし始める。

ここで戦いになったら、どっちが勝つか見てみたいんだよね。 w k
t k

「こらお前ら、朝っぱらからケンカすんな。椎名も見てないで止め

る。それなりジャンヌ、足どつしたんだよ」

争いごとの嫌いなキンジが話を逸らす。

「……虫が、な」

「虫？」

「道を歩いていたら、コガネムシのような虫が膝に張り付いていたのだ」

コガネムシねえ、もしかしたら……でも、確信はないから言うのはやめておこう。

「それで私は驚いてな。そのせいで、道の側溝に足がはまった。ちようどそこを通りかかったバスにひかれたのだ」

「……おい」「（笑）」

「全治2週間だ」

バスに轢かれるのは運が悪いとしか言えないね。それでも、全治2週間で済んだのはさすがジャンヌだね。

「……それはそうと、遠山。ここにお前の名前があったぞ」

ジャンヌが掲示板を指さす。

そこには『一学期・単位不足者一覧表』と書かれている紙がサバイバルナイフで止めてある。

その中には見知った名前があった。

『 2年A組 遠山金次 専門科目 (探偵科) 1・9単位不足

』

単位について詳しいことは知らないんですが、確か1学期で必要な単位って2単位だったはず。

・・・つまりこいつは大変やばいと（笑

「大丈夫だと思うぞ、キンジ。こういうときのためにああいうのがあるんだろ？」

キンジの肩を叩きながら、隣の掲示板の方を指さす。

その掲示板には『夏期休業期・緊急任務』クエスト・クエストと書かれている張り紙があった。

どうやら武偵高では単位不足はよくあるらしいので、依頼を格安で引き受けている。

まあ、私もよく知らないんですけど。

「私は行くよ。キンジ、頑張つて探しなよ」

掲示板にある依頼の中から必要な単位が取れるものを探しているキンジに軽く手を振りながら自分の教室に向かう。

教室に入り自分の席に着くと教科書からカバンまで定位置に配置されていた。

教科書の一番上に置いてあった紙を広げて読んでみると、

『3時間目の体育は参加しないでくださいね？それと、父の話では近いうちに椎名様の周辺で災い起きるらしいのでお気を付けください、とのことです。それでは午後にもうお会いしましょう』

朝から不吉なこと書いてるなあ。まあ、私は災いなんてどうでもいいんですけどね！

とりあえず、紙を誰にもばれない様に焼却する。

36th bullet

その後は2時間目が綴先生が来れないので休講。3時間目以降は当然のようにサボる。

昼休みに京子は必ず屋上に来るのを待つ（私が授業をさぼっていつも屋上にいる為勝手に来ているだけなんだけど）

二人分のお弁当を持った京子が来たのを音で確認してから、起き上がる。

「椎名様、授業をさぼるのはいいのですがせめて先生方に何か言うてからにしてくださいね」

「りょーかいです。今度から気をつけます」

「はあ」

ため息吐かれてしまいましたよ。

まあ、私が守る気が無いのを知っているわけなんだけどね。

「とりあえず、昼食にしましょうか。こちらが椎名様ですね」

そう言つて黒い方のお弁当を渡してくる。ちなみに京子のは青色。

多分中身は同じものだと思いますよ？

「いただきます」

箸を取り出して、ちびちびと食べ始める。

いつもちびちび食べてるから5時間目は遅刻している。

京子は遅刻しちゃうわけにはいかないんだけど、私が一緒に顔出してなんとかしてる。

5時間目開始の時間に食べ終わり、強襲科棟に向かう。

強襲棟に着き、蘭豹に挨拶だけしてその場から離れる。
詳しい場所は分かっているけど、目的は決まっている。
警戒しながら小さな気配を拾って歩く。

ちなみに、目的は先ほどこの武偵高内に侵入したパトラの使い魔の
消去。あいつの使い魔を野放しにしておくほど私も甘くないからね。
気配を辿ってきた先には探偵科棟があった。

「さてと、小さな小さな獲物を刈り取りますかね」

その場で大きく深呼吸をしてから、探し始める。

理子の悲鳴（？）が聞こえてきたのと同時に3階の窓から出てきた
のでそれを爆散させる。

念のために周囲に呪いが飛び散っていないかの確認しておく。

問題が無いのを確認して帰ろうとしたときに上からキンジと理子が
降ってきた。

「強襲科にキンジ急げ！武偵高裏サイトにさっき書き込みがあった
！アリアとカナが戦っている！」

へえ、カナと神崎が戦っているんだ。

まだ神崎を殺すことはないだろうけど、今日は一体何しに来たんだ
ろうね。よし、確かめに行こう！

というわけで私は今、強襲科棟にある体育館に来ていまーす。

・・・人が多すぎて先に進めません（汗

とりあえず、人込みをかき分けて中の方に侵入です。

「やれやれやれや！どっちか死ぬまでやれや！」

蘭豹がかなりハイテンションみたいです。どうせ酒でも飲んでるのでしょう・・・こいつ20歳じゃないけどさ。

「蘭豹、ちよつといいか？私もあいつらの戦いに参加させてもらいたいのだが」

「別にいいが、お前武器はどうするんだ？いま持てねえだろ」

「そのことなら問題はない。京子、お前の持つてる武器で刀とかあるか？」

「椎名様より頂いた小太刀2本ならば」

突然後ろから現れた京子に蘭豹は少し驚いていた。

「ちよつとそれ借りていい？」

「無理はなさらずに」

京子から紅蓮と氷裏を受け取り、二人が戦っている闘技場の中に入る。

途中の扉は壊しました。すみません。

扉を開けた事と壊したことに周囲からは悲鳴が聞こえてきたり。

「カナ、少し遊ばない？私とやる方が楽しいと思うんだけどな」

二本とも抜刀してカナに向ける。

「私があなたにかなわないのを知っていて言っているのかしら？」

「やってみなくちゃわからないでしょ？」

「紅葉・・・あんだ、邪魔しないで」

「うるさい、お前は黙っとけ」

隣にいる神崎は放置しておく。

「いいわ。ただし、彼の邪魔が入ればやめるわよ？」
「構わない」

――――パン。

インサイズビレ

カナの得意な不可視の銃弾を撃ってくる。それを弾き返す。

周囲からは見えない弾丸を弾いたことで歓声上がる。

その後5回弾き返して向こうの弾がきれたのと同時に近距離に持ち込もうとカナに突撃しようとしたところでキンジが入ってきた。

「カナ、やめろ！！」

「こおら、この遠山。授業妨害すんなや！脳ミソぶちまけられてえのか！」

蘭豹がキンジの足元にM500を撃ち込む。

着弾時の反動でキンジはこけかけたが、それでもカナに向かって走る。

「どうやらここまでみたいだね。約束通り今から私は何もしない」

納刀してカナと神崎から離れる。

神崎はカナを倒そうと必死に戦っているがどの攻撃も掠ってさえない。

背後からの攻撃さえも見えない斬撃に防がれる。

この場にいるのも面倒になってきたので壊した扉から出て京子を探す。

まあ、探すっていうのはこの場から離れる口実なんですけどね！
体育館から出てすぐのところにいる、京子に紅蓮と氷裏を返す。

「椎名様、腕の方は？」

「まあ大丈夫だよ。そこまでは無理してないからね」

と、京子と話していると湾岸署の婦警が体育館に向かって走っていった。

「言っておくが今はまだ神崎を殺しはしないぞ。まあ、わかっていないのはキンジだけだろうがな」

婦警と目が合い、アイコンタクトで「分かっているよ」とだけ言うてきた。

「椎名様、今の方はお知り合いですか？」

「あいつは、峰理子だよ。まあ、気付かなくておかしくはないけど」

走っていく理子を遠目に見ながら、これからどうするかを考える。

その後は2時間目が綴先生が来れないので休講。3時間目以降は当然のようにサボる。

昼休みに京子は必ず屋上に来るのを待つ（私が授業をさぼっていつも屋上にいる為勝手に来ているだけなんだけど）

二人分のお弁当を持った京子が来たのを音で確認してから、起き上がる。

「椎名様、授業をさぼるのはいいのですがせめて先生方に何か言うてからにしてくださいね」

「りょーかいです。今度から気をつけます」

「はあ」

ため息吐かれてしまいましたよ。

まあ、私を守る気が無いのを知っているわけなんだけどね。

「とりあえず、昼食にしましょうか。こちらが椎名様ですね」

そう言つて黒い方のお弁当を渡してくる。ちなみに京子のは青色。

多分中身は同じものだと思いますよ？

「いただきます」

箸を取り出して、ちびちびと食べ始める。

いつもちびちび食べてるから5時間目は遅刻している。

京子は遅刻しちゃうわけにはいかないんだけど、私が一緒に顔出してなんとかしてる。

5時間目開始の時間に食べ終わり、強襲科棟に向かう。

強襲棟に着き、蘭豹に挨拶だけしてその場から離れる。
詳しい場所は分かっているけど、目的は決まっている。
警戒しながら小さな気配を拾って歩く。

ちなみに、目的は先ほどこの武偵高内に侵入したパトラの使い魔の
消去。あいつの使い魔を野放しにしておくほど私も甘くないからね。
気配を辿ってきた先には探偵科棟があった。

「さてと、小さな小さな獲物を刈り取りますかね」

その場で大きく深呼吸をしてから、探し始める。

理子の悲鳴（？）が聞こえてきたのと同時に3階の窓から出てきた
のでそれを爆散させる。

念のために周囲に呪いが飛び散っていないかの確認しておく。

問題が無いのを確認して帰ろうとしたときに上からキンジと理子が
降ってきた。

「強襲科にキンジ急げ！武偵高裏サイトにさっき書き込みがあった
！アリアとカナが戦っている！」

へえ、カナと神崎が戦っているんだ。

まだ神崎を殺すことはないだろうけど、今日は一体何しに来たんだ
ろうね。よし、確かめに行こう！

というわけで私は今、強襲科棟にある体育館に来ていまーす。

あの後、教務課に行って扉の修復代金を払ってとりあえず帰宅した。
帰宅途中でカナとの試合を見ていた生徒からはなぜか尊敬の目で見
られていました・・・何故でしょうか？

寮に帰って夕食（京子作）を食べている最中にドアチャイムが鳴っ
た。

玄関のドアをゆっくり開けるとそこに神崎が立っていた。

「どうしたんだ神崎。私のところになんか来て・・・いや、聞かないでおく。大体の予想はつくからな。入れ」

かなり落ち込んでいる神崎をとりあえず中にいれる。

大体の予想の内容は、

キンジ宅にキンジとカナがいて仲良くしてた。キンジがカナと組むためにカナが自分を（神崎視点）。キンジが自分を撃った。

多分こんな感じでしょう。

神崎は京子に任せておいて私は夕食を食べてしまいました。

結局そのまま、神崎は居続け夏休みに入ってしまった。

途中に期末試験みたいなのが あったみたいんだけど私には関係ないんですと。

その神崎は夏休みに入る7月7日の夜に浴衣を着てどこかに出かけてしまった。

私も京子と一緒に夏祭りを見に来た。

「椎名様、私はこういうのは初めて来ますので・・・なんだか、ドキドキします」

「へえ、京子ってお祭りとか行ったことないんだ」

「はい、小さいころから家の外に出ることは無かったものですから」

まるで、白雪と一緒にだな。

「外に出ることになった理由は諜報活動とかかな？」

「そんなところですよ。外に出してもらった時は本当に嬉しかったです」

「なら今まで楽しめなかった時間の代わりに、今楽しめばいいと思うよ。いちを私だっているんだからね」

やっぱり私からしたら京子はまだまだ子供なんだよねえ。

・・・誰か今私も子供だろって突っ込んだ？

「じゃあ、行こっか」

「はい！」

「屋台全部回るよ！」

京子を連れて端から屋台を見て回る。

端からすべての屋台を物（食糧のみ）を購入していく。
途中のたこ焼き屋で見知った顔があった。

「これは椎名様、お久しぶりです。この前はありがとうございました」

目の前で直角に近いお辞儀をして私のことを見ているのは、ここら
一帯を仕切っている影縫組の組長さんです。

この組の活動資金を私が出しているので実際のところ、影縫組は私
が仕切る権限はありません。

だけど、そんな面倒なことをしたくありませんのでトップの影縫さ
んに任せています。

「とりあえず、注文するよ？たこ焼き二つ、いつもので！」

「わかりました！お前ら、椎名様にいつものやつだ！」

「「「わかりました！！」」」

影縫さんの指示で今まで以上にテキパキと動き出す組員の人たちに
京子が驚いている。

「椎名様・・・この方々は？」

「『地域の活動にいつも貢献』がモットーの影縫組の人たちだよ」

とりあえず簡単な説明だけをしておく。

京子が私の言う事を嘘と判断したみたいで、本当の活動が何かを知
りたがっている。

「「椎名様！出来上がりやした！」」

「ありがと、これ代金ね」

「「ありがとうございした!!」「」

たこ焼き私SPを2個受け取って1つを京子に渡す。

影縫さん達が用意してくれていた椅子に座り食べる。

途中から影縫さんが写真を撮り出して、たまに「これは組の宝になる!」とか呟いていたことは放っておく。

京子に少し離れると言って、ちらっと見えたピンクのツインテールを追いかける。

神崎とキンジを追いかけて神社本殿の裏側に来た。

二人は裏にある縁側みたいな所に並んで座っている。こつやつて見ているとカップルに見えてしまう。

「こんばんわ、お二人さん。君たちが今から話そうとしている事聞かせてくれないかな？」

「なんであんに聞かれなきゃならないのよ」

「なんでお前にきかれなきゃいけないんだ」

二人が同時に言うのを聞き、やはりこの二人ならと思う。

「やっぱり君たちは仲がいいね」

「な、なな・・・そんなわけないでしょ！キ、キンジと仲がいいわけじゃないじゃない！」

赤面して『仲がいい』ことに反応している神崎を見ながらシャー口ツクと重ねてしまう。

「あいつと似ている所なんて無いんだよね。強いて言えば戦闘能力の高さかな」

「何言ってるんだ椎名？」

「何でもないよ。それよりも二人とも自分の話したいこと話さなくていいのかな？」

お互いどちらから話す出せばいいか分からずに黙ってしてしまう。

「カナの事・・・勝手な思い込みをしてごめんね。あたしはカナに

負けた。少し時間が必要だったけど、それを自分で認めることができた。あんたが言った通り、私よりも強い武偵はいる。今はその1人と戦えたていい勉強にもなったと思ってる。それとなんとなくはわかっていたんだけど、カナってあんたの昔の恋人とかじゃないわね」

・・・推理よりも、持ち前の直感で当てた感じだね。

「でも、他人でも無いと思う。なんていうか、その。強い絆みたいなものがある存在だと思っわ」

さすがに兄弟とは気づいていないみたいだけど、やっぱりこいつはシャーロックの曾孫だね。

こいつに遺伝してるのってあんまりないと思っただけで、色々と遺伝している。

「回りくどいのは嫌いだから直接聞くけど、あんたこれからカナと組むつもりなの？」

不安そうな顔でキンジを見ながら聞く。

「・・・それはない。俺とカナはそういう関係じゃない。それにかくも違い過ぎる。椎名ならお似合いだろうがな」

「私は生涯孤独のスナイパーですよ」

キンジがきっぱりと否定すると、神崎はかなり安堵したようだが表情に出ている。

どうやら神崎はカナの事でかなり心配だったらしい。

「だが、カナはお前にとってはまだ危険な存在だと思う。理由は分

からないが、お前のことをまだ狙っているみたいなんだ。だから、気を付ける」

「それは無いと思う。少なくとも今はだけど」

「それはそうと、この際だから改めて言わせてもらおうが。アリア、この前俺にパートナーをやめるつもりかって聞いてきただろ？俺はそもそも武偵自体をやめるつもりなんだ。だから俺は武偵高をやめる。来年の4月からは普通の高校に通う」

キンジが決めた事なら私が口を出す理由もないですね。

「分かってる。それは分かっているんだけど・・・」

「逆に考えれば来年の3月の末までは武偵って事じゃない？それにキンジ自身もイ・ウーのメンバーを3人倒しちゃっているんだから目も付けられてるからね」

「それくらいは俺だって分かっているさ。やったらやり返されるのが武偵の宿命だろ？あーあ、俺も面倒なことに首を突っ込んでしまったな」

キンジがわざとらしく言うと、神崎は私たちに背を向けてうつむいた。

ぐすん、ぐすん・・・

神崎が鼻を鳴らしだし気になったキンジが顔を見ようとすると顔をそむける。

余計に気になったキンジが縁側から降りて見ようとしたら今度は背を向け、キンジが顔を見る為に追いかけるとそれから逃げるように回る。これで1周したことになる。

回転しているときにちらっと見えただけで神崎が泣いているように見えた。

「なんなんだよ、そのリアクションは？」

キンジが神崎の腕をつかんで自分の方に向かせると。

「あ……」

「あ、その……」

キンジが気まずそうに何かを言おうとして詰まった時に

「うみああああああ」

突然奇声をあげながら飛び上がり浴衣の裾を踏んでその場にひっくり返る。

「くすぐったいって、ちょ、ちょっと！やめっ、みきゃぱりゃ！」

2回目の奇声を上げ出して、浴衣を首の辺りから脱ぎ始める。

「ちょっと待て、アリア！一体何をしてるんだ！」

「神崎、とうとう頭までおかしくなったか（笑）」

「キキキンジ、なんとかして！ふ、服の中になんかいる！」

「だ、大丈夫か！？」

神崎が苦しそうにしているのを見てキンジが帯を背中の方から引っ張り服を緩めた。

そうしたら、コガネムシみたいな虫が出てきて近くの木にとまった。……ん？コガネムシ？

そこでのびている神崎を放置したまま、コガネムシを殴り潰す。

「キンジ、神崎の身の回りの事には注意しておけ。私は出来る限りお前たちを見ておく……よくない事が起きるぞ」

「なんだよ？よくない事って？」

「いずれ分かる。それと、私は用事があるから帰らせてもらっつよ」

ノビている神崎を放っておいて、キンジに帰ることだけ言って白雪を探しに行く。

白雪の部屋に電話をかけても繋がらないので白雪が行きそうな場所に行ってみる。

一番最初に思いついたのがキンジの部屋。

そういうわけでキンジの部屋に来ただけ……

「何で白雪以外居なくて、ベランダにM60が置いてあるの!？」

部屋には白雪しかおらず、ベランダにはバイクカバーをかぶせられているM60があった。

「し、椎名様。一体こんなところに一体何の用でしょうか？」

おそらく先ほどまで起こっていた、キンジ宅での内戦の後片付けを終えたであろう白雪が突然入ってきた私に驚きつつ聞いてきた。

「神崎の事で話があるんだけど」

「私も、と言うよりは星伽からお話があります」

星伽から私に話? どうせまた面倒なことなんだろうな。

「お恥ずかしい話なんですけど、何者かにイロカメラヤメが盗まれてしまいました。それでその時に、よくない虫が見つかったんです」

「スカラベ……だね? なら、話は早い。すでにこちらでも数匹確認している。そして、神崎・H・アリアにその虫が付いた。出来ればお前には神崎を見てほしい」

「分かりました。出来る限りのことはさせていただきます。……それで、銃口を持った時熱くなかったですか?」

「あの程度の熱なら全然大丈夫だよ。私は - 3000 以上 20000 以下なら何も感じない。この前説明したと思うけど私の力は超能力者の敵。封じられた禁忌の術、その代償は生命力」

「.....」

「だから、気にしない方がいいよ」

白雪が黙ってしまい、帰ろうとしたときにこの部屋の主が部屋に帰ってきた。

「キンジが帰ってきたようだぞ。私はそろそろ帰らせてもらうけど、神崎の事頼むよ」

「あ、はい、分かりました」

玄関の方に向かうとキンジとすれ違った。

「白雪にも話しておいたが、神崎の事頼むよ」

「お前は一体何の話をしているんだ？」

「.....いずれ分かるって」

意味の分かっているかないキンジに詳しい説明はしないでおく。いまいってもどうせわからないだろうからね。

7月24日、キンジ達が台場でカジノ警備をする日やってきた。私も神崎の事が多少気になっている為に、影縫さんに頼んで彼の警備という形で来ている。

「影縫さん私が合図をしたらすぐにこの場から離れてくださいね」
「分かっています。椎名様の言う事はいつも当たる。この場にいると言った事、私の力ではどうにもならないことは分かっています」

「私が表に出る時はいつもあなたには迷惑かけてしまうね」

私がいつも外に出る時はいつも影縫さんに頼んで彼の護衛、という形で色々ことをしている。

もちろん全て公に公開されている会議だけなんだけど。

「影縫さん、あなたも変装している武偵の判断は出来ますね？」

「はい、ここには4名の武偵がいますね」

たしかにここにいるのは4人の武偵、キンジ・神崎・白雪・レキ。影縫さんが周りを一度見回した後、私に小声で話しかけてきた。

「あと、椎名様を監視している者が・・・」

「その存在は私も気づいているよ。少なくともこういう人目の多い場所では手は出してこないから安心してください。彼らの事は私が一番よく知っていますから」

周囲にいる私を監視している数名の事は今は置いておく。

神崎達の場所をそれぞれ見ると、レキとキンジは他の客と共にルーレットの台でプレイしている。神崎は神崎でそこら辺をちよろちよろと動き回っている。

となりにいる影縫さんの背中を軽く2回叩いて、持ってきているM93Rをすぐに持ち出せるようにしておく。

「椎名様、お気を付けて」

「影縫さんの方も、気を付けてください」

影縫さんが出口から出るのを確認してから、レキの方を見る。彼女もわかっているらしく、一度頷いた。

「皆様、頭を下げてください！」

M93Rを取り出し、銀狼が飛び出す。

銀狼が客の頭上を越えてジャッカルの頭に人の下半身という化物に跳びかかる。

レキがドラグノフを取り出して撃ち始める。

私は客の逃げる出口を確保するためにルート上にいる奴らの頭と胴をそれぞれ打ち抜く。

「思ったより数が多い。それにあいつらの行動も気になるしね」

後方で戦闘をしている神崎達を一度見てから、外に出る。

41th bullet

カジノに来ていた客たちも逃げ出したらしく外には誰にもいなかった。否、人間と呼べるものはいない。いるのは全て人外と呼べる生物たち。いや、実際には生物ですらないだろう。

「・・・パトラと手を組んだのか？」

「彼女とは手を組んでいるわけではありません。彼女には彼女の、我々には我々の目的があります」

「目的・・・か。それは私だって持っているものだよ？」

数十体の使い魔・式神の中から一人の少女が現れる。

見た目は白雪と同じような巫女装束。

だが、決定的に違うのは色。白雪たち星伽の装束は白なのに対し、この少女が着ている装束は黒。

「・・・その衣装をいまだに着続けているなんてね」

「我々は星伽の対なる存在。星伽がある続ける限り我々は潰えない」

「まあ、いいよ。星伽と対なる私達凜音の人間は人前に姿をめつたに現さない。それを破ってまでここにいるという事は、本格的に動き出すと捉えていいのかな？」

「構いません」

持っていたM93Rをしまい、炎と氷で刀を作り出すと同時に少女も刀を抜く。

襲いかかって来る、パトラの使い魔を斬り捨てながら少女に近づくと

「パトラの使い魔を盾にして、自分は何もしないのか？凜音も落ち

たものだな」

「あの魔女の使い魔など時間を稼げればいいのです。これからが本当の闘いです・・・凜音式、一ノ構」

少女は刀を上段に構えを取った直後に、斬りかかる。

右手の氷刀で相手の刀を抑え、左手の炎刀で斬りかかった時に炎刀が打ち消された。

「なっ!？」

氷刀を弾かれてバランスを崩されたため一度交代する。

「本日まで我々があなたに抵抗するための手段を研究していないとも思っていたのですか？」

「・・・いいね、実にいいよ。戦いは常に予想外じゃないと面白くないよね。さて、じゃあこの戦いで研究の全てを見せてもらうかな」

右手に持っていた氷刀を投げつけて、M93Rを取り出す。

少女は投げつけた氷刀を、ガキンツという音を立てて弾く。

取り出したM93Rをセミオートから3点バーストに切り替えて発射する。

「君達の研究とやらは、私よりは星伽に有効って考えた方がいいと思うんだけどさ。私が火しか使わないとは誰にも言っていないし、それに凜音の始まりは私だよ？それを忘れてもらったら困るんだよね」

少女は銃弾を刀で弾くので精一杯のようにみえる。

途中でセミオートに変え一発左足に掠らせる。

「お前では私を殺るなど無理だ。それにお前たちはパトラを軽く見

過ぎていく。今は・・・帰れ」

「あなたの言う事など信用出来るものですか・・・」

弾を左足に掠らせた数秒後に少女が倒れた。

「・・・さつき撃った弾は特殊な麻痺弾だよ。もう、動けないだろう・・・!？」

目の前で倒れている少女をカジノ内に蹴り飛ばす。

それと同時に、軸にしていた左足に激痛が走りその場に倒れる。

「京子、あれを」

「御意」

背後に現れた京子からガンケースを受け取り中身を出す。

中から取り出したL115A3を構え撃たれた方向に向けてスコップを瞬時に覗き撃ち込む。

「外したか・・・っ!」

「椎名様、今すぐ治療を!」

ガンケースの中に何故か入っていた救急箱から必要なものを取り出してテキパキと治療し始めた。

「ひとまず止血だけは終わりましたが・・・」

「アキレス腱がやられてるんでしょう、それくらいは自分でもわかっているよ。京子、肩貸りるよ」

京子の肩を借りて立ち上がり、空いている右手でL115を持つ。

「このまま屋上に連れて行ってくれないかな。出来ればここでパトラを仕留める為に」

「・・・あなたがそう言うのなら。ただ、絶対に無理はしないでください」

京子の肩を借りながらできるだけ急いで屋上に行く。

パトラの手が神崎達に及ぶ前にあいつを排除するために。

42th bullet

屋上の上つてきた後、端のところに伏せて、L115を構えスコップを覗き込み神崎達を探す。

「くそつ、いない。どこだ!?!」

「水上バイクの音が聞こえる?・・・椎名様、水のあるところですよ!」

すぐにこのカジノの敷地内にあるピラミッドの周囲にある湖のような場所を見ると、神崎とキンジが二人乗りの水上バイクで走っていた。

「遅かったか!京子、私たちも追うぞ。水上バイクの運転は出来るか?」

「お断りします。今の椎名様の状態では無理です、せめてこの場からの狙撃で我慢してください」

「それでは神崎があいつに!」

「椎名様!!他人の心配をする前にご自分の心配をなさってください!ご自分がどれだけの重傷かわかっていますか!もしこれ以上の無茶をするなら無理やりにもこの場から連れて帰れさせてもらいます!」

「・・・分かった。だけど、もうすぐ無理をしてもしなければならぬ事が起きる・・・その時は止めないでね!」

神崎達の乗っている水上バイクをスコープ越しに目で追いながら周囲に警戒しておく。

視認できるうちの最後の一匹を倒し、波止場寸前でブレーキをかけて止まる。その時にエンストしたようだった。

「椎名様、数体の邪気を持つものに囲まれています。私が行くます故、椎名様はここでお待ちください」

「あいつらの中にいる虫には気を付けるんだよ。あれに触ると呪われる。それとこれを持っていくといい」

後ろポケットからガバメントのマガジンを取り出して京子に渡す。

「それは、対使い魔用の試作品だ。プロトタイプ理論上ではそれに掠りでもしたら、使い魔は一瞬で消滅する・・・ただ、反動が大きいから気を付けて、DE位の反動で済めばいいんだけど」

「分かりました。出来れば、椎名様の銃を一つお借りしてよろしいでしょうか？」

「頑張つてね」

ホルスターに入れてあるM93Rを京子に投げ渡す。

一度コッキングして空薬莖を排出し、一息ついてからトリガーを引く。

もし、神崎達が聞こえていたのであればこの場に2つの銃声が響く。ふたつのうちの1つの銃声は神崎を狙う銃弾、そしてもう一つは神崎を守るために放たれる銃弾。

発射されてから二つの銃弾がぶつかり合うまでの時間は2秒。

その間にもう一度コッキングして第2射、第3者と撃ち合う。

総装弾数が5発しかないこちらは4射目で弾切れを起こしてしまう。だが相手の装弾数は6発。装弾数の違い、それもたった一発。

予備のマガジンがあるとはいえ伏せている状態での再装填には時間がかかる。

リロードを終えて、もう一度スコープを覗きこむと狙撃され海に落ちる神崎が見えた。

「私が失敗した以上、後はあいつらに任せるしか無いかなあ。出来れば自分の手でパトラの目的を阻止したかったのに・・・」

スコープを覗きながら独り言を呟き、神崎を回収するために現れた船から本物のパトラが出てくるのを待つ。

レキが金でできているパトラ人形（命名私）の頭を撃ちぬく。

頭を撃ち抜かれたパトラ人形が崩れた後に船の客室から遠山金一が出てきた。

二人が会話しているようだが、口の部分が隠れてしまっていて何を言っているかはよくは分からない。

だけど、キンジはかなり動揺しているように見える。

二人の様子を眺めていると、海から柩が現れその中には神崎が。そして、同時に蓋とパトラも現れた。

「京子、そいつとは戦うな！」

L115から手を放し、M93Rを三点バーストで後ろに向かって撃つ。

・・・キキキンッ

撃った弾がすべて弾かれた音と同時に京子が吹っ飛んできた。

後ろの方を見ると、先ほど蹴り飛ばした少女を左腕で抱え、右手に2m程の太刀を持った大男が歩いてきた。

「紅葉様、この場にて部下のご無礼を詫びさせていただきます。そしてこいつを助けてもらったようで」

「久しぶりですね、弦翠さん。それとこの子が迷惑かけたみたいだね」

「いえいえ、突然現れた者に警戒するのは当然でしょう。なにせ、あなたを襲った者と同じ服装なのですから」

「……それで、何があった？お前が出てくるほどの事だ、相当な問

題が起こっているのだろうか？」

京子の肩を借りて立ち上がる。

「非常に言いにくいのですが、一部の者が離反しました。理由は分かりませんが、離反した者は凜音の総数の半分近く。こいつもそのうちの一人です」

「つまり、お前に従う者達と離反した者達で二分化したという事が随分と面倒なことになってるね」

面倒な事がまた起こった。と、一度大きな溜息をつく。

「とりあえず………帰ろうか」

私は弦翠さんに背負われて、荷物は京子が持つ。という形で寮に帰った。

……いまさらなのですが、左足に激痛がきました。痛いです（泣

43th bullet

寮に帰った後、無理やり病院に連れて行かれそうになるのを断固拒否して部屋の中での治療です。

今は自分で治療が出来ないので、全部弦翠さんに任せておきました。しかし、1週間ほど歩けないらしいです。言葉通り左足が動きません。

あの場から帰ってきているであろうキンジに話をするため、弦翠さんと京子を連れて車輛科のドッグに來た。

ドッグに入ると武藤^{バカ}がオルクスの改造していた。

「久しぶりですね、武藤」

「おう、椎名か。構ってやりたいが今は手が離せないんでな」

「いや、お前に用は無いんだがな。もうじき、キンジ達が来るぞ。

そちらの方はほとんど終わっているんじゃないか？」

「まあな、だけど実際何があるかわからないからな」

「来たぞ」

後ろを見ると、キンジ達が入ってきた。

キンジはB装備と呼ばれるものを着用しているようだった。

「来たな、遠山キンジ。カジノ警備のとき、私がパトラの狙撃を全て弾くことができればこんなことにはならなかったのだが、それも過ぎた話だ。あの生意気な小娘を無傷で連れて帰って見せる」

「椎名、今は時間が惜しい」

「無駄話もここまでだ、今からお前たちはこの潜水艇に乗りパトラのいる場所へいく。この潜水艇はジャンヌがここに潜入するときに使ったもので元々は3人乗りだったが、今回いくつかの部品を追加したため2人乗りになっている。これが今出せるスピードは170

ノット前後、時速約300km。燃料は積めるだけ積んでいるはずだがそれでも片道分だ。帰りは迎えが無いと無理だ。そうだな武藤？」

キンジは話している内の必要な部分の大半は理解しているようだがそれ以外は全くわかっていないようだった。

「よく分かったな、その説明であっている」

武藤は私になんの説明もしていないのに今の性能等を全て言い当てる事に驚いていた。

「しかし、こいつを作った奴は天才だぜ」

「・・・お前の考えている通りこれは元海水気化魚雷だ」
スーパーキャビテーション

「なんなんだ、それは？」

「今は時間が無いから簡単な説明しか出来ないが、魚雷から炸薬を取り出して人が乗れるようになったものだ。私からの説明は以上だ」

私が説明を終えるとキンジは武藤の方を見て、何か言いたそうな顔をしていた。

「武藤・・・俺たちが何をしているのか聞こうとしないのか？」

「聞きたくねえな、好奇心猫を殺す。武偵が書いた本に載っていただろ？それに、ここ数か月お前が危ない橋を渡ってるのはわかってんだよ」

武藤が地味にかっこいいセリフを言い終わると同時に潜水艦のハッチから不知火が出てきた。

「みんな薄々分かってたよ。武偵だもん。でも、椎名さんがみんな

を守ってくれていたみたいだし、それに僕は君たちのために手伝えることができずうれしいから」

「なっ、私がこいつらを守っているなどそんなことありえるわけがないだろ！？そ、それよりも遠山キンジ、そろそろ乗り込め。時間が無い」

潜水艇の方を指さしてキンジにそう促す。

キンジと白雪が手をかしあって中に入るのを確認してから、京子に頼んでキンジにマガジンを渡してもらおう。

「遠山キンジ、それをお前に渡しておく。このマガジンに装填されている弾には私の力を込めてある、危なくなったら使え」

「あ・・・ああ、ありがとうな。その・・・お前が俺たちを守ってたつてのは本当なのか？」

「無事に帰ってこれたら教えてあげるさ・・・せいぜい無事に帰ってきてなよ」

ハッチから離れて、ジャンヌと交代する。

ジャンヌは白雪にデュランダルを渡した後、頬を赤くしていた。

潜水艇のハッチを閉め出航するのを見届けた後、武藤に話しかける。

「一つ仕事を頼んでもいいかな？」

「ん？どんな仕事なんだ？」

「羽田に置いてある航空機の整備及び改造、報酬は250万」

「とりあえず、現物を見せてくれよ」

「理子、ジャンヌそれから不知火、あいつらは無事に帰ってくるさ。だから、安心して待っている。私達と武藤は少し出てくる」

弦翠さんに背負ってもらったまま外に出て、止めてあった弦翠さんの車で羽田空港まで向かう。

44th bullet (前書き)

どつやら、間違えてこの前の話をマップする日を間違えてしまいました
した><

寮に帰った後、無理やり病院に連れて行かれそうになるのを断固拒否して部屋の中での治療です。

今は自分で治療が出来ないので、全部弦翠さんに任せておきました。しかし、1週間ほど歩けないらしいです。言葉通り左足が動きません。

あの場から帰ってきているであろうキンジに話をするため、弦翠さんと京子を連れて車輛科のドッグに來た。

ドッグに入ると武藤^{バカ}がオルクスの改造していた。

「久しぶりですね、武藤」

「おう、椎名か。構ってやりたいが今は手が離せないんでな」

「いや、お前に用は無いんだがな。もうじき、キンジ達が来るぞ。

そちらの方はほとんど終わっているんじゃないか？」

「まあな、だけど実際何があるかわからないからな」

「来たぞ」

後ろを見ると、キンジ達が入ってきた。

キンジはB装備と呼ばれるものを着用しているようだった。

「来たな、遠山キンジ。カジノ警備のとき、私がパトラの狙撃を全て弾くことができればこんなことにはならなかったのだが、それも過ぎた話だ。あの生意気な小娘を無傷で連れて帰って見せる」

「椎名、今は時間が惜しい」

「無駄話もここまでだ、今からお前たちはこの潜水艇に乗りパトラのいる場所へいく。この潜水艇はジャンヌがここに潜入するときに使ったもので元々は3人乗りだったが、今回いくつかの部品を追加したため2人乗りになっている。これが今出せるスピードは170

ノット前後、時速約300km。燃料は積めるだけ積んでいるはずだがそれでも片道分だ。帰りは迎えが無いと無理だ。そうだな武藤？」

キンジは話している内の必要な部分の大半は理解しているようだがそれ以外は全くわかっていないようだった。

「よく分かったな、その説明であっている」

武藤は私になんの説明もしていないのに今の性能等を全て言い当てる事に驚いていた。

「しかし、こいつを作った奴は天才だぜ」

「・・・お前の考えている通りこれは元海水気化魚雷だ」
スーパーキャビテーション

「なんなんだ、それは？」

「今は時間が無いから簡単な説明しか出来ないが、魚雷から炸薬を取り出して人が乗れるようになったものだ。私からの説明は以上だ」

私が説明を終えるとキンジは武藤の方を見て、何か言いたそうな顔をしていた。

「武藤・・・俺たちが何をしているのか聞こうとしないのか？」

「聞きたくねえな、好奇心猫を殺す。武偵が書いた本に載っていただろ？それに、ここ数か月お前が危ない橋を渡ってるのはわかってんだよ」

武藤が地味にかっこいいセリフを言い終わると同時に潜水艦のハッチから不知火が出てきた。

「みんな薄々分かってたよ。武偵だもん。でも、椎名さんがみんな

を守ってくれていたみたいだし、それに僕は君たちのために手伝えることができてうれしいから」

「なっ、私がいっつらを守っているなどそんなことありえるわけがないだろ！？そ、それよりも遠山キンジ、そろそろ乗り込め。時間が無い」

潜水艇の方を指さしてキンジにそう促す。

キンジと白雪が手をかしあって中に入るのを確認してから、京子に頼んでキンジにマガジンを渡してもらおう。

「遠山キンジ、それをお前に渡しておく。このマガジンに装填されている弾には私の力を込めてある、危なくなったら使え」

「あ・・・ああ、ありがとうな。その・・・お前が俺たちを守ってたつてのは本当なのか？」

「無事に帰ってこれたら教えてあげるさ・・・せいぜい無事に帰ってきなよ」

ハッチから離れて、ジャンヌと交代する。

ジャンヌは白雪にデュランダルを渡した後、頬を赤くしていた。

潜水艇のハッチを閉め出航するのを見届けた後、武藤に話しかける。

「一つ仕事を頼んでもいいかな？」

「ん？どんな仕事なんだ？」

「羽田に置いてある航空機の整備及び改造、報酬は250万」

「とりあえず、現物を見せてくれよ」

「理子、ジャンヌそれから不知火、あいつらは無事に帰ってくるさ。だから、安心して待っている。私達と武藤は少し出てくる」

弦翠さんに背負ってもらったまま外に出て、止めてあった弦翠さんの車で羽田空港まで向かう。

45th bullet

5時間後、途中で数回の給油をして目的地に到着した。

何かの船の形を真似ているパトラの船に上空1000mで滞空している機体から飛び降りる。

途中でヘルメットを投げ捨てて、風雷の力を使い着地する。

・・・え？風雷がどこにあったか？それは機体内の後付けの収納スペースに入れてあったんだよ。

『それでは私は近くの空母に着陸いたします。主、御用があればいつでもお呼びください』

上空にあった機体はすぐに見えなくなり、残った私は船の先端にあるピラミッドの中を散策し始める。

中に入り、迷路のような洞窟を進んでいると巨大な扉があった。

何をしても開かない巨大な扉を斬りつけたり撃つたりしてもビクともしないので、仕方なく扉に魔力を流し私が入れるだけの穴を作る。

「お取込み中失礼します。緋弾を返してもらいに来まし・・・」

開けた穴から入り中の様子を確認すると、非常まずい状況になっていた。

カナと白雪、そしてパトラの3人が啞然とした顔でキンジの近くにいる人物を見ていた。

「『緋弾のエリア』か・・・まったく持って厄介な存在を作ってくれたことをあいつに感謝しなければいけないかな」

緋色の光を身にまとう神崎を見てそういった後、すぐに神崎の足元

めがけてM93Rで数発撃つ。

神崎が何も言わずに此方を見ると、右手を上げて人差し指で私を指す。

その指先には緋色の光が集まり、輝きを増していく。

「紅葉、避けなさい！」

「そんなの言われなくてもそうするに決まってるでしょ！あれを食らって無傷で済むほど私は頑丈じゃないんだから！」

そう言つて手に持っているM93Rを投げて横に跳ぶ、それと同時に神崎の指先に集まつていた光が飛び出しさつきまでいた場所を通過して――爆発するように弾けた。

一瞬にして周囲を緋色の閃光が包む。

光が完全に消える前に立ち上がり、服に着いた砂金等を払い落とし、それから避ける時にとっさに投げたM93Rを探す……が、どこにもない。

「あーあ、あのラフィカ結構気に入ってたんだけどなあ。けどまあ、潰れたのが1丁だけっていうのはまだ運がいい方かな」

ラフィカを一つ潰してしまったことを嘆きながら、上を見るとさつきまで見えなかったはずの空が見えていた。

さつきの光がピラミッドの上部分をこっそり持っていたようで、ガラスや鉄骨の破片が上から降り注いでいる。

ピラミッドが潰れたことでパトラはとっさに能力を使えなくなったように、砂金でできていたものが全て崩れていく。

先ほど緋弾の力を使った神崎は気を失い倒れかけたところをキンジにお姫様抱っこで抱き留められている。

神崎を抱えたキンジは落ちてくる破片から白雪を守っているカナと合流する。

私は、この場に人の手による危険が無くなったと判断して崩れていくピラミッドの大きくあいた穴から風雷の力を借りて脱出する。

外に出ると感じなれた魔力を察知し、そちらの方を見る。
見てみると、此方に向かつて水上を何か飛んできている。

「・・・あれは水龍かな？でもなんでこんなところに？」

私の傍まで飛んできた水龍の頭を撫でてやり、全身を見回すと体の中には包装された銃と札が入っていた。

銃だけを取り出すと、水龍は海に帰っていく。

包装を解くとHK416とマガジン2つが入っていた。

「ふふっ・・・相変わらず京子は気が利くね。それに、偶然だろうけど届くタイミングもぴったし。今度京子に狙撃でも教えようかな」

416にマガジンを装填し携帯端末とスコープを接続してゼロインを合わせ終えてから、後ろの方を向く。

いつの間にか4人が脱出していて、神崎が目を覚ましたところだった。

4人がいる方へ向かい、神崎とキンジに向かつて話し出す。

「神崎、お目覚めのところ悪いが今すぐに戦う準備をしる。キンジ、お前もだ。もうすぐ序章プロローグが終わり、本当のお前たちの物語が始まる。そして、序章プロローグを終わらせる戦いを今からしてもらおう」

神崎にガバメントのマガジンを投げつけ、船の前方を見る。

二人は私が何を言っているのか理解していなかったが、カナだけは

何かに気付いたようだった。

「キンジ、逃げなさい！今すぐここから撤退するのよ！」

「もう遅い、諦めるカナ。今日ここで二人が彼と戦うのは定められていたことだ」

いつも冷静なカナが取り乱していることに、キンジは一体何が起きているんだ？という顔になる。

白雪も異変に気付き、自分で自分の体を抱きしめるようにして震えながら膝をつく。

途端に海全体が揺れだし、今乗っている船も当然のように揺れ始める。

神崎は何かを言って舳先のギリギリの所まで行き船の前方を指す。

キンジも神崎を追いかけるようにして神崎の側へ行く。

「・・・来たよ」

船の前方数百メートル地点の海が大きく持ち上がり、大きな音を立てながら上に乗っている海水を落としながら黒く巨大な物体が現れる。

その光景を見ながら前の二人が疑問に思っていることを喋る。

「あれが『イ・ウー』と呼ばれている物だ・・・それに、あの形は見たことがあるだろう？出航してすぐに行方不明となった潜水艇」

「ボストーク号・・・なのか・・・」

キンジがそう呟き、私は416を構えスコープで艦橋を覗いてから続ける。

「そう。戦略ミサイル搭載型・原子力潜水艇・・・だが、今の名は

ボストーク号じゃない。そしてこの潜水艇は沈んだのではなく、盗まれた。私を知る中では史上最高の頭脳をもつ彼に……」

艦橋に一人の男が見えるのと同時に数発の銃弾を撃ち込む。が、全て何かによって弾かれてしまう。

その後も数回撃つが、やはりすべて弾かれてしまい一発も当たらない。

さっきまで突っ伏していたカナが駆け出し、彼とキンジの間に立ち叫ぶ。

「教授、^{プロフェッション}やめてください！お願いです、この子たちとは戦わないで！」

カナが叫び終わると同時にトリガーを引く。

キーン！……という音をたて、弾かれた弾丸が近くの床に着弾する。

「カナ……下がるんだ！いつまでもあいつの狙撃を弾くことなんて出来ないんだから！」

牽制程度にしかならない狙撃で彼の2射目を妨害する。

そして、船の舳先にいる神崎達は彼の正体に気付きかすれた声でその名前を呼ぶ。

「……曾、おじい……さ、ま……？」

「そう。あいつが教授と^{プロフェッション}呼ばれている存在であり、君の祖先のシャーロック・ホームズだよ」

全ての弾を撃ち切り空になったマガジンを再装填して銃を下す。目の前に立っている男……シャーロック・ホームズ一世を睨みつ

ける。

46th bullet

目の前にある潜水艦の艦橋の上に堂々と立っているシャーロックを見ながら色々なことを思い出す。

(元はと言えばあいつが私に面倒な依頼をしてきたのが始まりだったけど・・・けどまあ、今は楽しませてもらってるからいいとしてよ)

「シャーロック、悪いけどこの船を沈ませるのは私の仕事だ・・・アイン、やれ」

いつの間にか近づいてきていたF-35から2基のミサイルが発射されこちらに向かって飛んでくる。

船に着弾すると同時に船が揺れ、着弾部分から黒煙と炎が上がる。

「白雪、船尾側にある救命ボートを下せ！それよりも、今のは何なんだ！？」

「F-35・・・現在進行形で開発されている戦闘機だよ。それと今のミサイルはAIM-120、非航空機への照準が可能か調べる為のテストとして撃たせてもらったよ」

「バカな、あれは対空ミサイルのはずだ！ロックオンできるわけが無い」

「機体の方を改造して出来るようにさせてもらってるよ」

キンジとの会話をうちきり、近づいてきているイ・ウーに跳び移り、シャーロックに話しかける。

「君が去った後も彼女は守ってあげるよ。なんたって彼女は緋弾の継承者だからね」

「その時は・・・頼むよ。それと、出来れば僕の意味を継ぐことする子たちも守ってほしいね」

「気分しただいね・・・それじゃあ私はICBMの用意をしてくる。お前が目的を果たすころには発射できるようにしておくよ」

「頼むよ」

開いたままの耐圧扉からイ・ウーの中に入り、螺旋階段を下りる。階段を下り、巨大なホールに入ると、そこには恐竜の骨格標本や、現存している生物やすでに絶滅した生物の剥製などが置いてあり、どこかの美術館や博物館を思わせる。

その中を通り奥にある扉に入り、階段を下ると次は様々な魚がいる水槽が並べられている部屋に入る。

水槽が置いてある部屋を通り過ぎると太陽灯で照らされ孔雀や極彩色の鳥がいる植物園。

そんな部屋をいくつか通り過ぎ、土が敷き詰められている部屋に出た。

正面の壁には巨大な肖像画が掛けられている。

「ここ来ると・・・いつも昔の事を思い出してしまつな。計画当初から今まで目的は変わってない・・・だけど、今まで誰も私の力を使えるようになったやつは誰もいない、か」

一番左の肖像画の前に立ち、次に右の肖像画の前に立つ。それを繰り返して、一番右の描かれている途中のシャロックの肖像画の前まで来る。

その肖像画を外し奥にある隠し通路を進み、エスカレーターに乗りさらに奥へと向かう。

隠し通路を進み抜けた先には、大きな教会に出る。

教会内にいくつかの盗聴器を仕掛けてから、奥にある扉から出てさらにその奥にある隔壁を開き進んでいく。

今までいた通路から出ると、目的地である船内最高の広さを誇るホールに到着する。

そこにある8本の大きな柱にも見えないこともないICBMを一度見上げてからコントロールパネルを携帯端末と接続してから操作する。

「さて・・・と、彼が率いるイ・ウーのメンバーとして最後の大きな仕事だ。無事に完遂しないとね」

残っているイ・ウーのメンバーが全てがこのICBMに搭乗する予定だ。

パネルの操作音しかしない中で黙々と作業を続けていると、携帯端末から音が漏れる。

「・・・主、予定時間より数分遅れましたが今到着いたしました」
「アイン遅いよ。とりあえずICBMの目的地を向こうで設定できるようにしといて。私はお客さんと戦ってくるから」

コントロールパネル上に携帯端末を置き、風雷を構えて後ろにいる人物に話しかける。

「まさかお前がここにいるとは思わなかったぞ、離反者よ」

「ふっ、離反者か。だが、誰が決めたのかもわからない掟に従い縛られるなど俺はごめんなんぞな。俺の考えに賛成したものもいることを忘れないでもらいたいな」

後ろを向き、声を発した人物を見る。

そこにいるのはまだ20歳にもなっていないだろう青年。しかし、その瞳にはどこか野心を秘めているように見える。

「それよりも、お前が凜音紅葉か？・・・そんなわけねえか、なんたつても1000年前のやつが今も生きているわけねえもんな」

「1000年前か・・・じゃあ、もし竜悴公ドラキユラだとしたら君はどう考える？」

「竜悴公ドラキユラだと？・・・ハハハツ、笑わせんじゃねえよ。そんなもん存在するわけねえだろ。ハハハツ、面白れえ」

目の前で腹を抱えながら笑っている青年を見ながら何を言っても無駄だと悟る。

「・・・お前が無知なのはよく分かったよ。そんな事だから外の世界に出ようなんて馬鹿な考えを持ったつてことも。だけどさあ、君みたいなのが外で暴れて醜態を晒されると困るのはこっちなんだよね」

「あ？てめえ、今なんつった？俺のことばかにしたろ・・・ガキが調子に乗ってんじゃねえぞお！」

刀を構え真正面から突っ込んできて、闇雲に刀を振り回して斬りかかってくるのを風雷で受け流しながら溜息を漏らす。

「無知なうえに沸点も低く、太刀筋も悪い・・・この程度の腕でよくもまあ外に出ようなどと思ったね」

懲りなく刀を振り回している青年を蹴り飛ばし、倒れている青年との距離を瞬時に詰め喉元に刀を突きつける。

「君、弱すぎるよ。君は考えたことがあるかな？何故、凜音の村は水に囲まれているのか？」

「そんなもん・・・知るかよ・・・」

本当に何も知らない青年に対してもう一度溜息を漏らしてから説明する。

「今はそれほどまでに時間が無いから簡単な説明しかしないけれど、私達凜音の力は水を操る力だよ。故に近くに水場が無いと戦えないってわけなんだよ。だから村は水で溢れかえってるわけ」

「・・・そんな事、聞いてないぞ！」

「うん、成人するまで教えるなって私が言ってるからね。まあ、それを知らないなら外の世界に憧れるのも分かるけど・・・」

刀を喉元から離し、コントロールパネルに向かって歩き出す。

私が離れると青年はゆっくりと立ち上がり、落ちていた刀を拾いおぼつかない足取りでこちらに向かって歩いてくる。

「だけど、掟を破りし者には死を・・・」

青年の方を向きM93Rで頭と左胸を撃ち抜き、動かなくなった青年を瞬時に消し炭にしてホールに入ってきたシャーロックを見る。

「来たか・・・こっちはいつでも発射できるようにしておいた」

「それはありがたいが、君が消した彼・・・本当によかったのかい？」

「気にしないでいいよ、一族の掟に従っているだけだからね。後は・・・あの二人を待つだけだね」

ここに来るときに通った通路の方を一度見てから、バイザーを付けて端末と接続する。(デザインを説明するなら東京マイクさんのゴグルみたいな形です)

「それは一体なんだい？普通に目を守る目的に作られた形のものだが・・・」

「疑似人格プログラムのアインを戦闘時の補助が出来るようにしたもので、相手の行動予測及び相手の銃の残弾とか色々分かる優れものだよ。ちなみに視界の方m(略)」

「いや、説明はそれぐらいでいいよ。今の説明からするに君も彼らと戦うつもりなのかい？」

「当たり前でしょ、彼らがどれくらい強くなったのか確かめてみたいからね。それに、コレのテストもしてみたいからさ」

バイザーを中指で2回叩き強調してから、シャーロックにバイザーの調整をするから待っていてと告げて調整に入る。

『主、現在の設定では私のバックアップが受けることができません

ので一時的に現設定を消去させていただき、視界部の設定をさせていただきます」

アインがそう言うとバイザー越しに映っていた景色が見えなくなり黒一色に染まる。

そのまましばらくすると視界が回復し、先ほどと同じように見えるようになってきた。

『これにより視界の光度を一定に保つことができ、閃光弾の無効化や暗所での敵発見能力が向上いたします。その他の機能は徐々に更新していく予定ですが、かなりの時間がかかると予想されるため今回の戦闘では使用することができません』

「・・・とりあえずはどんな時・場所でもこの視界が一定に保たれるってことでいいの？」

『はい、そういうことです。私は残っている作業に入ります』

アインはそう言うと黙ってしまい何も喋らなくなる。

仕方が無いのでシャーロックと他愛もない会話をしながら神崎達に来るのを待つ。

・・・盗聴器はシャーロックに潰されてましたとさ！

数十分後、神崎とキンジの二人が来たのを確認すると初めにシャーロックが先ほどかけ始めたモーツアルトの『魔笛』をBGMにして話し出す。

「音楽の世界には、和やかな調和と甘美な陶醉がある。それらは僕らが繰り広げる戦いという名の混沌と、美しい対照を描くものだよ」
「お前が言いたいのはこの曲が終わるころには戦いが終わっていると言いたいんだろ？それとこれで終わりだと思わないようにね。少

し前にも同じことを言ったけどこれはあくまで『序章』^{プロローグ}なんだからさ。シャーロックの言い方をすれば『序曲の終止線』プレリユード・フィーネ』だったかな」

シャーロックが面倒な説明を省くために、私が説明する。

前にいる2人は何を言っているのか分からないと言った顔でこちらを見ている。

「序曲……？」

「そう。この戦いはキンジ君とアリア君が奏でる協奏曲の……序曲にすぎない。僕や紅葉君が言っている意味はいずれ分かるだろう。それよりもカナ君がイ・ウーに仕掛けようといっていた罠の味はどうだったかな」

シャーロックの言葉に神崎とキンジは顔を見合わせる。

「曾お爺さま……」

神崎がこちらに向かって一歩、それも勇気を振り絞るように歩く。

「あ、あたしは……私は曾お爺さまのことを尊敬しています。だから……あなたに銃を向けることなんてできません。あなたに、命じられでもしない限り」

いつもの口調とは違い、丁寧な言葉使いでそう言って黒と銀のガバメントを足元に置く。

「私は、恐らくあなたの思惑通り私に立ち向かう彼を……パートナーをこの銃で追い返そうとしました。ですが、止めることができなかつた」

神崎は自分の胸に手を当て、小さな声でその先も紡ぐ。

「彼は私がやっと見つけた、世界で一人しかいないパートナーなんです。曾お爺さま、どうかお許しください。私は彼と協力しようと思います。それは・・・あなたに敵対するという事になります。どうかお許しください」

神崎が宣言すると、シャーロックは満足げな笑みを返している。

「いいんだよアリア君。・・・君は今、心の中で僕の存在を乗り越え、そしてキンジ君と言う特別な存在を理由に僕と敵対することを決意した。君の心の中では僕よりキンジ君の方が大きな存在になった、という意味だ。まだ、愛の量は僅差のようだがね。君たちは子供だが、男と女だ。女心は僕の不得意な分野なのだが・・・あえて語るなら、女と言うものは、男にどんなひどいことをされても男を憎み切れるものじゃないと僕は考えているよ」

「・・・たとえそれが銃を向けあったとしてもと言いたいのか？だが、それは人によると思うのだがな」

「確かに紅葉君のいう事も一理あると思うね。だけど、現に彼らは戦いを得て強く結びついていると思うよ」

確かにシャーロックが言っていることは簡単に分かる。

ここに来る前に見た時と後では二人の雰囲気が違う。

それは来た時にすでに分かっていたことなのだが、過去の自分の経験を当ててしまいそれを否定したくなる。

「つまり、すべてお前の推理通りに事が運んだってことか？」

キンジがシャーロックを睨みつけ聞いてくる。その横では何故か神

崎が赤面している。

「キンジ、シャーロックからすれば推理の初歩だよ？それに私だつてわかっているんだから」

「じゃあ、これも推理できたか？」

キンジが瞬時にM92Fを抜き、神崎の後頭部に銃口を突きつける。

「……………」

シャーロックは黙ったまま何も言わず、パイプをくわえ直した。

「君。それは人質を取ったつもりなのかい？」

キンジが銃口を神崎に突きつけたまま後ろに回る。

あの位置に行かれては撃つことが出来ないね……

「シャーロック。お前の目当てはアリアなんだろう？それに、アリアがいなくなればイ・ウーは仲間を起こすって兄さんに聞いたんでね」

「だが、お前は撃たないだろう？」

「椎名、俺はもうやけくそだぜ？」

何があってもすぐに対応できるようにM93Rに手をかけたまま、キンジのでかたを窺う。

「そういえば、あんたらにプレゼントがあるんだ」

先ほどより大きな声で喋るキンジの方を向き、プレゼントとやらの内容が何か探ろうとしたすると、

「兄さんからのな！」

そう叫びキンジは小さな何かを投げた。
次の瞬間、周囲が閃光で染まった。

48th bullet

キンジが投げた者が辺りを閃光で染めて、その光がやむまでに考える。

先ほど投げたのは銃弾のような形をしていた。銃弾の形をした閃光弾、一番可能性の高い物は・・・恐らく、武偵弾だろう。

「キ、キンジ・・・今よ」

腕で目を覆ったキンジに、神崎が体を竦ませるようにしゃがんだ状態で言う。

「あ、アリア・・・お前目を隠さなかったのか!？」

「あたしが目を隠せば紅葉や曾お爺さまにはれる!」

神崎はキンジの方に振り向く。が、おそらく先ほどの閃光を直視したのだろう、神崎はキンジではないどこかを見ていた。

「キンジ、早く曾お爺さまを! 曾お爺さまと紅葉が閃光を直視しているのを私は見た!」

キンジが手錠のようなものを持ちこちらに駆け出そうとして、足を止める。

「うん、今のは知恵を回した方だと僕は思うが紅葉君はどう思うかな?」

「何故私に聞くんだ? 私よりお前が言った方が説得力はあるんと思っただけだね・・・まあ、私が言うよ。何故私たちに閃光弾が効かフラッシュなかったのか・・・まず、私の場合はこのバイザーによる視覚保護。

そして、シャーロックは……」

「僕の場合は盲目だよ。60年ほど前からずっとね。このことを知っている人物は紅葉君以外誰もいない。僕は目が見えるように振る舞っていたし、実際視覚に頼る君たちよりも、自分の周囲で起こっていることをよくわかっているからね。初めのころは推理力が助けしてくれたし、今は気流や音で分かるんだよ。たとえば今、君の心拍数が驚きにより上がっている事とかね」

「ナ、ナンダッテ！。ソナナコトガデキルノカー」

棒読みでワザとらしく驚いたふりをする。

「紅葉君ならそんなこと知っていただろう？それに、毒殺されかけた時には君に助けてもらったのだから」

「そういえばそんなこともあったねー」

確かその時って、2次大戦の後始末で各国の要人共バカを殺す仕事で世界を回っていたんだっけ？

それで、途中で死にかけてるシャーロックを見つけて助けたんだっ
たかな？

まあ、いいや。

「キンジ……逃げなさい！曾お爺さまと紅葉には、私が説得を……」

「出来る相手じゃないってことくらいわかってるだろ。アリア、引
っ込んでろ」

なんとなくいつも以上に口が悪いと感じるキンジを見る。

次にどんな手を使ってくるのかと考え出すと、楽しくなってくる。

「シャーロック」

「何だい」

「ここいらで決めようぜ」

「私を忘れるなよ」

「探偵と武偵、どちらが強いかを！」

「いや、だから私を忘れるなっつてば」

私の事を全く気にしていないキンジはM92Fを抜き、神崎とシャーロックの間に立つように仁王立ちする。

「・・・キンジ君。僕は150年以上も世界中で凶悪かつ強靱な怪人を何人も仕留めてきた。だが君は、平和な島国で17年間生きてきた少年だ。その未熟な君が、僕と決闘しようというのかね？」

「シャーロック、お前も私を除け者にするきじゃないだろうな。そんなことをしたらこの場で八つ裂きにしてやるからな」

「君の事を上げるとこのレコードが終わる前に決着がつかないからね」

横目でシャーロックを睨みながら、バタフライ・ナイフを左手で開くキンジを見る。

「ああ、確かにおれは偉大な探偵様から見れば未熟だろうよ。武偵のランクもEランクだしな。だけどな、自分のパートナーに手を出すやつを見逃すほど俺も腐ったつもりはねえからな」

「ふーん。出会ったところはかなり嫌がっていたのに、今はそんなに神崎の事が大切なんだね。正直言つと私からするとどうでもいいんだけどさ。その前に」

隣でコートを脱いでいるシャーロックは無視しておいて、足元の床についている取っ手を引っ張るとそこには小さなスペースがあった。

「そんな所に収納スペースがあつたなんて僕は知らなかったのだが」
「知らなくて当然だよ、少し前に私が勝手に作ったからね」

シャーロックさえ知らないスペースの中からM9シリーズのマガジンを取り出してキンジに投げつける。

キンジはマガジンを受け取ると罨が無いか調べていた。

「それに罨なんか無いよ。それは私からのサービスだと思ってくれ」といいよ。それを使って私の攻撃を耐えてみてよ」

「……………」

無言でマガジンをしまい、自分で持ってきていた最後のマガジンを装填する。

シャーロックは中に剣がしまわれている太めのステッキを持ち上げている。

「それより、シャーロックは銃を使わなくてもいいのか？俺は年寄相手でも手加減はしないぜ」

「銃は、後で一回だけ使わせてもらつよ。そしてそれは僕の『緋弾の研究』にピリオドを打つ、極めて重大なものになる一発だと推理している」

『緋弾の研究』ねえ……あの力が悪用されない限りは私は手を出さないうつて決めてるからどうでもいいんだけどね。

「おいでキンジ君。君の言うとおり、決闘に敬老精神なんていらないからね」

「心配するなシャーロック、俺は武偵だ。武偵の任務は、無法者を狩ること……任務は遂行する！」

キングがシャーロックに向かってM92Fを撃つ。
それをこちら側に届く前にM93Rで撃ち落とす。

「お前たちのようなやつらからすれば私も無法者だと思うのだけど
ね……」

「紅葉君、彼の相手は私がするよ。君は後ろで見ていたまえ」
「はいはい」

M93Rをしまい2、3歩後ろに下がり、シャーロックの後ろに回
る。

「シャーロック！」

キングが叫び、もう一発撃つ。

その弾丸をシャーロックはステッキの先端で受け止める。

「なっ!?!」

それと同時に爆発が起き、紅蓮の炎が周囲を包む。

49th bullet

キンジの放った弾がステッキとぶつかりと爆発が起きた。その爆発が私たちを襲い紅蓮の炎で包む。

「あーあ、炎があるせいで周りが見えないよ。まったくキンジ君も面倒なことをしてくれたね」

風雷に手をかけ、風を生み出し周囲の炎を吹き飛ばす。

「はい、残念でした。あの程度の威力では私を倒すことは出来ません！」

「キンジ君、ここまでが『復習』の時間だよ」

炎を振り払った直後に後方から白い煙が流れてくる。

「さて、今君はなんでシャーロックがHSSになっているか・・・って考えてるよね。君の考えている通りシャーロック君は寿命が近づいてきていて死にそうなのです。そういうわけで死に際HSSが発動しているわけですね」

「紅葉君説明はいらぬよ。・・・さて、ここからは君たちが闘うことになるであろう難敵の技を『予習』させてあげよう。何しろ僕は古い仇敵と同じ名前、『教授』プロフェッサーと呼ばれているのだからね」

さっきの爆発でボロボロになったジャケットとシャツを脱ぎ捨てる。露わになった上半身は無駄に筋肉質でかなりの数の古い傷跡がある。そして、足元が揺れ出すと同時にICBMのロケット発射口から白い煙を吹き出している。

格子状の床下から流れ出す熱風に前髪を煽られながらキンジが笑っ

ている。

「今回は私は手出ししないよ。そのほかの争いは君たちが勝手にやるんだね。それにお前たちを見ていることに飽きたんだよね。ここまでは全て引かれていた線の上を歩いている感じがしているからなのかな。だから私は新たな戦いが起きるまであんまり動かないことにして置くよ」

風雷の力でICBMを発射するために開いたハッチから外に出て、一度深く息を吸い吐き出す。

背中固定していたHK416をその場に置いて、仰向けで寝転がる。

『主、見届けなくてよろしいのですか？』

バイザーの調整をしているはずのアインが突然聞いてくる。

「シャーロックの持っている緋弾が神崎に受け継がれるのは確定している事だから見る必要はないんだよね。だから今ここでこうやって休憩しているわけなんだよ」

飛んでいる鳥たちを見て、日光浴をしながらアインに説明をする。

「じゃあ私は一旦寝るからICBMあれが飛んで行ったら起こしてね」
『了解しました』

そのまま暖かい太陽の光を浴びながら眠りに落ちていく・・・

・・・また、夢をみた。

それは懐かしい物でもあり、忘れ去ってしまいたいと思う夢。私の夢は、仮想ではなく実際にあった事しか見ない。

当時の年齢は8歳。その年に私の人生は狂ってしまった・・・人生が狂ってしまふ数日前の日の記憶。

いつもように廊下を歩く人たちの足音や兄たちの稽古の木刀のぶつかり合う音で目が覚める。

布団から出ると当然のように横に置いてある服装に着替える。

その服装に着替えると勢いよく障子を開け放ち、稽古中の兄たちを見て、

「お父様、お兄様おはようございます！」

「うむ、おはよう。しかし、紅葉は朝から元気だなあ。お前たちにもこれくらいの元気があればなあ」

「父上無茶を言わないでくださいよ。木刀であれだけ叩かれてからそれを言われても・・・」

お父様との稽古で木刀で何度も身体を叩かれたりしているお兄様は涙目になりながら訴えている。

「あの程度を防ぎきることが出来なければ私の後を継ぐことなど夢のまた夢だぞ、弥水^{やみずい}」

「父上の後を継ぐなんて僕には無理ですよ。それに父上だってまだ後を継がせる気なんてないでしょう」

「はっはっはっ、当たり前だ。力の続く限りは皆を率いていくつもりだからな。それよりも飯の時間だ、さあお前たち行くぞ」

朝食を食べる為に大広間に行くお父様についていき、大広間に入る。

大広間ではすでに食事の準備が終わり、屋敷に住む全ての人たちが集まっいて私たちが来たことで全員が集まった。

「皆の者遅れてすまないな。急いできた故に、我が子の稽古を付けていた格好のまままで来たしまったことを許してくれ。さて、それは頂こうか」

皆さんが一度目を閉じ、食べ始める。

食事中は静寂を保ち、食事が終わるとそれぞれ感謝をしてからすべきことをなす為に部屋から去っていく。

私はお兄様の午後からの稽古を見る為に屋敷の中で最も大きい庭に向かう。

そこでは、お兄様だけではなく近衛の方々や付近に住んでいる方々も一緒にやっています。

丁度その場所が見えるところに座って様子を見る。

「紅葉様、部屋にお戻りください。侍女の者たちが探しておりましてよ」

「そうだ！みいが私に刀の使い方を見せてよ！」

後ろから話しかけてきた女性の方を振り向き、提案をする。

みいと呼ばれた女性は呆れた顔をしながらこちらを見て一度溜息を吐く。

「いいですか？まず私の仕事は近衛の統率及び屋敷周辺・内部の警護・・・それが私の仕事です」

「この前、みいと一緒に遊んだ！」

「あ、あれは紅葉様が駄々をこねるから仕方なく・・・ああ、もう、分かりました。分かりましたからその何かを期待するような目でこちらを見ないでくださいって！ただし、弥水様が使っているような

木刀などは危ないので使えませんからそれだけは分かってくさ
ね」

幼い子供の期待するような目で見続けられた近衛長の方が先に折れ
てしまい、近くにある紅葉の手に合いそうな棒を探しに行く。

少しの間待っていると言水兄様が持っているのよりは一回り小さい
木刀を持ってきた。

「紅葉様、持ってきましたよ」

「危ないから木刀は使わないんじゃないの？」

「領主様にお話をしたらこれを持ってけと言われたので持ってきた
のですよ」

「やった！」

「それと、私の事は名前で呼んでください。美菜華ですよ、みなか
「みいはみいだよ？」

美菜華はまた溜息を大きくはいてから、今から教えることの簡単な
説明だけをして庭に出た。

私もそれを追って庭に出る。

この時はまだこんな日が毎日続くと思っていた・・・

『・・・る・・・あ・・・る・・・主、もうすぐICBMが発射
されます。起きてください』

聞き覚えのある機械音を耳に目を覚ます。

「あー、おはようアイン」

『おはようアイン・・・じゃあ、ありません。もうすぐICBMが
発射されますのでハッチから離れてください』

「はい」

ゴゴゴゴ・・・という音をたて、船が揺れ出す。
不安定な足場を歩きながら、ハッチから離れる。

「そういえばなんで動かないといけないんだっけ？」

『あなたはともかく熱でこのバイザーが壊れる可能性があるからで
す』

「ああ、なるほどね」

頷きながら20mほど離れた位置でハッチの方を見る。

丁度、ICBMが出てきたようでそのうちの一本にシャーロックが
ドアに手をかけ外に身を晒した状態で、そして神崎とキンジは刀や
剣をさしてしがみついている状態だった。

「なっ、あいつらはバカなのか？・・・おい！お前ら死にたいのか
！今すぐそこから降りてこい！」

『主、ICBMの音で届いていない可能性があります』

「あーもう。なんでそんな面倒なことになるんだよー・・・あいつ
ら本当に面倒なことしかしてくれてないんだよね」

飛んでいくICBMを見上げながら溜息を漏らす。

「あの二人がどうなるかと今は見過ごさせてもらおうとして・・・早
く帰りたいね」

2人が乗ったICBMが遠くなつていくを見ながら救命ボートでこ
ちらに近づいてきている白雪に手を振る。

それに乗せてもらい二人が出来るだけ無事に落ちてくることを祈り
ながら白雪をからかって遊んでいた。

あの後、白雪と一緒に救命ボートで落ちてきた二人を回収してから数時間後、救助に来た車輻科の水上ボートに3人を乗せて帰らせてからアインの操縦するF-35で羽田まで数時間かけて帰った。

機体の方は置いておくことを国のお偉方に通達しておいて、格納庫でシートを被せ誰も近づけないように『KEEP OUT』と書いたテープで固定しておく。

武偵高に帰り、車輻科の生徒に話を聞くと、少し前に帰ってきていてそのうちの一人が病院に運び込まれたらしい。それ以外は特に何も聞いていない。とだけ言ってどこかに走って行った。

お見舞いにでも行こうかと思つた時に校舎の屋上から何かが光つたのが見えて考えるのをやめて屋上へと向かう。

屋上に入るための扉の前に立ち、今までつけていたバイザーを外して胸ポケットにかけてから扉を開ける。

その先にはドラグノフを背負つた少女・・・レキが立っていた。

「・・・初めに一つ聞いておくけど、あの時私を撃つつもりだったでしょ？ だけど撃たなかつた・・・その理由を教えてくださいませんか？」

目の前で立っているレキを見ながら質問をする。

先ほどの光はレキが私を狙つた時にスコープが光を反射した事により見えたものだ。

「あなたに気付かれたからです・・・あなたに気付かれてしまつては狙撃を防がれてしまいますから」

「つまり気付いてなかったら私は今頃狙撃されていたわけね・・・
まあ、その辺はどうでもいいんだけど」

ホルスターにしまつてあるM93Rを取り出して地面に置いて、滑らすようにしてレキの方へ蹴る。

「どういふつもりなのですか？」

「とりあえずは争う気が無いって意味で受け取ってもらえると嬉しいのだけれど」

そのことを主張するように両手を上に挙げる。

レキは足元にあるM93Rを見て、もう一度こちらを見る。

「あなたの武器はこれだけでは無いはずですが・・・」

「それなら緋弾の力で跡形もなく消えたよ。他にもあるけど、今はそれしかないんだよね」

レキが何も言わずにドラゲノフの銃口を向けてくる。

そのまま数分間の沈黙が続き、思いもよらぬ方法でその沈黙が破られる。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

携帯からメールの着信音が鳴り、内容を確認する。

『隊長、事件のようです。東京都内の銀行で強盗があったようです。ですが、犯人グループは逃走に失敗しそのまま銀行内にいた民間人を人質として警察側に逃走用の車を渡せと要求しているようです。この件に関して我々に依頼が来ています。ただ、武偵の方にも依頼が出されていますので我々の出番はないと思われれます』

武偵の方にも依頼が来ているという事は目の前にいるレキにもメー

ルが来ているらしくこちらをチラッと見てすぐ画面を見る。

「そのメールが私達のチームにも来ていた。私達にも来るという事はお前たち武偵だけで遂行するのが難しいか相当重要な何かが存在しているかのどちらかだと思うけど・・・少なくともこの依頼何か裏があるのは確実だろうね」

「紅葉さん何故私に言うのですか？」

「行きたそうな顔をしていたからかな。さてと、そろそろ私は用事があるから失礼させてもらうね。・・・そうだ、そのラフィカ預かっておいてね」

来た時と同じようにドラグノフを背中に背負っているレキに手を振り、フェンスを飛び越えそのまま下に降りる。

どんな罠が仕掛けてあるのかと考えながら寮に帰ってL96を持って事件が起こっている銀行へと向かう。

30分後事件が起こっている銀行の周りから様子を見ると警察が包囲している状態だったが、銀行の中を覗けない様にバリケードを張って中の中状況が分からないようになっていた。

（中の状況が分からないと狙撃は出来ないんだよね・・・まずはあのバリケードを何とかしなければ解決かな）

狙撃場所を探す為にビルの屋上へと上る。

そこからスコープを覗くとバリケードさえなければ簡単に内部が見える狙撃には絶好の場所だった。が、不自然なくらいに誰もいなかった。

「主、未悠様よりメールが届いております。内容は、そちらにもうすぐ武偵が到着します。ですが、武偵への依頼が犯人逮捕では無い可能性があります。場合によっては彼らと戦う可能性も。との事で

す
』

「また厄介な事になってるね・・・」

外縁部を少し歩いてよく見える場所を探してフェンスにもたれかかってしばらく様子を見る。

2、3分ほど経った時にかすかに銃声が聞こえた気がして、持っていたL96を上に向けてその場に伏せる。

投げたL96に弾が着弾してその部分を中心に破損する。

しかも粉々になった部分かなりあり、並みの威力ではないことが分かる。

アンチマテリアル

(対物ライフルを使うことは向こうも正規で動いている人たちじゃないね・・・それよりも2射目が来る前に移動しないと)

今の銃撃で大体の位置しかつかめていない状況を焦りつつこの場からどう動くかを考える。

『主、現在の武装では戦闘は無理です！危険ですが、ここから飛び降りてください！それ以外に脱出路はありません！』

アインの言った通り持ってきていた武器はさっきの狙撃で潰してしまい、他の脱出方法も考えたが飛び降りる以外に方法は思いつかない。

「くっ！」

急いでその場から飛び降り、どうやって着地するかを考えながら落下していく

地上が近づいてくるのを目と肌で感じながら飛び降りることを決断させた本人に重要なことを聞く。

「ねえアイン、どうやって着地しようか」

『主、その服装にはワイヤー等の装備は無いのですか?』

「私がそんなものを持つとも思ってる?」

『いえ、まったく』

なんの解決策にもならない会話をしている間にもだんだんと地面との距離は縮まってくる。

地面との距離が後10mほどになった時に携帯からメールの着信音が鳴る。

「こんな時にメール送られても見れないよ!」

『隊長、言われていたものの用意が完了しました!だそうです』

「何が!?!」と言いつ返そうとした時に背中何かやわらかい地面が衝撃を吸収して・・・やわらかい地面?

「アイン・・・なんで地面がやらかいのかな?」

「隊長、それについては私が説明いたします」

声のした方を向くとTDIベクターを片手に持った少女が立っていた。

この少女は天美未悠。私達『執行者』の情報管理等を担当している。

「アインさんからこの場所に衝撃緩衝材入りの簡易マットを引いて

おくようとメールを頂いたのでこうして待っていたわけです」

マットから降りてその真横に止めてあるワンボックスカーに乗る。中には様々な機材が置いてあり、そのどれもが起動して何かの情報を処理しているようだ。

「それよりも隊長が引くなんて珍しいのですが、一体何があったんですか？」

「銃を潰されちゃってね・・・相手の狙撃に気付けなかった私のミスなんだけどもね。それで対抗する術がなくなったからこうして逃げてきたわけなんだよ」

壁にもたれかかりながら未悠に逃げてきた事情を話す。

「しかし、隊長に気付かれずに狙撃できる人がいるのは怖いですね。それで他に何かわかったことはありませんか？」

「相手は対物ライフルアンチマテリアルを使っている事くらいかな」

未悠はPCの前に置いてある椅子に座り何かを始める。

「相手の情報が無い限り下手に動くわけには行きませんがこの状況です。この場から一時的に撤退しますがよろしいですか？」

「未悠に任せるよ。今のは私じゃインファイト近接戦闘以外に役には立たないからね」

助手席に座って外の様子を見る。

銀行の方以外は静まり返っていて人がほとんど見当たらない。

（これだけ人がいないと撃つても易々とは騒がれない・・・それに逃げるにすぐにはばれてしまうかな）

周りには人どころか車さえも一台も止まっておらず、ここまで静か

だと作為的に連れてこれた気がする。

「アインは今すぐにこの場から学園島に行くための経路と監視衛星からの周囲の映像を入手」

『了解いたしました』

「未悠はすぐに車を出してアインの指示通りに走って。それからベクターを私に貸して」

「わ、わかりました！」

未悠がPCの操作を切り上げて運転席に座ってベクターを渡してくる。

「そのベクターは優斗さんに改造してもらってますので通常の物とは全く別の性能となっています。それと予備マガジンはシートの下に3つあります」

シートの下に手を入れると言った通りマガジンが3つあった。それを取り出して一緒にあったマガジンをケースで左足に装着する。

走り出す車の中で携帯を未悠の近くに置いて、窓から身体を外に出して片手で体を支えつつもう片方の手でベクターを構える。

『主この付近に民間人が一人もいません。恐らくこのようになることを予測しての行動でしょう。今は確認できませんがグレネードランチャーを持ってきている可能性もあります』

「それじゃあ、出来るだけ敵が少なそうな道を選ぶようにして。相手を一人一人潰してたらすぐに弾切れをおこすからね」

木を盾にしてこちらを狙っている相手に向けて数発撃ち、また見えなくなる相手に数発撃つを繰り返して弾がなくなれば再装填^{リロード}する。これを何回か繰り返しているうちに学園島へと近づいていくのだが、

橋の前でこんな所にあつてはならない物があつた。
車を止めて少しの間様子を見ていても動く様子は全く無い。

「さて、みゆっち。ここまで無事に来れたのだけど・・・あんなのが通行の妨げになつてたら進めないよね。どうする？」

「私だつてわかりませんよ！そもそもこんなところに戦車がある」と自体が間違いなんですよ！」

「確かにねえ・・・はあ」

橋のふもとに止まつている戦車・・・M1A2を見ながら大きな溜息を吐く。

『あの戦車にはジャミング機能が積まれているのか衛星の映像には映つてはおりません』

「ふん。ということはあれは相手の私物なわけだ・・・よし、壊しても問題ない！」

『主、さすがにそれは無理だと思います。あの戦車には（略）』
「バ力を言わないでください！隊長は言っている事がどうやっても不可能か分かっているのですか？だからいつも溜（略）」

2人が同時に言い返してきているがそれを無視してM1A2よりも先にある学園島を見る。

途中で何が起ころうとも結果的にあそこへたどり着けばいいのだ。
もちろん手段さえも選ばないうえでなのだが。

『主、聞いていますか？』「隊長つてばちゃんと聞いている？」

「さあ、多分聞いているんじゃないかな？それよりもさ・・・」

溜息を吐いて、『主がきちんと話を聞くようにきちんとした教育を

・・・や』隊長いつか背中を刺されてしまえばいいのに・・・なら

「いっそ私が」などの不吉な独り言を途中で遮るようにして、

「私に策があるんだけど乗ってくれない？」

『主の策とやらは危険すぎる気がしますので先に内容を聞かせてもらいます』

「私も先に内容を聞かせてくれないとね。それに今の隊長ならどんな無茶なことを言われるかわかったものじゃないですから」

先ほどまで独り言を放していた霧困気から少しは真面目になった霧困気にかわった2人(?)を見てから、M1A2をみる。

「二人が思ってるほどの危険はないと思うよ。簡単に説明すると武偵高の人間を使うっただけだから私達には直接危険が及ぶわけじゃないから安心してほしいと私は思うのだけど」

『それは却下します。いくらなんでも関係の無い人たちを巻き込むわけにはいきません』

「私もインさんと同じ考えだよ。それに隊長が関係の無い人たちを巻き込もうとする考えって今適当に考えたんでしょう？ 私たちの事は私達だけで片付ける。力の無い人たちを私たちの勝手な都合で巻き込まないのが『執行者』ですから」

新しく浮かんだ代案を言ってみたが速攻で却下されてしまい、他に適当ない案が無いかを探そうとしたが今はあまり時間が無いことを思い出して本当の案を言いだそうとした時、

『ザ・・・ザザ・・・紅葉さん、そしてその周りの方々聞こえていますか？』

「どうしたのだレキユ・・・レキ！君から私に連絡するとは珍しい」

『今はそんな事どうでもいいのです。それよりもそちらの状況を教えてくださいいただけますか？』

突然レキからの通信が入ってきて今の状況を聞いてきたことに疑問を抱える。

隣では未悠が「私のセキュリティ網が突破されるなんて!？」等と騒ぎながら後ろの方へ行き、またPCで何かを始め出した。

「なんで聞いてくるのかは分からないけど教えてあげようじゃないか!目の前には学園島へ通じる橋があるのだがそこにM1A2エイブラムス戦車君に邪魔をされて進めず周囲には武装したアブナイ人たちがうろろしているんだよ!」

『・・・大体の事情は分かりました。このことを聞かせていただいた理由ですが私たちが到着した時にはすでに銀行の事件は収束していたのですが、途中へりから街を見ていたところ人気の無さそしてビルの屋上で破損したL96があつたのを見たためこうしてあなたに連絡を取っているのです』

街に人気が無いのは気付くとしてもビルの屋上にあつたL96に気が付いたのはさすがだなあ。と内心で思いつつレキ以外のメンバーも気付いたのかと考える。

だが、気付いたところで前者は気付いたとしても警察の仕業と考えられる。それに後者に関してはほとんど気づかれる心配もないはずだ。

とりあえず、レキが私の事で連絡してきたのは確かなことだった。

「なるほどね」。だけど、もしこの状況から助けようとか考えているならばそれは不要だよ。戦車の破壊方法だって考えてある。私達の問題は私達で片付ける。君たちの力は借りるつもりが無いからね」
『あなたの事ですから、戦闘機のミサイルで吹き飛ばすつもりでしょうが、それを実行されるとその場の後処理等が非常に厄介になりますのでやめてください』

「・・・・・・・・」

考えていたことを全てレキに言われそれを否定されてしまい、（、）
・、（）の様な状態になってしまう。

しばらくその状態で硬直してしまい数分後にアインの指示によって
未悠に叩かれるまでその状態だった。

『とりあえず、この場は私達で何とかさせていただきます。紅葉さん
は絶対に何もしないでくださいね・・・絶対に』

レキに何か言い返そうとする前に一方的に通信を切られてしまい、
とりあえずはレキの言った通り何せずに3人でたわいない会話をし
ておくことにした。

数十分後・・・

「アインさんに常識力で勝とうだなんてことを考える私がバカだっ
たようです・・・」

『私の知識はネットワークを介していることでほとんどの情報を手
に入れてますからね』

「私が作ったアインが未悠程度になんか負けるわけがないでしょ！
・・・それよりもレキからの連絡はまだなのかな」

レキからの連絡を待つために長々とネットゲをしていたのだがあまり
に夢中になりそのことを忘れていた。

『そういえば遅いですね。時間的にもそろそろ片付いていてもおか
しくないのですがね』

「よし、これ以上待たせる気なら爆撃を要s」その必要はありません

んよ」・・・なんだ、終わったんだ」

言葉を遮った少女が助手席のドアをさも当然のように開け中に入ってくる。

肩に担いでいるドラグノフをひっかけない様に器用に中に入ってくる。

「あの戦車に関してですがすでに私達の方で抑えました。街の中にいる人たちもほとんど捕えています。こちらにもむこうにも死者は出ておりませんが向こうの方に何人かの重軽傷者が多数います・・・これはあなたの仕業ですね？」

「殺してないだけましと思つてよ。初めて使う武器で頭に当たらないようにするのは結構しんどかつたんだよー」

手を振つて疲れたアピールをするがレキは全く見ておらず、車内を見回してからもう一度私を見る。

「あの戦車に関しては車輛科の方で回収しています。逮捕した人々は現在尋問科にいるはずですよ」

「それを私に教えてもいいの？」

「問題はありません。これは先生方からの伝言ですから。それにあなたは武偵高の生徒のはずですよ」

「まあ、そういえばそうなんだけどね」

その後はそれ以外の会話をすることもなく武偵高前で未悠と別れた後、車輛科と尋問科にそれぞれ行くことにした。

車輛科の専門棟に入り鹵獲されたM1A2を探していると意外と簡単に見つかった。

まだ、誰も触っている様子はなく橋の手前で見たままの状態で置かれていた。

M1A2を見ていると近くのドアから武藤が入ってきた。

「やっと来たか。待ちくたびれたぜ」

「なぜ私を待っていたのだ？」

「そりゃ、先生がお前が来るまでこいつに指一本も触れるなって言われていたからな。全員お前が来るのを待ちわびていたわけだよ。

お前が来たって他の奴らに知らせてくるぜ」

「好きにしなよ・・・」

入ってきたドアからまた出ていく武藤を目で見送り、M1A2を再度見る。

「これを破壊できるならそうしたいけど・・・」

『ここまで持ってこられた以上は特定のパーツを持って帰ることしかできませんね』

「うん」

破壊できれば目的の物が誰かの手に渡る心配もない。が、室内で破壊すれば周りが出る被害がどれほどのものかもわからない。

「問題はコレのどこに設置されているかだよね・・・それが分かっていたら簡単なことなのにね」

『内部の調査をしていますですがそれらしいものは見つかりませんね・・・』

・まったくもって厄介です」
「『はあ』」

アインと同時に溜息を吐いたところでドアの向こうが騒がしくなってきた。

ドアの方を見ると武藤を先頭に10人程度の車輛科の生徒が入ってきた。

武藤がM1A2の前で立ち止まり後ろにいた他の生徒を見て、

「こいつを一度バラしてほしいそうさ。その後なら俺たちがこいつをもらってもいいそうさ・・・椎名から何か言っておくことはあるか？」

「一つだけ・・・これをばらしているときに通常ついていないパーツとかあればそれは私に渡してほしい。それだけだよ」

「だそうさ・・・それじゃあ、始めるぞ」

「・・・おぉー！」「」

各々がそれぞれの部位をばらしていくのを壁際で見ながら、どのようなパーツが出てくるのかをつい考えてしまう。

そんなことを考えている途中にも車体の分解は着々と進んでいく。

「おーい椎名。お前の言ってたのってコレの事か？」

武藤が小さな箱のようなものを持ってくる。

それを受け取りアインに調べてもらう。

『間違いありません』

「そっか。これで一つは解決したかな・・・」

受け取ったものをポケットの中にしまい込んでM1A2をちらっと

見てから武藤をもう一度見る。

「これだけだけだと思っけど、もしも他にもこんなのがあつたら誰にも触らせないように保管しておいて」

「それは一体何なんだ？」

「戦争を起こしうる可能性がある。それほど危険なものなんだよ。じゃあ、後はよろしくね」

そのまま車輛科の専門棟から出ると、一つの問題が片付いたこと、安堵とこれからさらに面倒な事が起こることへの気持ちが混ざり合い、かなり複雑な気持ちになる。

その気持ちを引きずったままの重い足取りで先ほど捕えられた敵がいる場所へと向かうのだった。

54th bullet それぞれの夏 - 紅葉編 - ?

メールで指定されていた場所へと来る途中に「面倒だよ、面倒すぎるよ」と言っていたのだがアインに途中で起こられてしまい言うのをやめる。

マスターズ 教務科。この武偵高の中で生徒からは3大危険地域の一つと言われている場所・・・らしいのだが、いまいちどこが危険かわからないまま毎日疑問に思い続けているのは余談なのだが。その中である教師を探す。

「綴ーいるー?」

「ああ〜? やつときたのか・・・ついてこい」

視界の端に現れた綴（先生）に言われたとおりに後ろをついていくと周り少し雰囲気の違いがする部屋の前まで来た。

「ここにあいつらのリーダーと思われるやつがいるから・・・後は好きにしろよ」

来た道を帰っていく綴（先生）の事は気にしないままドアを開ける。中には何の拘束をされていなくても一人の男が立っていた。

「はい、こんにちわ〜。今からいくつか聞きたいことがあるので、嘘をつかずに知っていることを全て洗いざらい話してね」

「いいだろう。だがその前にこちらの身の安全を確保すると約束する」

「嘘を吐かなければ・・・ね」

「分かってるよ」

男が元から置かれていた椅子に座ると少しの間を置いてから質問をすることにした。

「一つ目、なんで私達の事を狙ったのかな」

「雇われたからだ。だが、依頼主の顔を見ていなければ名前も知らない」

「へえ。じゃあ二つ目、私を狙撃したやつは誰？」

「何を言っているかは分らんが、俺たちの中に狙撃手スナイパーなんていないはずだ」

「・・・次、あの戦車はどこで手に入れたの？」

「俺たちが指示通りに動き配置に着いた頃にはすでにあそこに置かれていた」

『嘘は言っていないようですよ』

アインがそう判断したのであればそうなのだろう。アインには相手の心拍数や表情等の全ての情報を調べてもらっている。

「私が聞きたかったのはそれだけ・・・君は何か聞きたいことって何かある？」

私がそういうと男は怪訝そうな顔をしてこちらを見てくる。

「俺は仮にもお前を殺そうとした奴だぞ。そんなやつにお前は自分の事をほいほいと教えるというのか？」

「そうだよ。それに現に君たちは私を殺せてないしね。それで、何か私に聞いておきたいことってある？」

「・・・ならば名前と所属、そしてお前が狙われた理由を教える」

簡単なことしか聞いてこなかったことに内心がっかりしたのだが、逆にそれだけでいいのかと思ってしまう。

「それだけなんだ・・・まあいいけど。名前は椎名紅葉、所属は・・・いちを『執行者』所属でいいのかな？狙われた理由はありすぎて私にもわからないんだよね」

「ならば、お前が例の・・・」

相手の唇に人差し指を押し付けそれ以上先の言葉を言わせないようにする。

「それ以上は出来るだけ言わないで欲しいんだよね。教師には教えているけど生徒は一部を除いて知らないんだから・・・さてと、もう話すこともないだろうし帰っていいよ。君たちの罪に関しては今回は握りつぶしておいてあげるから」

「・・・ならば、そうさせていただけよう」

男が出ていくのを確認してからそこらじゅうに散らかっている書類が入っている段ボール箱を椅子代わりにして座る。

『主、相当疲れていますね。今日のところは一旦帰宅して休むのがいいと思います。明日からこのことに関する書類作業を開始すればいいと思いますよ』

「うーん・・・だけど今から取り掛からないと今週中に終わらないよ?」

『電子上でもよろしいなら私がやりますが・・・』

アインの言っていることが出来るのであれば簡単に片づけられるのだが、実際そういうわけにはいかないのでアインも最後の方を濁して言った。

『しかし何事にも一番は健康ですよ。体調等を崩してしまつては元

も子もありません』

「それは分かってるよ・・・だけど、早く終わらせて普通に遊んでみたいじゃないか」

『分かりました。私はもう何も言いません。後になってから私の言っていることを聞いておけばよかったなどと言っても知りませんからね』

絶対に体調を崩さないと心に決めて書類の山に挑みにかかった。

全てを片付けるのには1週間程の予定だったのだが、途中で熱を出してしまい結局2週間もかかってしまった。

・・・アインの言う事は大体当たるとこのことを機に思い知ったのは余談なのだが。

椎名様ったら風邪が治ったと思ったら勝手に出かけてしばらくの間帰ってきていませんし。

アインさんが大丈夫と言っていましたから大丈夫なのでしょうが・
・すこしですが心配です。

2人がどこに行っているかを考えていると携帯に椎名様からメールが来たことを告げる着信音が鳴る。

内容を確認すると、

『今日キンジの退院日だから私の代わりにお祝いに行っておくこと。それとキンジと白雪が困るだろうからそのことに関して何とかしてあげてね。じゃあ、幸運を』

カレンダーを見ると8月22日で確かにキンジさんの退院日だった。とりあえず制服に着替えてから武偵病院に向かう。

病院に来てみると出入り口に星伽さんが待機していた。

「星伽さん、おはようございます」

私が近寄って来ていたことに気付いていなかったようで、話しかけるとビクツと体を震わせてからこちらの方を見てきた。

「あ、おはようございます・・・えーと」

「1年の桐谷京子です。椎名様のお世話係をしています」

お辞儀をしてから自分は知っていても星伽さんとは初対面だという事を忘れていたことに後悔をする。

私が顔を上げると丁度キンジさんが出てきたところだった。

「キンちゃん、ご退院おめでと〜ございます!」

星加さんが90度近くの深いお辞儀をしてキンジさんを出迎える。

「あ、ああ。ありがとうな白雪。えっと、お前は確か椎名とよく一緒にいた・・・」

「桐谷京子です。このたびはご退院おめでと〜ございます。椎名様もこちらには来ていらっしやいませんがご退院をお祝いするとの伝言を預かっております」

私も星加さんほど深くはないけれどもお辞儀をする。

「そういえば白雪、お前が作ってくれた漢方の材料って小香港の袋に入ってたよな。台場まで一人で行ってきたのか?」

「う、うん。最初は不安だったんだけど、ちゃんとお買い物できたよ。だって私はキンちゃんの専属看護師なんだから、だから何でも平気なの」

専属看護師ですか・・・キンジさんは相当のやり手のようで・・・キンジさんと星加さんが2学期に向けての話をしながら武偵高の校舎の間を歩いていると教務科の掲示板に『警告』の文字とキンジさんの名前が、

「キンジさん、あその掲示板に貼ってあるのって・・・」
「ん?」

星加さんも一緒に指をさした方向を見ると、2人ともこの世のものでは無い物を見たような表情になる。

そこに書かれている内容が

『 8 / 20 時点での単位不足者 遠山キンジ 専門科目 (探偵科) 1 単位不足 』

キンジさんは一度目をこすって見直し、星伽さんは目をまるにして見ている。

二人揃ってアタフタしているのを観察しながら張り紙の詳細部分を読むと、カジノでの警備で営業を円滑に継続させることが出来なかった為に単位半減。と書いてあった。

「あの、クエスト依頼探すの手伝いでしょうか？」

「ぜひとも頼む！」

そういうわけで依頼を探すことになりました・・・

キンジさん達と共に情報科で探したのですが、結局夜までかかっても結局見つからずキンジさんの部屋にあるPCで探すことになりました。

サイド紅葉

女子寮のとある一室のベランダにて・・・

『主、これは覗きという行為ではないのですか？』

「大丈夫、問題ない・・・それに見てるのだって男子寮じゃん。まあ、今は女子しかないけど・・・」

『問題アリです』

ベランダにある柵を台替わりにしてHK416のスコープで男子寮

の一室を見る。

そこには本来居るはずの部屋の主が居ない代わりに3人の女子がいる。

「キンジの事に関してはすぐに終わらないだろうけど、白雪の事に
関してはすぐに終わると思うんだよね」

PCの前に座りキンジでも単位が取れそうな依頼を探している京子をスコープ越しに見てから他の二人を探す。

「紅葉さん、ベランダで何をしているのですか？」

「うーん・・・覗き？」

後ろのガラス戸が開けられて話しかけてきたレキにそのままを伝える。

すると、チャキツという音と共に後頭部に冷たい物が当たった。

「とりあえず、あなたとは一度話し合ったほうがいいようですね」

「レキ・・・私は話し合いに銃は必要ないと思うんだけど・・・」

「」

スコープから目を放してベランダの床に416を置いて両手を上に挙げる。

『主、私からもこの件で話をしなければいけないと思っていました
ので・・・』

「『中に入って話し合いましたよ』」

「え、ちよっ・・・誰か助けてー！」

今どこか椎名様の声が聞こえたような・・・まあ、気のせいでしょう。

それよりもキンジさんの為に依頼を探さないといけません。

「そういえばお姉様、あの方は？」

お風呂に入っていたのかシャンプーなどのいい匂いがする粉雪さんが星伽さんに私の事を聞いたようです。

まあ、今まで気付かれなかったことが驚きなんですけど。

「私は桐谷京子と申します。以後お見知りおきを」

椅子に座ったまま軽くお辞儀をして、依頼を再度探す。

「キンジさん、そこで覗いていないで入ってきたらどうですか？」

廊下とリビングを遮る扉に向かって声を掛ける。

「・・・邪魔するぞ」

そう言っ入ってきたキンジさんを粉雪さんが睨んで、そのままそっぽを向いてしまう。

粉雪さんは相当キンジさんの事がお嫌いなのですね・・・

「どうぞお入りください。ただし、入室を許可するのは特別なんですからね」

「粉雪さん、ここは彼の部屋なのですよ？それにここは男子寮です。」

まず、私たちがここに居ることがおかしいと考えなかったのですか？」

「え、そ．．それは、そうなのですが．．．ただ．．．」

「ただ？」

「『男女、7歳にして部屋を同じにするべからず』です！」

そう言つて正座の状態のままキンジさんに背を向けて粉雪さんは女性しか映ってないドラマにチャンネルを合わせていた。

「キンちゃん、お煎餅があるよ。粉雪がお土産に持ってきてくれたの。桐谷さんも一緒にどうですか？」

白雪さんに呼ばれてガラス製の座卓の横に座る。

「依頼の方ですがやはり見つかりませんね」

キンジさんに結果を報告すると、当然ながら表情が険しくなつてしまつ。

「えつとそのことなんだけど．．．半日で0.3単位もらえるお仕事があつたよ」

「確か、武偵高への入学志望者の学園案内ですね。ですが、案内するよつな方はいないと思うのですが．．．もしかして粉雪さんですか？」

どうやら私が言ったことがキンジさんにとっては意外だったらしく驚いているようです。

「粉雪、お前武偵高に進学するのか？」

「そんなわけないでしょう。武偵高なんて大っ嫌いです。こんなと

ところが無ければ私たちはずっとお姉様と暮らせたのに……」

と、声を返してきた粉雪さんはドラマ見ていた。

それも、買い物のシーンに映っているデパートを。

その粉雪さんを横目に見つつ、白雪さんがキンジさんに小声で話していた。

「粉雪……伝言……届け……、私……連れ帰る……」

言い終わると、星伽さんがキンジさんに申し訳なさそうに手を合わせている。

途切れ途切れにしか聞こえないのですが、恐らくこのままでは星伽さんが星加神社に連れて帰られるかもしれないから武偵高や武偵の仕事がどんなものを教える感じなのでしょう。

「あ……キンジさん、私も同行しましょうか？」

と、何かを考えているキンジさんに提案してみる。

「桐谷、いいのか？」

「もちろん構いません」

「……分かった。じゃあその依頼受けさせてもらうな。粉雪、

明日の午前中付き合ってもらえるな？」

「はい、これはお姉様のご命令ですので……私はお姉様のご命令ならなんだって従います。お姉様のためなら何でも出来、きき、き」

最後の『き』の部分を突然繰り返しだした粉雪さんを見ると、ドラマでキスシーンが流れている。

手に持っているリモコンをこっそり拝借してテレビの電源を落とす

と、顔を真っ赤にしてキンジさんを見ると、

「ふ、ふふ不衛生です！不衛生ですっ！汚物は消毒ですっ！」

紅葉様に聞くヤンデレモードの白雪さんと同じようなことを言いながらキンジさんを蹴り始める。

とりあえず、粉雪さんを抱えて別の部屋に移動してなだめるのに1時間もかかりました。

翌朝、粉雪さんがキンジさんと共に行くことを頑なに拒否したので私が武偵高まで連れて行くことになった。

校門付近でキンジさんと待ち合わせて『学園案内』開始する。

^{SUR}超能力捜査研究科に関しては星伽さんが所属している学科ということもあって多少は興味を示したのですが、それ以外の学科には全く興味を示さず不機嫌の様子でかなりキンジさん・・・というよりは男の方と一緒にいるのが原因になっているみたいで。

キンジさんの代わりに私が説明すると多少は話を聞いてくれる程度。学校内を歩き回っている時も粉雪さんはキンジさんから常に1m程離れて私と並んでます。

そして、やつと最後の学科である通称『明日なき学科』である強襲^{アサ}科^{ルト}にやってきました。

「粉雪、ここでは足元に気を付けるよ。そこらじゅうに空薬莖が落ちてくるからそれに足を滑らして転ばないようにな。毎年見学に来た生徒がよく転んでるからな」

キンジさんが先に入り私と粉雪さんが中に入ると、A装備を付けた同学年の男子が5人ほどで殴り合っていた。

原因はどうやらアイドルの水着写真集を取り合っているのが発展してこうなったそうです。

「キンジさん、粉雪さん。ここで少し待っていてくださいね」

乱闘している男子たちに近づいて首元に手刀を叩きこんで気絶させて二人の元に戻る。

「お見苦しいところをお見せしてしまいましたね。彼らは銃が使えなくなった時に犯人との格闘戦を想定しての訓練をしていたのですよ。ですが、度が過ぎていらしたので止めさせてもらいました」

と、眉間に眉を顰めて心底けがらわしい物を見た。という表情になっっている粉雪さんに来るだけの弁解はしておいて、各訓練室に向かう。

様々な訓練室を一通り案内したのですが、全ての部屋に共通して粉雪さんが興味を持たなかった。

「以上で学園見学は終了だ。ほかに見たいところはあるか？」

床に転がっている空薬莢に注意しながら廊下に出て、キンジさんが質問をすると粉雪さんは首を横に振った。

「武偵高がいかに乱暴な場所かがよく分かりました」

乱暴な場所ですか・・・この程度の事で乱暴となると私たちの訓練は何になるのでしょうか・・・などと内心で思ってしまう。

「乱暴って・・・少なくとも探偵科や情報科はそこそこ平穩だった
る」

「いいえ。彼らも結局は同じ穴のムジナというものです。金銭を得る為に武力を用いるという行為が卑しいものです。清廉たるべきお姉様が、こんなところにいるなんて・・・私には耐えがたいことです」

粉雪さんが武偵の悪口を吐き捨てるように言う。
確かに武偵の事でそういう偏見を持つ人は多くいる。

「だが、逆に考えてみるよ。供給の逆には需要がある」「キンジさん、これにて学園内の案内は終了のはずです」・・・そうだったな」

このままキンジさんが話すと口論になりそうな気がしたので、それを無理やり中断させる。

そして、代わりに話をする。

「それと粉雪さん。ここに星伽さん・・・白雪さんがいる理由は彼女自身がしたいと思うことをするために、ここにいることを望んでいるからです。もしもあなたに目標があつたとして、それを途中でやめる。と言われて簡単にやめることができますか？」

「私ならやめることが出来ます。それにあなたが言っているようなことをお姉様が望んでいるわけがないのです。とにかく私は武偵が、武偵高が大っ嫌いなのです！このような場所さえなければお姉様は星伽を出て行ってしまい・・・私には分かります・・・武偵である遠山様に誑かされたせいで、帰ってこなくなったのです！」

粉雪さんが、キンジさんを指さしてそう叫ぶ。理由は理不尽だがそれも子供の・・・八つ当たりなのだろう。

自分の好きな姉が東京に、武偵高に行ってしまったいその姉に怒ることもできずに、ただその矛先を別の物・・・つまりは武偵・武偵高に向けている。

まあ、分からないこともないのですがね・・・

「とりあえず、帰りましょうか。出口はこちらです。足元には十分気を付けてくださいね」

「はい・・・それと遠山様。お仕事が終了したようですので、お伝えしておきたいことがあります」

「なんだよ」

「実は昨夜、遠山様に『託』がありました。星伽の巫女の義務によ

り1昼夜内にお伝えしなければいけません。なので少々唐突ですが、今お伝えします」

かなり不機嫌そうな声で言うと、キンジさんも振り返る。

「キンジさん『託』とはなんなのですか？」

「ああ、占いみたいなやつだよ」

と、キンジさんに聞くと分かりやすく教えてもらおう。

「遠山様は今月中に求婚されます。ただ、お姉様ではないことは確かです」

粉雪さんが少し頬を赤らめて視線を逸らしつつ言う。

もし、この場に神崎さんがいたら大変なことになっていたでしょうね。もしも、いたとしたらこの場でM1911を乱射されかねませんからね。

しかし、キンジさんに求婚する女性が白雪さん以外にすることが驚きです。よほどの物好きな女性なのでしょう。

「それが誰なのかは知らないが、それ以前に法律上男性は18歳以上にならないと結婚出来ないんだよ。だからその『託』はハズレだ」「ハズレ?.....私の事をバカにしているんですか!？」

と、キンジさんに詰め寄り問いただそうとする。

「とりあえず、落ち着いてください。今ここでもめても意味が無いでしょう.....って」

サマーセーターの中に手を入れて短刀の柄を握りしめ、一歩踏み出

したその足元に50口径の大きな薬莢があつた。
その薬莢を踏んで、

「きゃあっ!?!」

片足を後ろに滑らせてキンジさんの方に倒れこむ。

粉雪さんの右肩を掴んでそれを止める。が、同じように倒れないようにしようとしたキンジさんとぶつかってしまい、私が倒れる。

「悪い、大丈夫……か?」

「だいじょうぶ……って、どこを触ってるんですか!」

自分の上に覆いかぶさるようにして倒れたキンジさんの手が胸を触っているのが見え、殴り飛ばす。

2m程後ろに吹っ飛んだキンジさんから5m程離れる。

「少しそこで頭を冷やしてください! 私たちは先に帰らせていただきます!」

粉雪さんの腕をつかんでその場から離れてとりあえずキンジさんの部屋に帰る……

寮に戻ってからガバメントと小太刀2本の手入れをして、キンジさんをいつでも殺れるように準備だけは怠らずにしておく。

・・・あんな人死んでしまえばいいのです。

途中で粉雪さんが「遠山様に触られたので京子さんには御襖が必要なのです！」と言って一緒にお風呂に入ることになった。

5回目くらいの時にキンジさんが何かを言ってしまったが、粉雪さんがキンジさんがどうとかと言い返す。

そのまま後数回程入ったあとで白雪さんが帰ってきた。

「お姉様、お帰りなさい！」

粉雪さんが帰ってきたばかりの白雪さんに勢いよく抱きつく。

胸に顔を思いつきり埋めて、キンジさんと接する時とはまったく違う甘えた表情で白雪さんを見上げている。

白雪さんは「もう、粉雪はお姉ちゃんっこですね〜」と言いながら頭を撫でている。

わたしも紅葉様をあのようにしてみたいものですね・・・。

夕食を頂いた後で、皆さんに少し出かけると言って屋上に来た。

「誰にもつけられていないな？」

「当たり前でしょう。これでも現当主の娘ですよ・・・ですが、数名にはばれているでしょう。彼女たちの目を誤魔化すことは出来ませんかから」

声を掛けてきた男の姿は見えないがそれでも問題は無い。

「そのうちの一人があれだろう。やつらは化け物だ・・・我々の手で狩るには力が及ばないからこそ化け物同士で喰わせあう。それだけの為の同盟」

「口を慎め。当主の考えがどうであろうと私の考えとは違うという事を忘れないでいてほしい・・・それに、彼女たちにもこの会話が聞こえている可能性もあることはわかって言っているのだろうな？」

事実、同盟は互いが危機に瀕した時に助け合う。という名目上で結ばれているが、父の考えは私達に勝てない敵であるものからの危険を紅葉様に押し付けるいう事らしい。

もちろん私はその考えとは違う意思をもっているのだけれど・・・

「まあ、いい。で、一体何をしに来たのかな」

「緋弾についてだ。当主からの伝言を伝えに来た」

緋弾ですか・・・ということとは神崎・H・アリアが緋弾を受け継いでいることを当主はどうやって知ったのだ？

当主は・・・父は一体何を企んでいる？

「『緋弾を内に秘めているあの娘は緋弾によって死ぬ。そして緋弾は潰える』とのことだ。・・・京子、当主を信じるな。これ以降里には帰るな・・・恐らく、こちらの方が安全だ」
「分かった」

やはり、このことを紅葉様に知らせておいた方がいいのかな・・・

「それと、先ほどまでお前がいた部屋から星伽の少女が一人で出て行ったぞ？」

「え？」

と、周りの音を聞くことに集中すると微かにドアが閉まる音が聞こえてきた。

急いで落下防止柵を乗り越えて下に降りる準備をする。

「じゃあ、俺は帰らせてもらおう・・・元気だな」

サツと微かな音を立てると同時に気配も消える。

後ろの柵にワイヤーを引っかけて降りられるところまで降りてから飛び降りる。

何事も無かったように寮前の街灯にもたれながら粉雪さんが来るのを待つ。

5分もしないうちに降りてきた粉雪さんに偶然を装いつつ話しかける。

「こんばんは、粉雪さん。お出かけですか？」

「え、えと・・・その・・・」

私に話しかけられたことに驚き、慌てて何かを言おうとする。

「白雪さんたちには内緒にしますから大丈夫ですよ。なんなら私もお供しましょうか？」

相手の緊張をほぐすためにも微笑みかけながら後ろにいる二人が気付かないように二人の場所を探る。

遠からず近からずといった場所にいるのを確認すると、不安にならないように粉雪さんの手を握り歩き出す。

そのままモノレール乗り場に着くと、切符の買いかたを教えつつ台場行きに乗り込む。

もちろん、キングさんも違う車両に乗っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3017u/>

緋弾のアリア -偽りの武偵-

2011年10月20日02時01分発行